

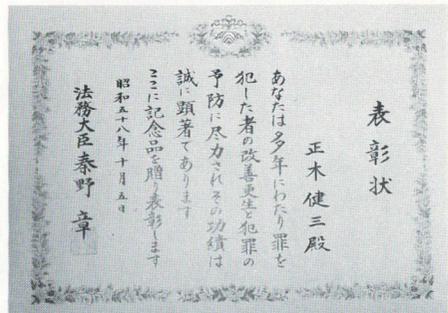
鐵は熱うらに打て

創業七十年史

株式会社 正木鐵工所



法務大臣表彰祝賀会での正木健三社長夫妻(昭和58年11月)



永年保護司として尽力した功績を称えた
秦野章法務大臣の表彰状

正木健三社長夫妻
法務大臣表彰祝賀会
昭和五十八年十一月



永年下請会社の表彰 △



戸田建設(株)会長戸田
利兵衛氏の祝辞▷



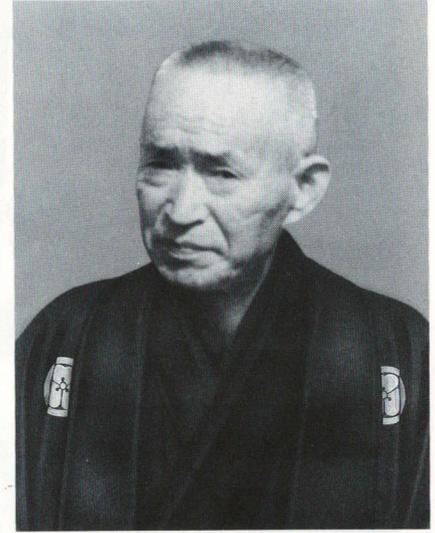
大谷重工業(株)大谷米一専務の祝辞 △

創立50周年記念 祝賀会

昭和41年10月22日
於 砂町工場



正木ませ(正木愛次郎の妻)



創業者・正木愛次郎



正木 茂(当社二代目社長)

創立60周年記念 祝賀会

昭和52年11月18日
於 ロッテ会館



△正木健三当社社長の挨拶



物故社員慰霊祭▷



◁パーティ風景



揃いのハッピーを
着た当社社員▷

まえがき

当社の創業七十周年は、昭和六十二年でしたが、諸般の事情から本年十一月にとり行う予定で、友人の薄衣佐吉氏に相談したところ、「あなたが今まで生きてきた軌跡を書き残すことと、自分の願いを後の皆様に残しておくことが良い贈り物ではなからうか」という意見でした。

しかし、原稿を書くということは、私にはかなり難しいことで、地域法人会から依頼された原稿でも思うように書けず、まして「本」となると、二・三百頁は必要だし、振り返ると、「何にもやって来なかった自分」に気がきます。

薄衣氏のいうように、「何にもやって来なかった自分」をそのままに書いてはみましたが、資料等を揃える時間もないので「随想」を書かせて頂きました。勘違いとか、間違いもあると思いますが、ご寛容下さい。

さて、現在の社会情勢は、きわめて厳しい環境の中にあり、大企業が倒産したり、転業したりしています。そうした中であって、天上天下唯一の私達に与えられた、かけがえのない、いわば「命」ともいべき職業を、採算にあわないことを承知の上で取り組んでいる私達の心境

は、辛さというよりもむしろ惨めさが先に立ちます。しかし、いつまでもこのようなことが続くとは思ってはいませんし、基幹産業という私達の職業をどこまでもやり通す精神で、日々これに取り組んでおります。競争激化の当業界において、今日ありますのは、今迄お育て頂きましたお得意様各位のご愛顧の賜であり、また当社従業員を始め、協力企業各位の支えによるものであります。

改めて心から感謝の意を表し、衷心より厚くお礼を申し上げます。こうしたご恩に報いるべく、より一層精励し、研鑽して一丸となって社会のお役に立たせて頂く覚悟でおりますので、皆様方の旧に倍する御指導、御鞭達を切にお願い申し上げます。

昭和六十二年九月二十一日

株式会社 正木鉄工所

代表取締役 正木 健三

〔発刊によせて〕

江工連に一層のご尽力を



江東区長 小松崎 軍次

（株）正木鉄工所創立七十周年、そして、会社とともに歩んでこられた正木社長さんの古稀を記念し、「鉄は熱きうちに打て」を発刊されますこと、心からお祝い申し上げます。

貴社の輝かしい七十年の歴史の中では、戦災により、不幸にして初代社長ご夫妻のご逝去、工場全焼という会社にとって大きな打撃もございました。しかし、正木さんが戦後社会の混乱の中、いち早く会社を再建され、二代社長（実兄）と共に大変ご苦労なされ、正木鉄工所の礎を築かれたのであります。そして、昭和三十六年十二月、正木さんが三代社長に就任、高度経済成長期もございましたが、会社が順調に発展し、今日の降昌を築かれたことは、正木社長の仕事に対する熱意とご努力の賜と存じます。

一方、業界においては、昭和四十年代後半のオイルショックによる経済の低迷、工場移転跡

地に集団住宅の建設にとまなう住民意識の変化、環境、公害問題などで工場経営も次第に厳しくなり、鉄工業界も工場移転、転業するものも出てまいりました。このような状況から、正木社長は業界の発展と結束を図るため、四十九年に東砂工業会、さらに五十四年には江東区工業連合会を結成し会長に就任、江東区の将来と会社経営などについて講演会およびビジネススクールを開催し、区内中小企業の振興発展に精力的に尽力されてこられました。

また、地域においても昭和三十六年以来、保護司として更生保護のお仕事に携わり、その功績により、区政功労者表彰、法務大臣表彰を受けられるなど、各界にわたり活躍され、そのご苦勞に対し、心から敬意を表する次第であります。

今日、江東区は二十一世紀に向かって「新しい下町・江東区」の建設に住民、行政一体となつて取り組んでおり、なかでも中小企業の振興を区政の重要課題として、その施策の推進に努めてまいりたいと存じますので、創立七十周年を契機に、正木社長にはこれからもご健勝で、豊かなご経験と持ち前の実行力をもって、会社のますますのご繁栄と江東区工業連合会の発展のため、一層のご尽力を賜わりますようお願いし、お祝いの言葉といたします。

〔発刊によせて〕

貴社の益々のご発展を祈念

中部鋼鉄株式会社 元取締役社長
大谷重工業株式会社 元取締役社長

打浪 吉朝



先日正木さんから電話があり、「(株)正木鐵工所が本年十一月に創業七十周年を迎えるにあたり、前回の六十周年には社史を刊行したが、今度は少し趣向をかえて社業記録とご自身の幼年時から今日までの自叙伝風のことを織混せて記念誌にしたいと想立ち、目下毎日早起きをして出版社前に次から次へと想い出すままを書綴っているのだが、是非何か書添えてくれないか」とのご依頼がありましたので、お恥しいことですが、こゝに拙文を呈上いたします。

正木さんと私との出会いは、昭和四十三年に私が請われて大谷重工業(株)の再建を引受けた時、正木さんが会社再建協力会の代表者として私と一緒に関係官庁や銀行方面、その他を歴訪して再建への支援を懇請して廻って下さったのが、ご懇意になるはじまりでありました。

以後今日まで約二十年もの長い間、毎年の益々暮にはお忙しいなかを必ず拙宅へお越し下さつ

て、一時間ぐらい時局談、会社経営上の苦心談、関係諸団体の事、書道、ゴルフ、自動車旅行など趣味の話で愉快に過ぎて下さることになっており、私の家人もご光来を心待ちにお待ちしているような間柄になっております。

正木さんは、全く律義で世話好きで根っからの江戸っ子風の人であると思います。会社の創始者である父愛次郎翁のこと、実兄の先代社長のことなども今度の自叙伝に十分織込まれることと思いますが、亡き父兄を追慕されながら、ご自分の会社経営に対するご苦心の経過を記録されることは、まことに意義深いものがあると信じます。また趣味の面や社会奉仕のことにそれぞれ情熱を傾倒されておられることを記録に残されるのは非常に興味深く期待しております。

会社の益々のご発展と正木さんご自身の彌増すご健康や人生行路の一層のご充実を心から祈りして止まぬ次第であります。

〔発刊によせて〕

正木家との七十年



株式会社 ホテル・ニューオータニ
代表取締役社長

大谷 米一

会社創立満七十二年を迎え、誠にお目出たく心からお祝い申し上げます。

㈱正木鉄工所さんと私の大谷家とは、本当に永いお付き合いでございます。正木さんのご先代が会社を創業されたのが、大正五年で深川毛利町でありました。私の父が、大谷重工業㈱の前身、(合)東京ロール施削所を始めたのも同じ深川毛利町で大正四年のことです。お互いの工場も目と鼻の先でありました。同じ年代に事業を興したこともあって、兄弟みたいにお互いに何かと良き相談相手であったと、父から聞いております。以来、親子二代にわたって深い交誼を賜わっております。

私の母は、今でも元気で当年九十二歳ですが、正木健三社長ご自身が橋場の母のところまで、毎年ご丁寧なるお年賀にご来訪下さることは、誠にありがたく、この紙面をお借りし

てお礼を申し上げます。

正木鉄工所さんは、鉄骨建築、橋梁工事などの一流メーカーであることは申し上げるまでもありません。大谷でも数々の工場や圧延設備、起重機に至るまで多くのものを製作していただきました。正木さんの手によって一番最初に造られたものは、大正時代のことでは現存していませんが、大谷創業時の深川工場の鉄骨であります。

ごく近年のものでは、紀尾井町のホテル・ニューオータニにある庭園の太鼓橋もその一つであります。擬宝珠の付いた真つ赤な橋で、池の水に映え、まわりの緑によく調和し、ホテルのガーデンを一段とすばらしくして下さいました。またバーベキューを始めましたときに肉を焼く鉄板が市販では見当らず、正木さんにお願いで、油のミゾをつけた厚さ四センチもあるステーキ用の特殊鉄板を作っていただき、今でも営業に役立っております。

正木さんの長い歴史には、M・A式鉄骨はじめ幾多の輝かしい業績がありますが、私の母校、早稲田大学大隈記念講堂の鉄骨工事を、私が入学するかなり以前の大正十五年に施工されておられます。

また、このようなハードな分野ばかりでなく、芸術的な細心の技術を要するものもあります。それは、一億年前に生息し、ソビエトで採集された肉食恐竜「タルボザウルス」の全身骨格を組立てられ、外側からは一切見えない鉄心を埋め込んだ苦心作であり、現在上野の国立科学博

物館、他に三体も展示されております。

科学的精巧さ、そして芸術的感性が求められる素は、何んといっても正木社長が三十五年間「筆墨の道」を極められた書道の大家であるからだと思えます。現在まで七百余名の弟子を育てられました。そのお弟子さんの中には、大谷重工業(株)の社員も多数教えを乞い、段位を頂戴した昔なつかしいことなどを思い出します。

憶い出すままに書き綴りましたが、正木さんとの回顧にはつきないものがあります。七十年を越えた貴社の光輝燦爛の歴史は、初代愛次郎翁、ご長男の故茂社長そしてご当代の健三社長の日頃の研鑽の賜であると思えます。

これからもこの七十年を契機に社業の益々のご隆盛と、正木家のご多幸を心よりご祈念申し上げます。

〔発刊によせて〕

日本から世界へ

社団法人 倫理研究所

理事長

丸山 竹秋



今私の机上に「秋津書道」という秋津書道会の機関誌が開られていきます。これはその創刊号で昭和二十八年一月号なのですが、もちろん復刊のものであります。その復刊創刊号の中に「本舎支所所在地および会員名簿」という欄があり、その三頁目に、

江東支舎 東京都江東区亀戸町七丁目六〇番地として、

名誉同人 伊藤金五郎

同人 正木健三

〃 滝沢元治郎

その他の名前がかかげられています。正木ひさ子氏の名も出ています。つまり正木健三氏は実際に書道を学び、書をかく人の筆頭として、この時から正式に勉強がはじまったわけです。

三十五年も前のことです。

正木君といったほうが私にはピンとききます。私より若干年輩ではありますが、書道をはじめる前から倫理研究所の会員となり、江東実践部（支部）の青年会員として研鑽しておられたかたです。「先生」とか「さん」とか呼ぶのは見当ちがいのような感じがします。そこで、ここでは若い時からの同じ仲間として「君」として呼ぶことを許して頂きます。

書道にいそまれる前（昭和二十七年の三月）には、その江東実践部の青年会長であり、普及員の資格をもっておられました。しかもその年の十一月には全東京青年会の会長として、熱烈に倫理普及の実績をあげてこられたのです。

昭和二十九年の九月には、東部青年会の連合会長となり、一カ月後には江戸川実践部の普及委員長の役を引き受けられ、そして指導員の資格を得られたのです。さらに昭和三十二年には東部実践部連合会の常任委員となり、九年後には江東地区の担任として活躍されました。

この間、書道にもはげみ、二十九年には早くも添削同人として指導面も受けもつに至りました。会社の仕事のかたわら、こうしたご活躍をするとは、社会奉仕の心が熾烈でなければできないことです。しかも保護司まで引受けているのです。

こうした多忙の中にお子さんがたのことについてのさまざまの体験、大谷重工業株の倒産問題で総理大臣に陳情できた体験、その他いろいろの実践によって信念はますます強固となられ

ました。昭和五十六年には江東支所付指導員となって毎年御殿場の富士高原研修所におもむき、研修を怠りません。

一方、書道のほうにはさらに力をそそぎ、江雲と号して早朝から自からの研鑽を重ね、昭和四十九年より霞ヶ関ビル内における秋津書道展に毎年出品を続けておられます。また、その書道会幹部研修会には、三十九年の熱海より千倉へと毎年参加を重ねて今日に至っています。もちろん書友の指導も熱心につとめて、四十四年七月に江東公会堂において第一回の墨東ブック書道展を開いて以来、両国公会堂へと会場を移したりして毎年その書道展を主催しており、私もその都度招待を受けています。

私の手もとは別に正木君の正式の履歴書もあって、事業のみならず一般社会への貢献に対し、数々の表彰をうけていることに瞠目せざるを得ません。しかし紙数も限られていますので、こうした数々は省かして頂きます。

かつてある会合があつて、終わりのほうで私は挨拶をしました。

「……この倫理は、日本全国に広めなければならぬのです。そうした大使命を私たちはもっているのです。」

会合が終つてからすぐに正木青年が私のもとに走り寄つてきた。

「今の言葉は訂正して下さい。なぜ全世界とか、世界各国にとおっしゃらないのですか。」

私は「そのとおりです」とうなづくばかりでした。それから年月がたつて、現在この倫理は米国、韓国に普及され、中華民国（台湾）では実践活動が活発となり、同時に中華人民共和国政府機関（社会科学院）の深い関心をもつところともなつて、次第に世界に広まりつつあります。

現在、東京は神田の倫理文化センター（倫理研究所本部）地上八階地下二階のビル鉄骨は、正木鉄工所より入れられたものです。その建築工事の鉄骨を思いながら、今その鉄骨内で、謹んでこの拙文を草した次第です。「倫理を全世界に！」とあつく念願しながら……。



〔発刊によせて〕

さらなる発展を期待



衆議院議員

柿沢 こうじ

㈱正木鉄工所が創業七十周年を迎えられたことに對し、お祝いの言葉を申し上げます。

正木健三社長は、創立者の正木愛次郎氏の創業精神を受け継がれ、今日まで半世紀以上もの間、数々の経済変動を乗り越え、社業の発展に尽くされてきました。また社業のみならず地域、業界の発展に寄与され、とりわけ江東区工業連合会を組織し、会長としてご活躍中であり、まさに江東区活性化のリーダーと呼ぶにふさわしい方であります。私も地元選出の国会議員として正木社長から永年にわたり御指導をいただいておりますが、この機会にあらためて感謝申し上げますとともに、この記念すべき年を迎えられたことに對し深く敬意を表するものであります。

さて、昨今のわが国をとりまく経済情勢は非常に厳しいものがあります。特に「円高・ドル安」による輸出低迷という深刻な問題は依然として続いており、まさに国をあげて経済政策を

見直さなければならぬ時期にきております。また「内需拡大策」の拡充、「財政再建」をめざした均衡ある財政政策、そして外にむけては世界のなかでの日本の責任を果たすための「貿易摩擦の解消」や「バランスのとれた防衛政策の充実」など、どれ一つとっても解決を急がれる課題が山積しています。今こそ政治に課せられた責任を十分に果たすべき時であると痛感しております。

やがて来る二十一世紀の日本がたくましい成長を継続していくためには、いうまでもなく中小企業の皆様の安定した発展が不可欠です。その意味でも正木鉄工所が、この七十周年を飛躍台とされ、益々発展されますことを心より祈念致しまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

目次

□絵 正木健三社長夫妻／表彰状／創業者・正木愛次郎夫妻／二代目社長・正木茂／

創立五十周年記念祝賀会／創立六十周年記念祝賀会

まえがき

□発刊によせて

江工連に一層のご尽力を……………江東区長 小松崎軍次・3

貴社の益々のご発展を祈念……………中部鋼板株式会社 元取締役社長 打浪吉朝・5

正木家との七十年……………大谷重工業株式会社 元取締役社長 大谷米一・7

日本から世界へ……………株式会社 ホテル・ニューオータニ 代表取締役社長 丸山竹秋・10

さらなる発展を期待……………社団法人 倫理研究所 理事長 衆議院議員 柿沢こうじ・14

□鉄は熱きうちに打て(創業七十年史)

創業者・正木愛次郎……………1

愛次郎の人間愛……………8

生いたち……………11

幼少時代……………20

中学生時代……………	41
働きながら学校へ……………	50
愛次郎の思い出……………	65
電気館……………	67
創業者の苦悩……………	75
仕事で千歳と釜石へ……………	80
ヒサ(妻)との出会い……………	85
母親の思い出……………	92
軍隊生活……………	97
東京大空襲……………	107
茂(兄)のこと……………	119
戦後の再建第一歩……………	122
朝鮮動乱で飛躍へ……………	126
MA式鉄骨の実用化……………	130
MA式バックについて……………	134
海外に学ぶ……………	137

創立五十周年を迎える……………	157
大谷重工業(株)の再建問題……………	158
結婚と自宅新築……………	184
優良法人第一号……………	187
恐竜の制作(タルボサウルス)……………	192
今坂義雄会長の死……………	194
東砂工業会の結成……………	195
創立六十周年記念行事……………	197
マンション建設と工場の立場……………	199
江東区工業連合会の結成……………	201
当社に貢献された人々……………	207
わが社の経営理念……………	212
あしがき……………	215
七十年の歩み……………	217
工事経歴概要……………	235

創業者・正木愛次郎

小田原市の市営グラウンドの裏手に小高い丘がある。ここは、今でも「蜜柑山」といって酸味の強い蜜柑の産地である。明治時代、山田孝之助がここに住居し（北条早雲時代の名残あり）、明治十五年に孝之助の次男が誕生、「愛次郎」と命名された。農家のことゆえ、愛次郎は十四才頃には小田原市の油屋に奉公し、油を担っては売り歩いてきた。十八才の頃、自転車を初めて見た時、「これだ」と気付き、自転車店を開業する。

当時としては、自転車店は時代の先端を行くものであるから、飛ぶように売れたが、若さの至りから、ついいい気になり、閉店し、捲土重来を期して徒歩で東京へ向った。

横浜まで来た時、姉が嫁いだ糸久家に立ち寄る。姉のはまさんは、心を鬼にして招じ入れず、玄関に愛次郎を立たせたまま、握り飯三個を与えて、壮途の餞けとした。

愛次郎は、姉の気持が判らぬではなかったが、乞食扱いされたので、必ず一カドの者となって「見返すぞ！」と発奮した。

かくして、東京・本所の関根氏の所へ弟子入りを許され、本格的修業が始まったのである。

関根鉄工所では、仲間から中年者であるので白眼視され、かなり身に応えた修業の日々であったというが、人間形成の上には一皮も二皮も剥かれた時代であったことは、本人の人柄から

容易に察せられるところである。

愛次郎は、仕事を一生懸命になって覚えたので、数年にしてかなりの腕前を身につけた。そして、ここではもう覚えるものがないことを知り、惜しまれながら職工として一本立ちすべく、工場から工場へと修業目的の就職を転々と続けるうち、宮地鉄工所の土台を築き上げた山田孫太郎氏に奇しくも出会うこととなる。仕事も勿論、山田さんが先輩だから種々教えて貰ったが、とにかく両者は呼吸がよくあった。孫太郎さんを「兄さん」と呼べば、愛次郎を弟と思う。人と人との情の交流が始まる。

山田孫太郎氏の奥様が、三河の出身で外山家の長女「ませ」とは幼な友達であり、ませの父、作太郎も当時八才の賢治とともに山田家に長逗留をさせて貰い、助けてもらったことがあった。こうしたことが縁となり、愛次郎とませは孫太郎ご夫妻の媒介で、「偕老同穴」の夫婦のちぎりを結ぶこととなる。

愛次郎は、物静かで行儀のよい、色は白く、人当たりがよかった旦那といった感じてあった。また派手好きで旅行をしたり、お祭りが好きで亀戸の芸者衆を呼んで、ドンチャン騒ぎを時々やった。

仕事もよくやるし、頭は切れて、商談はうまかった。鍛冶屋さんとしては気品があり、かなりの家柄であることは衆目の一致するところであったようである（山田てい様談）。

とくに「思いやり」という点については、苦労人だけに大変深いものを持っていた。例えば夕立にあった時など「自分は濡れても、人には傘を貸す」といった気風であった。また当時としては、鍛冶屋は労働もきつかったが、よい収入となった。そして、これを惜しげもなく使うのである。

夜越しの金は持たぬ

皐月の鯉の吹き流し

などと川柳にも残る位だったから、当時の職人さん達の収入の程度が鮮やかに浮き彫りされている。現在のような合理的な生活では到底考えられない、文明開化時代の日本の姿であったのでなからうか。

愛次郎は現在の毛利町（当時の猿江裏町）の長屋にひとまず新所帯を持つ。この長屋は、後の前川医院の前川藤平氏や浪花節の木村友衛さんなど前途に大きく胸を膨らませた人たちの集まった長屋であった。お互いに切磋琢磨し、前川藤平氏は医院を、木村友衛氏は、浪曲界に各々一流の人物として名を止めた（昭和十三年頃、両国公会堂での木村友衛氏の浪曲の集いでは、満員の公会堂で熱演され、演壇の化粧掛けに「贈正木鉄工所」が織りこまれていた）。

前川先生は当家の主治医となって健康に関する限り、先生に一任していたし、また的確な診断は東京市内にも名声が及んだ。

愛次郎は大正五年に至り、ささやかながら猿江裏町に工場を持つこととなる。これには周囲の多くの人々からの応援、援助がなければ、到底為し得ないことで親戚を始めとして、経済的にはかなりの迷惑をかけたことは、当正木家系統の全員が今日に至るも忘れてはならないと戒めていると同時に報恩の念は、片時も忘れるものではない。

当時、愛次郎はオートバイを駆使して、得意先、現場などを自らが先頭に立って精力的に回り、工場経営は軌道に乗り、着実に地歩を築いて行った。

工場を持った初期にボイラーを受注し、当時は多管式の鏡板に手作業（ハンドボール）で穴明けをしたものだが、愛次郎は仕事場に昼食の握り飯を妻に持たせ、ハンドボールをギッコンギッコンと前後に動かしながら昼食を食べる、といった風であった。

ところがそこへ、二人組の全く見知らぬ男がきてとやかく愛次郎に難癖をつけ、なかなか立ち退こうとしない。三十分も続いたので、愛次郎はいきなり傍らの鉄棒を取るが早いか、二人に躍りかかり、一人は脚を拂われて、跛を引きながら二人組は「覚えていろ」と捨てぜりふを残して逃げていった。

妻のませ、その弟の賢治と職人数名は、その夜は警戒して詰めていたが、何事もなかったようである。

愛次郎の信条は、「働いて金を得る」であり、働けない人たちには恵むことであった。

正木鉄工所には、外山賢治、栗山兄弟、内弟子七名を中心とした職人が、技術を向上させ、当時の新しい機械、工具なども数多く採り入れた。これに伴って腕のよい職人を採用し、かなりの発展を見ることができた。

愛次郎は、凝り性で集中力という点ではズバ抜けた面を持ち、正義、情愛の念に富み、寡黙実行型であった。また、その反面気が短いという人もいたが、それは気が付いたことはすぐに実行に移す「即行型」であるが故に、短気と受け取られたようである。

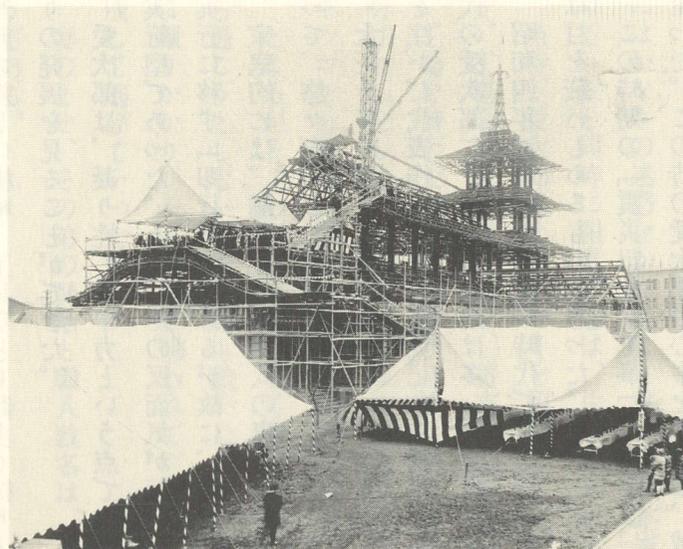
家庭的には、働きもので美人の妻・ませを娶って二男一女に恵まれ、岳父・作太郎を引き取って、悠々充実した生活を送っていた。

大正十年の東京大震災のあと、愛次郎はその復興に、大いに活躍した。とくに当社が、心血を注いだ代表作「東京大震災記念堂鉄骨工事」は、寸分の狂いもなく、無事完成した。この時代の愛次郎にまつわる逸話が多いが割愛する。

昭和四年は世界大恐慌の時代で、街には多くの失業者が溢れ、物価は下落し、金詰まり現象は目を蔽わしめるものがあった。

この時期の「震災記念堂工事」の赤字は、如何とも致し難く、遂に工場は閉鎖の止むなきに至った。この時の愛次郎の心中を想えば、誠に遺憾の一言に尽きるが、恐らく心中を掻きむしられ、断腸の思いであったに違いない。

朝鮮兼二浦製鉄所に小林治郎氏（現三昌工業(株)社長）を主任とする建設従業員十数名を送った。この年に愛次郎は脳溢血で倒れ、再起のため静養した。昭和十八年に、茂専務が出征した（昭和二十三年帰還・昭和三十六年逝去）。そこで愛次郎は静養生活を打ち切り、昭和十九年現大島工場に戻り、昭和二十年三月、東京大空襲によって愛次郎は妻・ませとともに幽界に去った。



東京大震災記念堂の上棟式（大正10年頃）

時に愛次郎は、四十八才であったが、従業員や家族をかかえてその後の事業復興は、強固な精神力と体力によって行なわれ、再建に成功し、昭和十年現在の砂町に六百五十坪を入手した。その頃、満州事変がぼつ発、日中戦争に突入し、増産につぐ増産で日本の産業界は未曾有の活況を呈していた。

当社は日本化工(株)、藤倉ゴム工業(株)、日本製鉄(株)製鉄所、日曹製鋼(株)など、多数の顧客を得て経営も順風満帆であった。

昭和十四年には、釜石製鉄所線材工場の工事を契約し、国内産業も遂次戦時型に移行していくうちに、昭和十六年に入って健三常務が応召した。昭和十七年になって日本製鉄が朝鮮兼二浦へ進出したため、当時釜石製鉄所の技師長だった今坂義雄氏に当社は追随し、

愛次郎の人間愛

昭和八年頃、現大島工場に愛次郎は自ら大工さん（大島工場の真北に住む清家さん）と二人で工場建築を始めた。屋根は鉄骨だったが、その他は木材で、その多くは猿江工場の解体材を利用して、合掌も同材を利用した。

当時、戸田組（現戸田建設）の現場主任であった大隈為人氏が、愛次郎の移転を知って工事現場の廃材をトラックに二台山積みにして与えた。愛次郎は文字通り自力で、工場と掘立ての簡単な事務所を建て、工場のコンプレッサー、風車などを動かす準備ができると、仕事を再開した。愛次郎は農家の次男坊として生まれたので、こうした時にも経験を生かすことができたのである。

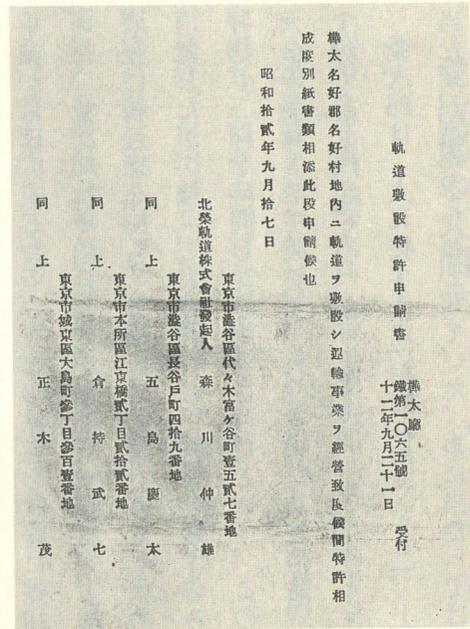
工場に健三も出るようになって、朝は始業前に事務所の掃除をする。その頃、石山（この人は正木家の遠い親戚にあたる人）という青年が（二十四才位だったか）入社してきた。夕方五時、終業である。石山氏が帰還につくと、雨が降りだした。秋雨である。

健三は愛次郎にいつつけられた。「石山君に傘を持っていつて上げなさい。」健三は走ってあとを追いつつ、軒先で雨宿りをしている石山氏に傘を手渡し帰った。ほどなくすると、事務所へ石山氏が現れた。「只今は本当に有難うございました」と愛次郎に向かい、深々と頭を下げ謝礼した。

また工場では重量のある金敷が夜中に何者かによって盗難にあつてなくなった。朝、出勤してきた職人さん達は、早く警察に届け出るように事務所に知らせにきたが、愛次郎はかねてから覚悟はできていたのだろう。「届けなくてよい」といい、自分の工場に係わることで罪人を出しなくなつたに違いない。

昭和十二年、愛次郎は講道館の創始者・加納治五郎と接触を持つようになり、五島慶太氏、倉持武七氏などと共同で未開の北海道に鉄道を布敷し、木材、石炭などを内地に転送し、この事業がほぼ完成した上で、この鉄道を政府に売却するという雄大な事業計画が着々と進行していた。愛次郎はその打合せを加納氏と昼食をとみしながら行なうことが多く、そのため両者は互に親近感を持ち、加納氏の持論である「精力善用」という言葉の横額・軸物などをかなり頂戴したが、戦災で大方焼失し、軸物を残すのみとなった。加納氏は、さすがに柔道家らしく、井物で二杯を時間をかけ咀嚼されたという。この計画は、加納氏が第十二回オリンピック日本大会の委員として渡航し、大任を果たした帰路、船中で他界されたため中止となったことは返すがえすも残念であつたと思う。

愛次郎は、人に接するに「信頼を第一とし」、上下の別け隔てない言動を保ち、温情を持って当たり、誠実をむねとしていた。事に当たっては、剛毅そのもので如何なる事態であつても臆



軌道敷設特許申請書 (昭和12年)

すること、曲することなく、全力を傾倒して、前向きな処理をし、すべてを自分の責任とした。
 愛次郎の自慢話とか、愚痴を聞いたことが今までに唯一人としていない。しかも他人の話は、虚心になって聞き入るので相手は決していえなかったといわれている。



精力善用の軸物

生いたち

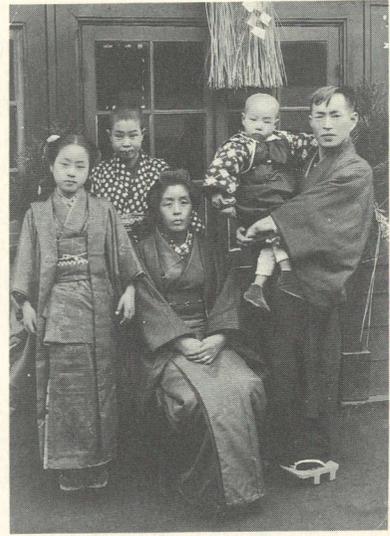
健三は大正六年十一月二十二日、東京市深川区猿江裏町二七五番地（現、江東区毛利二十六番地）で生まれた。健三には兄・茂（八才上）と姉・こう（五才上）があり、母・ませは当時三十三才であった。

健三は甘え放題甘えて育ったようで、三才になっても四才になっても、まだませの膝の上のっぺいたようである。近所の子供たちとよく遊んだが、特に動物が好きでシロという犬とよく遊んだ。シロがどぶ川に落ちた健三をひきずりあげたこともあった。

愛次郎は鉄工所を自営し、大変な勢いで伸びていった頃で、まだ若かったし、元気がつらつとして仕事に没頭し、ませの弟である外山賢二氏は愛次郎の片腕となり工場を切盛りし、また番頭では中村氏が事務の一切をとりしきっていた。工場は猿江裏町二七五番地にあり、工場の両側にずっと平屋建ての長屋が十軒ほど立ち並び、そこが職人の宿舍だった。両側にある長屋の突き当たりが工場長の外山賢二氏の家で、夫妻が住んでいた。

健三はませの父親に当たる外山作太郎さんと清宮商店（鉄材）の奥さんにも健坊くんと可愛がられ、恵まれた環境の中で育てられた。健三は今でもこんなことをおぼえている。

近所の子供たちがきゆうりのなまを丸ごと食べているのを見て、健三も欲しくなり、母親に



正木愛次郎一家(大正9年正月)

せがんで皮をむき、塩をもんだきゅうりのなまをたべたが、そのあと大変な下痢をして大腸カタルになり、幾日も幾日も下痢がとまらない。主治医の前川先生に手当てを受け、毛布でお腹をぐるぐる巻かれた。前川先生と健三の父とは東京に出てきて長屋住まいをしていた頃から隣同志で互いに励ましあってきた仲だけに大変仲のよい友人であった。

健三が後年、腸チフスにかかった時も、この前川先生の紹介で、明治通りにある明治病院へ入院した。先生は以前は軍医で、手荒だったが、すばらしい判断力を持ち、手術は徹底してやるという名医で亡くなられるまで正木一家が厄介になった。

上野の池の端の「忍の池」で大正十年に「万博」が開催されたとき、水上飛行機を浮かして池の中をぐるぐる回る計画ができてその水上飛行機を当社で作った。健三が五才の時である。その水上飛行機に健三は袴をつけて海軍帽子をかぶり父母と兄と姉と一緒に乗った。水上飛行機は、柳沢氏が設計したもので、当時、鉄でそれを作ったので当社の名声は一躍に

して上がった。健三は十五、六才の頃、「郵便はがき」が東京市正木鉄工所へ届いたのを覚えていた。地方からも頼って人々がくる。当時としてはかなり有名であったようだ。

また鉄工所でも、当時として鉄で新しいものが作れる時代だったので景気が良かったことも想像できる。

後年、父親の弟子達が、時々健三を訪ね(震災後であるが)、当時の色々な話が出て、愛次郎の話に及ぶ。昔は今のようには酸素とか、切断道具はなかったので必ず工型鋼はたがねで、所要寸法の表面に筋をつけてゆき、とんとんと根気よく、割を入れてゆき、最後に金敷の上に載せ、筋割のはいったところを大きなハンマーで衝撃を加えて「割る」というやり方であった。

材料屋が割下水にあり、注文があると愛次郎は小僧さんや職人さんを何人か連れてその店に行つて「筋割」をすかせて、頃を見計らつて大きなハンマーで、ボーンと叩き材料を割る、ということもやつてはいたが、本業としては、ボイラー、鉄骨あるいは小物等を鉄で作るのである。全てのものに手を出して、新しい分野を愛次郎はどんどん開拓していった。

下町だったので台風が来ると時々洪水が出て、何回か水に漬かったこともあったという。健三の家は平屋だったが、水が出るので中二階の下は、使用人を泊め、二階に家族が住んでいた。正月は雑煮を作るため、ませは朝早くから、かいがいしく使用人達に食べさせた。育ち盛りで食欲は大変なものなので、山ほど焼いた餅はすぐなくなり、幼い健三はその情景に目をみはつ



水上飛行機の前で、愛次郎一家(大正10年、上野池の端)

たものである。

やがて健三は菊川町の菊川幼稚園に入園した。健三は道を覚え、毎朝前川医院に同じ年ごろの友達(今の前川康司先生)を途中で誘って二人で通った。

幼稚園では大久保という大変やさしい女の先生がおり、泣き虫の健三はよく面倒をみてもらい、色々教わった。

大正十二年、九月の関東大震災のときは、非常に暑い日で健三は「ただいま」と家に一歩足をいれると同時に、ぐらぐらとゆれるのを感じ、玄関の正面にある金庫の前に座っていた健三の祖父の懐にあわてて飛びこんだ。棚からばたばたと物が落ちて台所にいた母が悲鳴を上げて大慌てしていた。家の中が大揺れに揺れ、まるで目茶苦茶に揺れているとい

うより形容のしようもなかった。祖父は懐に健三を抱き、大丈夫、大丈夫といってみんなを励ましていた。

しばらくして地震が止まったが、外にでてみると両側にあった長屋がペシャンコに潰れ、中には妊婦が臨月のお腹をかかえて下敷きになっており、父の愛次郎をはじめ長屋の人達と総出で助けだしていた。

兄の茂はその時、仕事で出掛けており、両親や姉のこうやその日は泊まりにきていた小田原のおばあさん(父の母)が心配して大騒ぎをした。地震で水道の水がでなくなり、ませが、「困ったね。水道の水が出なくてご飯が炊けるかしら。」といっていた。

愛次郎はあまりにもひどい地震で倒れた長屋は、仕方ないとしても今後どうすべきか考えていたが、いづれにしても周囲がひどい状態だったので、かなり遠くまで足を伸ばして様子を见にいっていた。こりやいかん、といいながら帰ってきて、ませに「炊き出し」を命じた。水道の水はちよろちよろとしか出ないのだが、ませは一生懸命炊き出しの準備をしていた。ご飯が炊けると、愛次郎がそれを避難した人達に持っていた。家の中はとにかく「てんやわんや」、姉のこうも懸命にませの手伝いをしていた。一家総出で後始末をやっていたようである。間もなく茂も帰り、愛次郎の大きな声が聞えていた。健三はその声を聞きながら、うとうとと眠り



大正年代の手动折り曲げ台

に入ってしまった、起こされたのは暗くなった夕方だった。おばあさんが「健坊起きるんだよ」といいながら体をゆするので、ハッと思っ
て目が覚めると母親が、

「健三、こっちの方へ火が巡ってくるので逃げるんだから、お母さんの背中へおぶさって
いくんだよ。」

と真剣な声に健三は何も分からず、半分ねぼけたまま、その背中におぶさった。風呂敷
づつみを健三の上に背負い、祖父母を連れて、
避けて東の方へ逃げた。

健三は母親の背中で頬に温りを感じていた。「何だろう？」とは思っていたが、それは臭くて
柔らかい馬の背中に、顔が触れており、馬と一緒に逃げていたのである。健三達一家は気丈な
母親の誘導で清水橋から現在の大島三丁目の分工場に人混みにもまれながら、やっとの思いで
辿り着いた。

その晩は、大島地区の警防団が提灯をかざし人混みを見張っており、やがて韓国人が火を放

つたというので、大変厳しい検問をしていた。正木家もこの検問をうけたが、誰かがどこかに
逃げこんだらしく、警防団は厳しく追及し、抜刀などして大変怖い思いをした。その騒動は一
晩中続いた。そうした盛中にバリバリという音が聞こえ、誰かが当社の工場の中へ転がり込み、
愛次郎に助けってくれ、としきりに頼みこんだ。愛次郎はとっさの判断で押入れに匿った。抜刀
隊の数人が、

「今、逃げ込んだはずだ。」

とどやどやとやってきたが、

「いたら通報します。」

といって帰ってもらった。

逃げ込んだ人は、日本へ働きにきていた中国人で、

「韓国人が火を放した。」

ということから、中国人もその巻き添えを食って大変厳しい検問を受けたわけである。

愛次郎はとうとうその人を匿しおえた。愛次郎はその点、大変義侠心に富む愛情の深い人だ
つた。その中国人は日本名を山本五郎とい、後日譚だが健三に仕事を教えたり、「そのうち中
国へ一緒にいこう。私の郷里は、とてもいいところなんだ」と、時々話した。健三は中国の風
習をいろいろ教わった。本国には美人の奥さんがいるとか、盆暮には中国から色々送ってきた

木の实やお酒などを貰い食べてみたが、風土の違いかあまりおいしいとは感じなかったが、杏の実だけはうまかった。小学生の健三を映画館へ連れて行ったり飴を買ったり、実によく面倒をみてくれた。彼は健三の少年期から青年期にかけて忘れられない人の一人である。

そして、この大島での生活は単純で空虚な日々が続いたが、水が一杯一円とか五十銭で売られ、健三は子供心に水は随分貴重なんだなと、その時思った。

また一緒にいた犬のシロは忠実で、健三にはなくてはならぬ仲間であり、友達でもあり、また目付け役でもあった。

そのシロが堀田さんという職人が田舎に帰るとき、後を追って帰ってこず、どうしたんだろうと待ちわびた数日が続いた。食べるものがないので途中で食べられたんだろう、可哀想なことをしたと、健三は胸が押し潰されるような思いがした。

一週間ほど大島工場の生活が続き、一度焼け跡を見に行こうではないかと両親や兄姉と連れだって見に行った。避難するとき渡った橋が落ちて多くの人が亡くなり、橋の下や「木倉の池」もかなりの死者があったようであった。そんなところを両親は健三に見せないように見せないようにと気をつかっていた。焼け跡は見渡す限り真っ平で果てしもない焼野原、こういう道順で正木家のあったところへ行くのわからなかった。

両親はこの辺というので正木家の跡を捜しだした。健三もそのときシロの他に父親が、小犬

を一匹貰ってきたので、その死体がないかと随分探した。子犬らしきものの死骸があり、母親が押んであげなさいというので可哀想なことをしたと手を合わせた。母親と姉のこうはこの辺に指輪があったとか、なにがあったとか焼け跡の灰をほじくって小さなとけた金の粒を拾っては大事そうにしていた。その時の様子が今でも目に浮かんでくる。そうして焼け跡の再建がその後、愛次郎をはじめ、みんなの協力で始まった。焼け跡にバラックが建てられ、粗末だったが、そこへ家族が引っ越して新しい生活が始まった。

幼少時代

菊川幼稚園の担任は大久保先生だったが、とても優しく、泣き虫の健三をよく面倒みた。小学校の一年生のときは原口先生で、厳しい先生だったが、健三は懇切丁寧に教わった。

二年生になってからは、まだ教員になったばかりの若い田中先生が、健三をよく、

「正木のやつあたり、やつあたり。」

と、かなりきかんぼうだった健三を可愛がった。

三年生の担任は、根岸先生で温厚老練、神様のような人だった。

健三の友人には、前川医院の前川康司君が幼稚園、小学校、中学校と健三と同じような道を進んだが、健三は鉄工所、前川君は医者の子といっているので、だいぶ感覚が違っていた。

小学校時代の友人では、体がクラスで一番大きく、腕力もあったガラス屋の息子の鳩貝君、学校の真ん前の駄菓子屋の息子の茂木君などを思い出す。その他には、運送屋の飯田君、それから鉄工所の丸君などがいたが、健三と飯田、丸、前川の四人がクラスの中では、一番の右翼にいたようであった。

健三は、運動が好きで敏捷だったので百メートル競技、走り幅飛びなど得意だった。百メートルでは学校の選手となり、かなりよい記録をだした。記録といえば、体は小さいが弾丸のよ

うな仁田君、運送屋の息子で馬場君、この二人はとびぬけて足が速かった。

その他には、花島君、市村君などがいたが青年期には戦争にかりだされ、多くの人たちが亡くなったので、残っている健三の小学校の友人というのは何人もいない。

健三が小学校四年生の頃「腸チフス」の予防接種が、折り悪く真性となり、明治病院に入院した。この時は授業中、頭痛がし身体がだるく、いつもの元気もなく、通常なら家に帰って家族に話して医者にかかるのだが、この時ばかりは下校途中で前川医院に立ち寄り、そのまま気を失って正木家から迎えに来た使いの者の背中で気が付いた位で、高熱で意識不明のまま数日後、明治病院に伝染病患者として入院した。そこには畳敷の大広間に五、六十人の患者が布団を敷いて寝ていた。

健三は、トイレに行きたくなり、用を足したまでは覚えていたが、あとは意識不明となり、気が付いた時には伝染病棟のホルマリンの匂いがたちこめる一室にいた。水野さんという一等看護婦が健三につき添ってくれることになり、健三は唯々、高熱のためにうなされ、寝汗をかくなど一カ月位は、生死の境をさまよった。その間に家には、再三に亘り危篤の報せが入り、夜中に両親、茂、こうが駆け付け、危機一髪のところまで来ては助かることがたびたびで、その都度こうは心臓が凍りついて仕舞ったとその時の模様を聞いたことがあった。健三は身体は細いが、心臓が丈夫だったので危篤状態を脱することができたそうである。

今でいうリンゲル、その頃の食塩注射を腿の内側に打たれ、これが生命の糧である食事代わりの栄養補給で、打った後、看護婦がもむのだが、痛いなの、夢うつつ生死の境をうろついている病人が痛い痛い泣き叫ぶほどで、そうしないと身体がもたなかったであろう。健三の場合は病状としては余程ひどく、九死に一生を得たというのが、本当のところであった。

病床で窮地を脱して、人の顔がやっと見えるようになるまで約一カ月間は全く、五里霧中で四十度前後の熱にうなされ、朝になると急に三十五度位に降下して、寒い寒いと震え出す。体温の変化は大変なもので、この急激な変化に対応できた身体、特に心臓はまさしく健三全体を救った。これには両親の命がけの「ころしてなるか」の信念と祈り、家族の協力、ひいては親族関係者一同の協力が健三を蘇生させたと、子供ながらに思ったそうである。

母親はこの一カ月間、日中の最も暑い正午に「お百度詣り」を欠かさなかったことを聞いて母親の慈恩を今でも忘れたことはないという。

健三の大病を看破り、明治病院に入院させた前川先生の慧眼は高く評価され、校医になったのは勿論のこと、東京市内にまでその名声は広がって行ったそうである。

その年の八月二十日頃、健三は退院したが、そのころの健三の身体は頭髮は引っ張ればごそつと抜け、全く骨と皮と筋だけで肉がなく、そのため脚の関節が曲がらず座することも立つことも出来なかった。退院後の静養が「腸チフス」の場合、最大の鍵を握るといわれていたが、全

治すると食欲が旺盛となり、食べすぎて死に至る例が枚挙にいとまがない程だった。水野さんも船橋の貸家に健三の姉と共に起居して、三人で約一カ月静養に励んだ。お陰で健三は退院後の失敗もなく、順調に回復して、九月末頃から学校に行かれるようになった。

その頃、今度は健三の姉が胸の病（結核）に冒され、病床にふすようになった。彼女は小松川高等女学校で絶えず一、二の成績で通し、文字をかいても、人間的にも優秀で両親は正木家の誇りとしていた。今だったら、この病では生命を失うことはないが、当時は薬もなく、転地と栄養に頼る他はなかったので、愛知県や小田原の親戚、市川橋付近等々転地療養に励み、食事療法が大切ということから、牛肉の生血を絞ったものや、鯉の生血、まむしの生血やかば焼き（健三も彼女が気持悪いというので付き合わされ、たべたことがある）など不況の盛中だけに両親は、その精神的、物質的負担は大変なもの、健三は子供心にも思えた。

その頃、市街地法とでもいうのか「区画整理」が行われた。工場の敷地は約壹千坪位であったが、この整理により六百五十坪ほどに減らされた。土地はもともと借地で（井上さんという方が地主）あった。焼け跡に新築された頃の新家屋も大震災の経験から平屋建て、屋根はトタン葺きという地震対策を十分考慮した家屋造りであった。この家屋も区画整理によって、奥の八帖の間（客間）を切り取って、道路沿いに北端から南端に移動された。庭も南側に二・五坪位を残すのみであったが、六帖が二間、四・五帖が二間、玄関の間二帖、玄関一坪と事務所四

坪、台所、風呂場、トイレ、廊下という家屋は棟梁の面目を保っていた。そこに移ってから、

健三の発病、不況、健三の姉の逝去と災難が続いたので両親は方位をかなり気にしていた。

しかし、母親は常日頃、「当たるも八卦、当たらぬも八卦」なので、路上で行なわれている「易断」に観てもらうことは絶対にいけないとまでいわれた。

健三の妹の富美子は健三とは八つ違い、兄とも健三は八つ違いで姉とは五つの違いがあったが、健三は妹を可愛がった。兄・茂はその頃、愛次郎にビシビシ仕込まれて健三が傍らで見るとも気の毒であったが、次第に「自分もああいふことになるんだな」と、健三は自分にいい聞かせていた。

姉のこうは昭和十三年十月十四日に健三が入院した明治病院で、黒岩さんという（水野さんの友達）看護婦、肉親たちに見守られながら、十九才の短い一生を終わった。酸素吸入で苦しうに息をしている彼女に、

「姉さんよくなって。」

と声をかけると苦しそうな息の下から

「健三、大丈夫だよ。心配しないで。」

とかすかに答えてくれたが、間もなく昏睡状態に入り、そのまま一時間後には付添いの医師から

「い臨終です。」

といわれ、息を引きとった。彼女は、「健三、健三」と遊ぶことに熱中している健三をつかまえては、机に座らせて「勉強、勉強」と励ましてくれたこととか、健三があまり彼女のいうことを聞かなかつたからだろうか、彼女の死によって随分反省させられた。だが彼女は夜道などにお使いにゆく時は、

「健三、一緒に行つてね。」

とよく一緒に出掛けた。彼女は小松高等女学校出身で眉目秀麗であったから正木家の中では一番に秀でていた。

健三が小学校五年の夏休みに入った頃、彼女の病状のこともあって、千葉県市川橋の橋のふもとを右手に入った所の家を借りた。近所のお百姓さんが建てたもので四棟位あったが、健三達だけが住んでいた。朝、早く起きて朝露を踏み、帰ってから朝食、家の掃除、勉強そして午後は大体魚釣りを楽しんだ。水遊びは江戸川の流れが急なため、水泳は禁止されていた。だから、「ハゼ」を彼女と一日に一〜三十匹釣る。餌の「ゴカイ」を針につけるのが彼女は苦手で、釣り上げた魚を釣針からとることに餌をつけることは健三の役目である。東京から時々、女中の竹さんが手伝いかたがたやってくる。愛次郎も茂も時々仕事の合間を見てはやってくる。

現場監督の大西さんなど泊まりがけて来ては、酒が入るに従って声も大きくなる。ほかに水

江さん、志賀さん、時田さんがいたが、夏休み中にここに来たのは大西さんだけであった。

健三は富美子（妹）も来てはどうかと思ったが、母親の手元で重宝がられて、恐らく手放さなかつたに違いない。女中の竹さんをこちらによこしたので、一人でキリキリ舞いをしていたのであろう。小僧さんも二、三人はいたし、時には流れ者が突然、愛次郎を頼って上京する事はたびたびであった。愛次郎が東京に出て、腕を磨いて工場を持つに至るまでは、大変な苦勞をしたに違いない。人に頼られるとだまっていられない性格で、ませも協力し、面倒を見たようだ。他から見えて愛次郎が「だまされている」と思っても、とことん面倒を見て愛次郎は「自分は他人を欺かない」というおおらかな気持をもっていた。しかし、ませの立場だと何時、どのような事態にでも対応できる用意が必要だから裏方は大変なものだ。親戚、縁者、使用人のことなど一切が、ませの肩に重くのしかかってくる。家庭内の事だけではない。だから、朝から晩まで大忙しの毎日であった。ませはこの小岩の家にも、その前の船橋の家にもほとんど来てはいない。

こうの病状が進んで入院を必要とするようになったのは、九月中頃であった。でも病状が回復してからもここで静養をすると、本人はきめ込んでいたので竹さんが時々、小岩の家に掃除、その他でくることがとしていた。この借家では、彼女の心を慰めるため小鳥を飼っていたので、留守中を農家に依頼していた。この小鳥は、農家からわけてもらった「十姉妹」で、ふかして

十数羽になっていた。彼女は入院中でも時々、母親に「十姉妹」を気にして竹さんに小岩の家に掃除に行った時は、大家さんに立ち寄って様子を見て自分に知らせるよう頼んでいたそうである。一部始終を母ませから聞いた大家さんは驚くと共に悲しみながら、ことの次第を次のように報告した。

「昨日まで、十数羽がなんでもなかったのに、今朝餌付けをと思つて、籠を見ると全部死んでいる。これはおかしい。何かあつたに違いない。」

とすぐ支度をして知らせかたがた来たという。結局「彼女に全部付き添つていった」ということであつた。

姉・こうの死後、健三は小学校五年生で進学まで残り少ない。勉強は自分でやらねば駄目だと自分を励ましてやる気を起こしていた。愛次郎は常々「健三は、商人にする」といつていたらしい。その頃は、健三は何になりたいという考えは毛頭なかつたし、姉のいない淋しさにボンヤリとする毎日であつた。その姉が、

「健三は府立三中に入るといいよ。」

と健三に目標らしきものを与えてくれたのも、姉がいなくなったから立ち消えかと思ひながら、彼女への追慕と反抗していた自分に気付いて悪かつたと思ひながら、どんどん日はたつていった。愛次郎は娘をなくした後、「健康第一」と考えたのか

「茂も健三も柔道で身体と心を鍛えろ。」

ということになり、以後「徹青館」通いが始まった。

健三は運動が好きな方で、五〇、一〇〇メートルでは、仁田、馬場にはかなわなかったが、クラスの代表選手で、走り幅飛び、あん馬なども抵抗なくできた。小学校で勉強とスポーツは余り両立していなかった。どちらかに片寄っていた。

ここで、山本五郎さん（日本名・中国人）のことにふれたい。

山本さんは、あの関東大震災の夜、父がかくまって命拾いをして以来工場に出入りするようになり、愛次郎に仕事を仕込まれていった。彼は、中国からの出稼ぎで日本に来ていたらしく、工場側が手不足でてんでこ舞いをしてる時でも顔も見せないこともあり、仕事がほとんどない時でも、工場中の清掃や道具造りをてつだっていたりしていた。当時、鉄工所は全くの自由というのか、勤務も退職もごくスムーズで、今日来ていたかと思うともう明日は他所で働いているといった具合で、人の流れは循環していた。しばらく来ないがどうしたかなと思っている、ヒョッコリ顔を出して二、三日働いて何時の間にか姿を消している。またしばらく経つと働きにかけているという具合である。当時は不景気だったので、工場側も仕事が続かない。それで、自然にこのような現象になったようである。だから、かなり腕のよい職人が当社の工場にも出入りしたものである。

山本五郎さんは健三が小学校に入学した頃は定着していた。小学生の二、三年生頃、遠い親戚にあたる広田さんという人が四ツ目通りに「広得館」という映画館を建て経営していた。

この広得館には愛次郎は「力」を入れて出資もしていた。当時は活動写真と映画のことを呼んでいたが、この猿江の町にも映画館ができ、人々のいこいの場として人気を集めた。これまでは錦糸町に（当時は錦糸掘と呼んでいた）「錦糸館」があっただけであつた。尾上松之助・通称目玉の松ちゃんの荒木又衛門が上映されたのは、健三が五才位の時である。祖父（母の父）が健三に手拭で鉢巻をし、帯に刀を差すと又衛門ができ上がった。鉢巻に手裡剣が六、七本たつわけだが、家中がこの又衛門を囲んで、又衛門は一人役者の心境で刃を抜く。みんなが笑い出すとむきになって今度は切っ掛けかかる。団らのひと時である。

このように映画が庶民の中にとけ込んでいった。映画館が手近なところに来たのだから、ちよくちよくゆくようになる。小学校二・三年生頃だったが、姉のこの許可を得て下校するなり友達二・三名と広得館にゆく。小遣いは、母親がキャラメルと南京豆を買うくらいはくれる。パスだから入場料金はいらないのである。これを見ていたのだろう。山本五郎さんは小学校二年生の健三を背中にして広得館に出掛けていった。

「エー、おせん。エー、キャラメル。エー、ラムネ。」

とお菓子売りのオジサンが来るたびに健三に買ってくれた。

健三は満足して夜の事でもあったせいか深い眠りに落ち、翌日、母親から

「風邪をひくといけないから、家の者以外の人と夜は出てはいけません。」

ときつくいわれた。子供心にも山本五郎さんの好意をわかってくれない母親をちょっと淋しく思った。

毎月、一日、十五日は工場の定休日である。その前日が職人さん達の給料日なのである。山本五郎さんは時々健三に五十銭銀貨をくれた。健三は母親にこのお金を山本さんがくれたといつて渡した。健三は子供の頃からお小遣いは全く不用であった。十時と三時にお茶菓子を母親から貰う。おせんべいとか焼き芋とか、時には、羊かんとかカステラならまだよいが、最中や高級な菓子は全部といつてよいほどポケットに忍ばせて、犬にやって仕舞った。ある時、犬にポーンと空高く投げ与えていたところを母親に見つかって随分とおこられたものである。

山本五郎さんが健三に刀とサヤ（鉄板製）を作ってくれたことがある。刀を光らせるために事務所の日当たりのよい所で、砥石でゴシゴシ、冬だというのに額に汗をにじませながら、毎日のように研いだものである。しかし、これは茂に見つかり「危ないから」という理由で取り上げられてしまった。山本さんに悪いと子供心に思ったようだ。

小学校の二・三年生頃は、学校の成績がよいと愛次郎が大変喜んでくれた。

「健三、なんでもかってやるよ。」

というので映画の影響なのだが、塚原ト伝のカシの木の小とか、自転車（子供のりでこの時代では特別注文であった）とか、小学校三年生の時には腕時計を買ってもらい、学校にしていつたら、友達からひやかされて、困ったことがあった。

健三は至って朗らかな性質で活動的であった。また、わりと凝り性だったらしく、自転車に乗り出すと毎日乗り回した（本人は面白くて仕様がな）。チャンバラごっこになると、また大好きで近所の子供達と大立ち回りをして、夕方、姉のこうが

「健三、健三、ごはんだよ。」

と健三を探して連れ戻すまでが大変なようであった。

トンボ取りも大好きで、竿に指先で「もち」を器用に巻きつけて「おおやんま」を追い駆けて夕方まで夢中で遊び、遅くなってこうが迎えにきてはしかられた。

将棋は小学校一年生の頃、祖父が教えてくれたので、時々祖父と指すのだが、たまには祖父が負けてくれる。友達とやってみると、だれも敵はないのである。ある時（小学校三年生の頃）清宮のおばさんが、

「とっても強いからうちのおじさんと健坊、やってごらん。」

というので、清宮さんのお座敷で指したところが、清宮さんが強すぎててんで敵わない。二、三局やってみたが、兜を脱いで逃げ帰ったことがあった。山本五郎さんとも時々指したが割

りと弱かったようだ。

外山さん（伯父）の家に女の子がたくさんいて、健三にお兄ちゃん、お兄ちゃんと馴付いてしまつてはなれない。健三にも妹の富美子がいるが、小学校二年生の頃はおぶつてよく遊んだ。可愛いのだが、自分が遊ぶ方が先だから、親の目から見ると危険である。

「健三にはあぶないから、一寸無理よ。」

という次第で、富美子を連れては遊ばない。だから、外山の従姉妹達は妹のように可愛いがつた。伯母もよい人柄で、「健三さん、健三さん」と可愛がつてくれて、健三がカキ餅を焼いてお醤油をつけたのが好きであることを知り、時々焼いてくれた。醤油のこんがり焼けた香りは、それだけでもおいしい香り、まして育ち盛りで夕方など何物にもかえ難いおやつである。あゝ時、トンボ取りで竿に繭を巻き付いているところに外山の長女の歌子が来て離れない。邪魔で困っていたら、その内、繭が歌子の頭の上に落ちてしまった。さあ、大変、髪に繭が付いたのだから取る術もない歌子は泣きだす始末である。困った健三は家からはさみを持ち出して、繭のついた髪の毛の部分を取り取った。一難は去ったが、頭の真ん中が禿げたようになってしまった。どうしてよいかわからない。とうとう伯母さんにわけを話して詫びたが、伯母は何もいわずに許してくれた。このことが数日後、健三の母やお祖父さんに知れてしかられた。

話は前後するが、小学校一年生の頃、震災の焼け跡にどんだん家が建つて、たちまち街がで

きた。子供たちはすぐ仲良くなつて、チャンバラごっこ、石けり、日月ボール、ペーゴマ（健三は、母親に禁じられてできなかった）、陣取り、角力、映画のまね、自転車乗り等々、数えれば切りがないほど、遊ぶことはうまかった。遊んだ後で、お腹がすいて何かかほしい。えんどう豆を三角袋に入れて上からミツをかけたものや、三角形をした豆餅（鉄板でやいたものが、特になうまい）、モンジャ焼き（えび天、ぎゅう天、いか天、野菜天）どれもこれも五銭止まりのものである。駄菓子屋には、ラムネ、アンコ玉、やきいか、のしいか、コーバイ焼き、おはじき、ケン玉など一銭から、いろんな種類があった。当時、銅貨の五厘銭はあったが、余り見受けなかった。二銭銅貨は大きくて厚くどっしりとしていて重みがあった。

「何かほしい」ときに、この駄菓子屋で、一銭か二銭のアンコ玉とか、おせんべいとか、のしいかを食べて一時の空腹を満たすのである。五人とか、十人くらいが一緒になって遊んでいて一人だけ食べるわけにもいかないから、皆でもっているお金で買い、分けあって食べる。これが毎日の行事である。

時には、コブを作る。肘や膝小僧が何時もすりむけている。鼻たらしで、鼻の下にレールが二本、キッチンと敷いてあるものもある。頭にオデキ、コブを作った子、いろいろいたが、遊んでいるうちに、子供たちの間にルールが自然と出来上がるから面白い。

弱いものいじめはしない、女の子は剣劇はいけない、乱暴なことはしない、「ウソ」をつかな

い、といった具合に本当に自然にできてゆくのだから愉快である。

健三は山本五郎さんから、時々貰うお小遣いを母に預けてあるから五銭、十銭と母にねだつては皆と一緒に食べた。決して自分だけ余分には取らない。常に公平である。でも何時までもお小遣いが続くものではない。時には困ることもある。こんな時にくじ引きの一本むきで当てる方法もあったが、大体取られる方が多い。ところが、十センチ角の箱の中に十二ミリ角のクジが二、三百枚入っていて、外れても小さいのが貰える。当たると二十センチもある鯛の形をしたコウバイ焼きが当たる。当ててみたい。ところがお小遣いは十銭が限度らしく、それ以上は貰えない。毎日十銭で、この「コウバイ焼き」のクジを買うのである。そのうち「でっかい鯛」を当ててしまった。「ウワー」と一同が歓声を上げたほど嬉しかった。その時は皆で頬ばつてこの菓子を食べた。女の子の中に注意深い子がいて健三にそつと当てたクジを渡して、外れクジをよく調べてみるというのである。健三は一生懸命、その両方を見比べてみたが全く同じで青の印刷インキの濃淡ぐらいしか眼につかない。ところが、よく見たところ一箇所だけ違いを発見した。恵比寿様のつけ根の線が、外れクジは完全についているが、当たりクジはほんの僅かだがついていない。

「ようし、わかった。明日やってみよう。」

と翌日、学校から帰るとすぐ、一人で駄菓子屋のおばさんの所へゆき、箱の中から約一時間位

かけて、やっと同じものを見付け出して指先でもんではがして見ると「当たり」だった。しめたとしたが、すぐ「おばさん、当たり」とはなんとなくいい出せない。その前に二枚外れを買って、大きな鯛を持ち帰ったところ、茂が見つけ

「では、もつと当ててこい。」

といわれたが、今、当てたばかりなので二、三日経ってまた当てた。おばさんは

「健坊はクジ運が強いね。」

とほめてくれたが、こちらにはチャンと当てる根拠を持っている。仲間には誰にも話してはなない。そのうち、いつか飽きてしまって、当てようともしなくなつた。健三の小学校二年生の頃の思い出である。

健三は小さい頃から洋服を着せられ、靴を履いて育つた。当時ではかなり時代の先端を歩いていたかもしれない。クラスでもほとんどが着物で、洋服を着ていたのは前川君や五、六人位だったと思う。

前川君の父親は、愛次郎と同じ長屋に住んで相互に励ましあつて努力し、一家を成した間柄なので実に親しくしていた。

例えば、お彼岸につくつた「おはぎ」は、お寺と前川家には一番先に届けさせられた。前川君の母親はお医者のお奥さんらしく、いつも髪をハイカラに結って薄化粧をした品のよい麗婦人

であった。当時は、暮には「餅つき」をするのが一つの行事で暮の二十八日には、必ず朝の暗いうちからませ、伯父が先達となつて、おばさんや清宮さんとか、近所の人達も集まって日の暮るまでべったんく〜とついていたものだ。だから子供達は十時、三時のおやつ時に、からみ餅（大根おろし）、きな粉餅を食べることができた。工場の職人の人達も仕事の合間を見ては、楽しみながら一、二白ぐらいついてゆく。

兄の茂のことについても記しておかなければならない。健三が幼い頃、ときどき背負われて今の亀戸天神の藤を見にいった。当時の亀戸天神は藤の花が五尺、六尺と垂れ咲いていた（戦災まで）。今の神殿の後方が広場になっていて、ここに大道芸人が集まる。

「ガマの油」を売る者もあれば、刀の刃に独樂を往復させて見物人から見物料を貰うなど芸人が集まって一つの市場を形作っていた。この天神は菅原道真公が祭られて、学問、書道の神様と崇められて、その時期には金太郎飴、あんず飴、わた飴、かるめ焼き、もんじゃ焼き、おでん屋、お面を売る店、おはじき、ラムネ、アイスなどたくさん出店し、賑わったものである。太鼓橋も前後の二橋とも木造で登る時はよいが、下りが危なかったが、スリルがあつて、少年達には面白い遊び場でもあつた。さんざん遊んで帰りに船橋屋に立ち寄つて、葛餅を五錢で食べて帰ると大いに満足であつた。茂は健三を連れては、この天神様にきて葛餅を食べさせた。そこの葛餅は現在のものより三角形が大きく、四倍位のものが二切れついていた。「ミツ」の黒

砂糖の匂いときな粉の香りが混じつて食欲をそそつたが、二皿は食べられなかった。その点作る方でも心得ていたのである。

茂は健三が物心ついた頃は、すでに工場の手伝いをやらされていた。身体が大きく、やや吃り気味だったが、職人や出入りの商人に好意を持たれた。健三が小学校三年生の頃のある時、学校から帰ると居間に、当時流行の鉄仮面をかぶつた男が大の字になって天井を向いて寝ていた（鉄仮面は正義の男で空中に飛んだり、仁術ではないが時には孫悟空のように自由自在に空間を暴れ回つて悪人を徹底的に叩きのめす、という筋書きで少年達には人気があつた）。健三は驚いて母親を探したが、姿は見えない。工場に行つてみると、絵書きで修業中の当工場の雑役を勤めていた人がいた。この人の話だと、アセチレンのホースが外れ引火して、茂は顔を炎で焼かれた。一時は大騒ぎとなったが、牛蒡がやけどに良いといふので、摺り金でおろして顔に塗つて寝かせてあるということが判明した。健三は「兄さん、だいじょうぶ」と寝ている茂に声をかけた。

「うーん、やられたが、そんなにひどくはないよ。」

と案外、元気な声なのであとから帰ってきた姉のこうにも話して心配させないようにした。ませは前川先生のところに走つて、先生に相談して塗り薬を作ってもらつたが、皆が心配したより案外軽く、顔が皮剥けた程度で済んだ。

茂は若くして職場に出されたせい酒が強い。健三が小学校二年生位の頃、冬期であったが、夜中にトイレにいくと、途中台所の方では何やら物音がする。廊下の右が女中部屋だが、おとささんは実家に帰っていない。そっと入って台所と障子一枚のところまで接近した。誰かいるのは事実だ。障子に唾をつけて指で、穴をあけ、見ていると夜目にも馴れてきたが、兄の茂とハッキリ判った。父の愛次郎はかなりの酒豪で、四斗樽を常に台所に置いている。この四斗樽から片口を呑口にあてて木栓をひねると、コボコボと音を立てる。次ぎに酒が片口に吸い込まれてゆく。キュツと木栓をすると茂は片口を口に当ててぐいっと飲んだ。飲み終わると自分の部屋に帰っていった。

翌日、学校から帰って茂に昨夜のことを話した。驚いている茂に障子の穴まで示したのだから困ったに違いない。少し考えて

「健三、誰にも内緒だよ。」

といった。誰だっこれをませやこうにいえば茂がどうなるというより、どう思われるかわからないと思っていたので、

「わかっているよ。」

茂は勉強が余り得意ではない。

茂の友達の竹内さんは、竹内鉄工所の御曹司で、その頃は、宮地鉄工所、竹内鉄工所、正木鉄工所の三工場は、かなり有名で東京だけでなく、他県にまで出張して鉄骨工事を請け負って業績を上げていた。

松本の機関車庫は健三が五才位の時、製作完了したが、当時としては緑々商会から英国製のリーベルというコンプレッサーを購入して、リベッティングする最新鋭の設備を備えたものであった。松本は寒いところで、雪に埋もれた機関車庫完成の写真があった。父の愛次郎は外山の伯父、妻、娘のこうと健三を連れてこの松本に逗留し、雪の温泉場に二・三日湯治したが、この記憶が今だに生々しい。

後日談となるが、コンプレッサーの冷却水を作業終了時、抜き忘れて凍結し、膨張によってヒビが入った。当時、電気溶接はまだなかったが、現在調べてみると低温溶接（酸素とアセチレンによる）でニッケルが使用されており、当時の鋳物に対する溶接の技術水準がかなり高度のものであったことが判明した。

小学校入学は焼け跡で迎え東川小学校へ入った。なんといっても焼け跡で校舎も仮校舎で授業は一年生の頃は、菊川小学校、二年生からは東川小学校の仮校舎で行なわれた。一年生のとき、原口先生という立派な先生がいて、いろいろなことを教わった。健三はきかん坊だったので怒られてばかりいた。二階のフロアーの小さな穴から下の教員室が見え、そこから砂をボロ

ポロ落して見つかり散々おこられたことがあった。とにかく少年時代は腕白でいたずらで泣き虫でどうしようもなかったようである。でも元気が良かったらしく、教室では正木のやつあたりが始まったとってて学友からよく笑われたりもした。成績もそんなに悪くなくクラスで五番以内にも入っていた。

小学校四年生のときに腸チフスにかかり明治病院に隔離され入院した。そこで死の一步手前を経験したが、その時、ませは本当に命がけてこの子をなんとか助けたいとの一心で看病したお陰で一命は取り止めた。明治病院には七月中頃入院、九月に入ってやっと退院した。その時はやせて骨と皮になり、頭の毛が全部抜けてひよろひよろ地面に立つことさえできない状態だった。両親にはずいぶん心配をかけたようである。そして退院後、体もだんだん回復していたが、翌年十月に姉のこうが十九才で亡くなる悲惨なことがおきた。本当に彼女にもいろいろ心づかいをさせた悪い弟だったなと健三は今でも思う。

中学生時代

そうこうしているうちに、いつの間にか中学校の受験がせまってきて健三は、勉強の日程を組んで楠先生の指導を受け一生懸命にやった。受験のときには丁度、公立は全部が同じ日に試験が行われるように改正され、受けられないので、健三は江東橋のたもとにある府中三中（両国高校）に入りたいと思っていたが、父の愛次郎は健三を商人にしたいとって、その当時できたばかりの府立第三商業中学校を受けた。学科は全部できたつもりだったが、発表では自分の名前が載っていないかった。

担任の楠先生が同級生の市村君が合格しているのに正木が落ちるわけがないというので、府立第三商業へ聞きにいったが、その時の学校の話では、鉄工所の子供が商人になるといのは間違っているというので落したということだった。その頃は世の中がまだ封建思想時代で、健三はやむなく当時としては余り有名校ではない横網町にある日本大学附属第一中学に入学した。学校長は、荒川五郎先生という現職の貴族院議員で大変立派な方で、冬の雪の降る中を小使さんに傘を持たせて自分が校門の前に立ち、いちいち生徒に敬礼をさせ、「二年B組。。。。」と氏名を名乗らせた。声が小さい、ぼたんが外れている、敬礼のやり方がまづい等々で列の最後尾に回って、やりなおしをさせるといふ当時としては誠に厳格な教育が行われた。

そこで三年間、学校長荒川五郎先生、竹内先生、花田先生あるいは塚越先生という立派な先生方に教わったが、我が家の窮状をみるに忍びず、三年をもって夜間学校の工学院に転校した。昼間、働きながら夜、勉強するということは、思ったよりも大変なことだった。

前述したが、小学校の頃、腸チフスにかかり、父は健三の身体を鍛えるために「徹青館」という道場に通わせて心身を鍛えさせた。

毎日必ず道場に行くことは、小学校五年生の時から中学校三年生終了まで続けた。厳しい先生のしつけのもとに飛び受身十回（三尺高さのけん台の上から）は、道場に入るなり必ず実行した。柔道は体重がなかったため、積極的に攻撃戦法に出て相手のすきを見付けだして、背負投げ、つばめ返し、巴投げなどで勝機をつかむ戦略だったので、試合ではただの一度も負けたことはなかった。

道場には年に一度は、三船八段（当時）、徳三宝（当時六段）がきて模範の型、試合などを見せて貰い、感心し、また良い励みとなって鍛錬、鍛錬また鍛錬と夏は暑中稽古、冬は寒稽古とその間には、区内は勿論、区外にも（水天宮、墨田区、城東など）試合を求めて出張し、また当道場へも招待して息の抜く間はほとんどなかった。

竹芝先生はスラックとした長身の好男子で口ひげを少し残され、苦味ばしった浅黒い整った顔は、まさに柔道家として申し分ない容顔で、また文字を書かれても能筆家で立派な文字を書か

れた。

道場に張り出されている有段者の名札や、その反対側には白紙で投げの型、浮落し、背負投げ、払腰などと羅列され、天井は丸太が露にして高く、床は三間×六間位で、スプリングがよくなり、ボンボンと床を蹴っても、ショックが吸収されるようになっていた。

ある時、先生を中心として研究会が行なわれた。その時の話題は猫は天井の梁から手を放してもくると回転して畳に起つ。人間は、両腕による受身ができるかどうかということであった。結局、中学一年だった健三が梁に登り両脚と両腕で梁の丸太をかかえ、合図と共に手と足をはなすと畳の上に背中を向けて落ちる。ここで両腕で受身をする（この時、あごを引き絶対に頭を打たないように、平常から訓練されている）。健三は鍛錬されてかなりの自信はあったつもりが、かけ声とともに丸太から身体が放れ、スラックと風が両頬を切る。ドーンと身体に衝撃を受けたまでは覚えていたが、あとはわからない。気絶をしてしまったのだ。グイッと背中を強くこづかれた感じで眼が覚めた。活を入れられたのだ。

しかし、身体も頭もすっきりしたもので、特別おかしなところは何もなく、仲間の門人達は、「健坊どうした」位で心配はしてない様子。あとからその時の模様を聞いてみると全くうまく受身をしたということ、一応気絶はしたが面目を施した。腕の強化にしても両腕の肘に全体重をのせて道場を何回となく回る。また柱に帯を縛りつけて投げる練習をする。それから稽古

に入る。入れ替わり立ち替わり一時間半位は練習する。すねなど紫色が固まって蹴られても痛くなくなってしまう。鍛錬とは誠に恐ろしいものだ。だから学校で試験が始まった時など一週間位稽古を休み、試験が終わって、また稽古にゆくと身体がなまるというのか、座って立とうとすると、すぐには立てない。身体が痛い。とくにトイレなど行った時、この傾向は顕著だった。

このように身体の鍛錬に明け暮れていたから、中学生時代、通学するのに往復歩いた。毛利町から横網町まで約四十分位であったが、三年間に電車に乗ったのは、大雪の時、母・ませの持病のぜんそくが再発した時の二回位しかなかった。毎朝、出掛けに牡丹橋際の中島君を誘い、通学したものである。

三年生の冬休みに入る前に試験があった。健三は試験中はそれに没頭する性質なので、英語のリーダーの試験が始まる僅かの時間を教室を出て、寒い静かな廊下に出てリーダーを繰返し繰返し読んでいたところが、いつの間にか教室の横の階段を登って踊り場の窓から入る日差しをうけていた。手摺りに腰をかけることはご法度であるのは百も承知の筈が、夢中になってリーダーを読んでいるうちに手摺りに腰をかけてしまっていたのだ。生徒監である退役した老佐がたまたま通り合わせて声をかけられたが、夢中になっている健三には、この声が耳にはいらなかった。生徒監は声をかけても夢中で読み耽っているのだ。

「お、う。」

と健三の頭を指先で突いた。不意だったので健三は重心を失ってのけぞり返り、一階床のコンクリートに転落した。驚いたのは生徒監であった。健三は平素の稽古で鍛えた受身の形通り頭を打たずにビシッと決まった。頭も腰も背中も、なんともなかった(全く痛くなかった)。唯、両腕が痺れてしまった。老佐は、駆け降りると健三を抱き上げようとした。健三は、

「先生、大丈夫です。」

と相手の呼吸の乱れを感じ取って、自分には被害がなかったことを告げた。しかし老佐は予期しない出来事に動揺されたに違いない。

「自分の不注意から本当に申しわけない。」

と健三は心で詫びた。

「大丈夫です。」

といつても相手は承知せず、医務室に連れていった。途中で授業のベルが鳴り始めている。老佐は構わず医務室に導き入れて、医師の診断を受けさせたが、両腕が赤く腫れている外には異常はなかった。自分の個室に健三に試験用紙を与えて代筆されたことがあった。この出来事は、いつまで経っても忘れられない思い出である。柔道を一生懸命に勉強したお陰と、竹芝先生にも報告した。

また竹芝先生（講道館、創立当時二段）には心身の鍛錬と共に情操教育という点でも勉強をさせられた。例えば「柔道」とは受身のもので、これを習ったからとて決して攻撃的なものでなく、例えば角力などでも使用してはならない。あくまで、「受け」であって敵から不意に間違つて攻撃を受けた場合でも、柔道を利用して相手を倒してはならないというのである。いわゆる護身のための柔術である。だから極端にいえば、「投げ業」を会得して相手を投げる。投げられた相手が起き上がって来たところをまた投げる。反復しているうちに、必ず疲れてくる。投げられた方は、型通りの「受身」に徹すれば少しも疲れないうちに、投げられる方が余裕が十分ある。したがって最後は投げられている方が勝利を得ることとなる。

例えば身体に一物も纏つてない風呂場に敵が襲つて来た場合、柔道家は下帯だけ着ければ他には何にもいらぬ。それで防御に当たることとなるが、その他の銃、剣、槍など、そのほとんどが獲物を持たなければ防御にならないと考える。ここに柔術の奥義が秘められていると竹芝先生は説く。

だから柔道の基本は受身にある。受身に徹せよということである。竹芝先生の教えとともに「礼」は厳しく、入館、退館のときは勿論、先輩に対する言葉使いに至るまで細部にわたり教え込まれた。

柔道を身につけたので健三は一生を通じてどの位、我が身を守り、怪我を防いだことか、枚

算に暇がない。例えば道路で躓いて前に倒れても前受身で受けるから身体には全く支障を来さない。

身体の外郭に当たると背中、腕、腰、脚、外側部などで身体の中核（心臓を始めとする内臓器官すべて）を防御するから、外部は傷つくことがあっても中核部にまでは直接の影響を避ける。ただし、頭は重いし、外部の頂点でもある。稽古でも頭を打つことは堅くいましめられて絶えず、

「顎をひけ、顎をひけ。」

とやかましく稽古中は先生から、また先輩から注意がとぶ。どだい顎を引かないと姿勢が悪くなる（背筋を伸ばすのも先ず顎を引くことから始まる）。習い事のすべてでもあるようだ（例えば茶道、華道、書道、柔・剣道、ダンス、謡、唄など）。姿勢から始まり、これを土台としてすべて築かれていくようである。

健三は昭和四十七年頃、自動車で追突を受けた。「来るな」と車内のバックミラーで予期していたので、鞭打ち症にならずに済んだことが二度ほどあった（ただし予期しない突然受けた追突事故で完全に鞭打ち症となつてしまったこともあった）。

柔道は、健三の身体を健康にし、身体を守ってくれた守護神である。

話はかわるが健三は、中学一年生の頃、弁論部に入ると三年生の先輩から勧められ、入部し

てはみたものの、間もなく弁論大会があり原稿作成に苦勞して、やっと書き上げ、酒巻先輩から添削を受けて、いざ壇上に昇ったところ声が出なくなり、先輩の指導で直ちに降壇というさまりの悪いこともあった。というのも弁論の練習を全くせずにぶっつけ本番だったので、体育館一杯に集まった学生諸君を目前に壇に昇った途端に、あがってしまったわけである。当時の弁論部の部長は齋藤栄三郎先輩（後の参議院議員、経済学博士）であり、卒業式に際し落第生を本校として出したことは遺憾とする荒川五郎校長の式辞に対し、同部長は卒業生代表の謝辞の中に学校側にも責任の一端あり、と述べられて当時としては卒業式の異例な謝辞であった。横網町から市川の鴻の台の陸軍の練兵場まで行軍をしたり、春の大運動会には各クラスごとの応援歌や扮装は少年らしく、愉快で楽しいものであった。校長先生の荒川五郎氏は、当時の貴族院議員といういかめしい肩書の持ち主だったが、特に日常の起居、容儀に重点を置かれて「生活十則」を半紙に十枚、明朝までに持つてくるようにと学生に申しつけて健三も墨と筆で書いたが、なかなか半紙に入らず、夜半まで苦心してやっと半紙に布置が整うようになってから、あとは一気に十枚を書き上げた（健三の書いたものは校長から大変ほめられた）。また僅かの休憩時間には角力をやったり、両手づき、片手落し、鉄棒など中学校の三年間、少年期から青年期に向けてすべてが楽しいことの連続だった。

しかしながら、この楽しさは少年期が青年期に移り変わろうとする、ほんのわずかの期間だった。というのは家の経済が大変な転換期を迎えていたのである。

それは、前述した大恐慌期であり、失業者は町にあふれ、優雅な生活から一転して貧困の谷底に百八十度の変換を余儀なくさせられる時代であった。健三も少年ながら街にあふれる悪の華や、失業者群による求職、求職の声は、市電（東京市と呼ばれていた）のストライキにも表れて、兄の茂なども街の青年団員として市電を運転したりなどした。

健三も家の窮状をみるに忍びず自分なりに随分考えた。そしていつまでも学生でいられるものでない。いつかは社会に出て働くようになる。その時期が早いか遅いかの違いだと気付いた。そして決意した。

「何時までも甘えん坊なのだ。父や母をみる。苦勞の上にさらに苦勞の連続だ。お前だってやればできる何物かがあるはずだ。」

健三の内心は、すでに未知の実業の世界に入り、自ら「茨の道」を歩む決意をしていた。

働きながら学校へ

こうして中学三年終了を一区切として淀橋の「工学院」夜間部に入学手続きをし、昼間は工場で働き、夜は勉強をするという環境を自ら作っていった。

工場に入って間もない頃、「ガラリー」の組み立てカシメ（四、五ミリのリベットをカシメる）がどう考えてもわからず伯父の外山さんに尋ねたが、「自分で考えろ」と相手にしてくれなかった。丁度、春休みだったので作業時間が終わっても健三は考えつづけた。

夜、七時頃、やっとカシメの方法を編み出した。こうなると嬉しくて夢中で、ガラリーをカシメてゆき、空腹もものかわ思いきり打ち込んだ。夜も十時頃だっただろう、毛利町からませが徒歩で（二十分位かかる）夜食を届けてくれた。伯父の外山さんに聞いたに違いない。徹夜でとうとう百個位あったガラリーを全部完了して家に帰り朝食をたべたが、工場で外山さんから「よくやったね」と労われて、またまた嬉しさが一入であった。その一、二日後、ませがおやすさん（安子伯母のこと）がきて、うちの人が（伯父）

「健三は大したものだ。きつと立派な人間になる。」

と感心していたという。また自分が手伝ってやらなかったのは考えあつてのこと（伯母から見

ればひどい仕打ちに見えたので、ませから慰めの言葉でもいう配慮）だったという。

いずれにせよ、健三は周囲からの温かい愛情の中で順調に成長していった。その頃の日本は浜口内閣の金解禁のあとをうけて、不況続きで町には失業者があふれ、一銭の金にも困るような状況だった。

さて話はかわるが、中学を三年で中退した健三は実社会に突入して行くわけだが、ここで断片的だが書き残しておかなければならないことがある。

それは仕事はいろいろと覚えなければならぬことが多く、素直な気持で思い切りとびこむことだということである。自分の環境は自分が造り出すのだから、いつの場合でもその環境の中で最善の方法を考えなければならぬ。だが、その最善を得る方法がむずかしいのである。人間だれだって、いいかげんには仕事はしないであろう。

工場の仕事にはいろいろある。小物から大物まで種類も多く、むずかしいものもあれば、易しいものもある。単純なもの、やさしそうにみえるが正確にいうとむずかしい。単純になればなるほど真実を要求されるからである。例えば丸いもの、または直角なもの、一直線のものなど、そう簡単にはその真髄は求められない。だが、そうしたものの組合せが形を作り実用化されてゆく。

働きながら学校へ

彼等職人は与えられた図面と材料によって製品を作り出してゆく。ただし、相手の要求を満

足させなければ製品ではない。相手の要求を知って、さらにこの要求を啓蒙し、さらに開発してゆくくらいの気持と腕がなければ工場を持つとか、店舗を張って売人顔をするのはおこがましいといわなければならぬ。健三も職人となった以上、職人中の職人にならなければ男として生まれた甲斐がない、と思った。

真実を求めて夢中で働き、夜は勉強した。とにかく若さというものは大変なものである。いくら働いても勉強しても疲れを知らない。知るとしたら朝が思うように起きられない位である。

「健三、健三。」

と母親に声をかけられて、霧の中から呼び起こされた声に次第に現実が甦ってくる毎朝であった。当時は（昭和七、八年頃）どこの工場でも会社でも朝の始業は七時、終業は五時が定まり、夜七時以降仕事をする場合は、最寄りの交番に残業届けを出すことになっていた。

工場の管理は警察の仕事で、工場を建築する場合でもその建築届けは、該当区内の警察に届け出て（工場課というものがあつた）、警視庁に書類が回り、認可印を貰って建築したように記憶している。今から考えると警察は一寸うるさい、こわい存在ではあつたが、おおらかさがあつた。例えば健三が届けにいくと、二度、三度と交番勤務の巡査が同じ人だと、「寒いから風邪をひくなよ」とか、「景気はどうか？」などと声をかけてくれる。こわい存在と思つてゐるだ

けに心嬉しいものだ。

また、この年代に普通小型自動車の免許証を警視庁に取りに行った。

これは、愛次郎が健三に中古だがゼネスという外車（フランス製？）を買ってやるというので免許証の必要が生じてきたものである。当時は申請書を代書屋で書いて貰い、必要書類を添付して警視庁の交通課で面接試験を受ける。簡単な手・足の屈伸運動をやらせて異常の有無を調べる。色盲と眼の左右の視力を調べ、学科は筆記ではなく、口頭で二、三の質問をし、平常であれば、次ぎは実技で運転に入る。現在のようクラシクやカーブができてゐるわけではない。ダットサン（五百キログラム積み）の運転席に乗り、助手席に試験官である巡査が乗る。警視庁の中庭を出て日比谷公園をひとまわりして帰つてきた。問題は途中で日比谷公園寄り時速三十〜四十キロメートルの速度で走っていると突然十メートル位前方に日比谷公園側から足場用の丸太が道路に直角に放りだされる。勿論その前で車は停止する（丸太を踏むようなら駄目である）。検査官は、その時の本人の行動を細部にわたって監視して、良否の判定を下す。日比谷公園一巡の最大の山場である。結果は「合格」となり、数日後に免許証を手できた。

働きながら学校へ
ゼネスを入手以来、工場から遠い現場の連絡には健三があたることとなつて、この中古オートバイは、健三を一時は虜にしたものだった。

こんなことがあった。ある時、愛次郎はヘシ切りを持って健三にハンマーで打てと命じた。健三は父親に怪我をさせて仕舞ったのでは大変だ、という気が働いて尻ごみをしたところ、愛次郎は、「構わず打ってみろ」と微動だにしない。とうとう思い切ってハンマー（十ポンドの重量のもの）を振り上げて、心の中で「うまくゆきますように神様」と念じつつ振り下したハンマーは、ヘシ切りと父の持つ手との中間を叩き、あつという間に父の右手から血がほとばしって、健三は驚いてしまつてどうしてよいのか、わからず、夢中で腰の手拭で愛次郎の血の出る手を押えた。

愛次郎は平然として、顔色一つ変えなかった。健三はとても悪いことをした感じで、それ以来、ハンマーを暇さえあれば振った。こうして始めの頃はびく／＼ものだったが、覚えるより馴れろで、暫くたつと仕事もかなり覚えてきたし、馴れてもきた。仕事場（工場）で仕事をしていた先がみえるようになってきた。例えば面格子を作るにしても、唐草模様が段取りとともに一時間半とか、切り合わせ（ヤスリ仕上げも含めて）一時間、組み立ては、半丸のバンド押えが一時間で、現寸を含め四時間あればできるなど自分の考えた通りに仕事ができるようになってきた。そうなる面白。面白いから弾みがついてくる。弾みがつくと上達してゆく。工場入りしてから、一年半も経つうちにかなりの腕となつてしまった。

「ほど仕事」といって、コークスと粉炭を燃焼させて鉄を焼く。コークスばかりだと鉄に粘り気というものが出てこない。粉炭を混入すると鉄にかなりの粘りが出てくるのがわかる。道具といってタガネ、センターポンチ、鉄箸、柄、タガネ、ヘシ切り、角ヘシ、丸ヘシなどを仕事によってこれに合わせて作る。この道具の良し悪しが仕事のでき栄えや能率に関係してくるから、職人の腕の良否は道具によって定まる。

先にたつ者を横座といい、長い柄のついたハンマーを持つ方を「先手」という。横座は角金敷の左側に「ほど」を構え、「ほど」に鉄を入れて熱する。鉄がほどの中で赤みを帯びてくる頃、なお慎重にとんぼ（ひっくりかえす）しながら赤味が増して欲しい色位になると鉄箸で取りだして金敷にのせる。左手で鉄箸を持つ（先に赤熱した加工物がはさまれている）。右手で「片手ハンマー」の加工物に応じたものを持って、先ず自分の持ったハンマーで「ここを打つ」ことを先手に知らせる。横座は角金敷の角の部分右手のハンマーで軽く打つと音に付られたように先手のハンマーが打つ。次に横座が叩く（打つ）、そこを先手が打つ、横座が打つ、また先手が打つ、こうして一つのリズムが自然に醸しだされる。調子をとるのである。リズムに乗せて横座も先手も一身体の作業が続く。鉄は打たれるからすぐには冷めない。トテンカ、トテンカ、誠に快いリズムと一身体の動きである。

しばらく続くが次第に鉄がさめてくる。横座は左手で加工物を横にずらすか、トンボしながら先手に「もういいよ」と一時休みを動作でつげる。横座と先手は「阿吽の呼吸」が融けあつ

て、「無我の境地」の中で加工物に二人の魂がぶつかり、それが形を作ってゆく。だから素晴らしいものができるのである。

しかし、健三はこれをやりぬいたことが、自分を甘えへの世界から厳しい世界に突き落とし、これでもか、これでもかと試練を与えられた。それは、自然のなせる業、「天の試練」といって感謝した（母親の教えより）。

こうして難行苦行の道程が始まったが、これを乗り越えたからこそ今日がある。

例えば、鉄工所の息子が昼間働くにしても、人なみ以上に働かなければ職人たちの目は、口には出さないが、親父の子供なのという目でみているからますます仕事を一生懸命やった。作業時間は、朝七時から夕方五時までだが、仕事の切れ目で終えるので、いつも五時半か六時になってしまふ。住居は毛利町、工場は大島で仕事を終えて急いでわが家に戻り、母親が支度してくれた夕食の膳を生唾を耐えて横目でみながら、時間を気遣って顔も洗わず飛ぶように学校へ行く毎日だった。工学院夜間部は夕方六時から始まるが、錦糸町から国電に乗って、急いで三、四十分はかかる。

ある時、こんな事があった。機械科二期生の頃だが、工場で仕事を終えて自転車で家（現在の毛利町二十六番地）へ帰った。仕事の都合で時間も五時を過ぎ、六時頃だったと思う。その頃の工場は、叔父にあたる外山賢治さんが工場長だったので、仕事を積極的に覚えてかなり職

場にも溶け込んで「健ちゃん」とか、「健三」とか呼ばれながら、職人達から可愛がられ、本人も熱心に仕事に打ち込んだ。誰でも経験のあることと思うが、仕事に打ち込んでいる時は、面白くて仕様がなほどだった。十六才だったが、その時考えたのは、どうせ工場に入って職人となるのだから、職人で終わってはだめだ。「棒よと願って針とやら」だ。

ようし、十九才までに仕事を完全にマスターして、工場主になろう、と向こう三年の無謀ともいえる計画を打ち樹てた。

目標が定まると朝起きるのも今までは全く違う。母親に「健三、健三」と起されて、すぐ飛び起き、四ノ橋の納豆屋に納豆を買いにゆく。また雨の日の朝など仕事の研究をしたり、全くじつとしていなかった。健三には富美子という可愛い妹がいて頭も良く、クラスでは級長をしていた。母親は働き者でじつとしている時はお針仕事をしており、誠に手早く家事を切り回していた。

外山賢治氏は、母の弟にあたる人で八才の頃、姉に連れられ東京に出てきて以来、この鉄工所に勤めていた人で、当社の蔭の功労者であり、円熟した技量はさることながら人格者で周囲の人々から尊敬された立派な人だった。

健三も健三、健三と幼い時分から可愛がってもらったが、外山賢治氏には女の子ばかりいて男の子がいなかったせいもあると思うが、この従姉妹達には「兄さん」と呼ばれて、健三も妹

の富美子同様に兄妹のように振る舞い、可愛がったものであった。伯母も大変優しい、美しい心根の人だったので、母のませを姉のように慕い、何でも相談していたようである。健三が小学三年生の頃、その伯母が瘰癧にかかり、布団にもたれて座っていた時など母は自宅との間を往来して落ち着かず、わがことのように看病していた。

うた子、きくえ、せい子、のぶ子、すえ子の従妹五人のうち、うた子は戦争の犠牲となったがそのほかの人は健在である。

伯父の外山氏は苦勞を重ねてきた人なので、いわゆる「哲人」であり、健三のよき師匠でもあった。ところがある時自分の意思ではどうにもならないことが、神経系統に出てきた。それは左手でハンマーの柄をしっかりと掴んだ左手の五指が柄を放そうとしても放れない。右手の指でまず左手小指をつまんで開いて、次の薬指を開くといつの間にか小指はまた柄を掴んでいる。一種の痙攣状態である。そこで右手で左腕を軽くもみほぐしながら、数分後には左手が柄を放す。健三には生まれて初めての経験なので印象が深かった。健三が十七才頃のことであった。仕事なのだから当然だが、夏の暑い盛りに「ほど」仕事が多く、地面に一・二メートル×四五センチ位の「地ほど」に石炭とコークスで、厚さ三十二センチ×幅一五センチ、長さ二メートルほどの鉄板を五角形に曲げる作業である。「ほど」には常時四、五本の材料がくべられて、定盤には折り曲げ用のガッチリした型がしっかりと取りつけられ、先端が扇型になっている柄の

ついた道具で型になじませる。次いで「角へし」をあてがって、百二十ポンドの長柄のハンマーで横振りし、この頭をうつ。なかなか大変な作業である。背中に「ほど」の熱を受け、前面には赤熱した材料、しかも手早くやらなければ鉄は冷めてしまう。真夏の、ジツとして汗の出る時期だったが、この作業は連続して一週間ほど行なわれた。先手を勤める車田氏や茂木氏は交代に休む。横座（叔父）と健三（先手）は全く休めない。

愛次郎が生卵と氷とトマトを買ってきて置いてあったが、十時と三時以外には飲まない。汗はひどいもので汗の中で働いている。早くこの作業を終らせなければ作業員は皆、まいってしまふ。しかし、どう焦っても手順通りにやらなければ製品はできない。健三は若かったから身体が保てた。二人は一日働いては一日休みを繰り返していた。健三はそれこそ歯をくいしばって頑張った。それで仕事も覚えたし、ハンマーの横っ振りが上手になった。

また、学校が夏休みの時期に村山貯水池の柵の仕事が松村組から発注された。柱を工場て二百五十本位作ってゆき、現地で笠木と胴縁と丸棒をつける仕事である。現物は、動力がないので取りつけには、「目打ち」を使用して現場あわせの穴を笠木のアングルにあけて、金網をビスで押さえるフラットバーにそれぞれ穴を明けて金網屋があとから張れるようにする現地作業であった。健三はその頃は、鉄を自由に加工できる腕前となっていたし、仕事も先がよく読めるようになっていたので、先手の一名とともに道具造りと柱の製作を工場て完了し、現場に乗り

込んでいった。

村山貯水池は全く淋しいところで、松村組の土方の飯場があり、ここで約一週間お世話になることとなった。何しろ藪の中であり、蚊や蠅は大変なものだ。朝の味噌汁に蠅が何匹も入っていたのにはかねて覚悟はしてきたものの到底、健三には手も出ないし、きちょうめんな正木家の生活に育った健三には全くの別世界で、身体全体が戦慄を覚えて、勿論食欲など出なかった。まだ外は夏の夜明けで朝靄がうっすらとこの飯場の食堂にたちこめている。当番の若い者が四斗樽の漬物から茄子のお新香を皿に盛りつけている。

「おはよう」と声をかけながら入ってゆく。

「鍛冶屋さん、寝られた。」

「うん、よく寝られた。」

若い健三に気遣いながら、

「どうぞ」と食事をすすめてくれた。五、六人の仲間が入ってくる。

「寝られないよ。」

「今日も暑いぞ。」

当番の若者は次々に腕に飯を盛りつけ、味噌汁を注ぎ込む。健三達二人は初めての朝食なので、じつとその様子を物めずらしげに眺めていた。味噌汁が配られる。一斉に「頂きます」を

いうと箸が動く。健三は汁碗の中に黒いものが二、三浮いているのを先程から何だろうと思っていたがよく見ると蠅だ。グツときた。もう箸はつけられなかった。土方の人達はこれを見て「大丈夫、病気になるかならないよ。」と自分達の碗の中の蠅をポン／＼と箸でつまみ上げて土間に捨てた。

「食べないと身体にこたえるよ。」

と皆で心配してくれたが、とつても健三には食べられなかったので、朝食は抜いて作業に出た。健三の先手の人は、三十五才位だったがよく働いた。暑いので水を飲む。昼食は油っこいものだったので食べたが胸につかえる。仕事は至極単純で簡単だが、土方の人達からは、鍛冶屋さんはずごく腕がいいと思われた。貯水池の周囲に今というフェンスをつくって、人が簡単に入れないようにするための柵造りなのである。夕方になると、ファイゴで「ほど」に火を起して道具の「手直し」をする。二、三十分で全て終り、夕飯をたべる。

働きながら学校へ
こうした単調な現場作業が一週間も続き、土方の人達とも仲良しになったし、食事も気をつかってくれて、蠅は健三に見せないようにしていた。作業は共同作業なのである。工場で作ってきた柱を掘って建て寸法を健三がきめると、コンクリートを穴に流し込んで固めてゆく。それに健三達が笠木と胴縁をつけ網止めの平鋼をビス止めしてゆく。形状が山に沿って直線だけではなく曲線もある。

四メートルの半径で円を描くような所は、L六×五十の笠木・銅縁・平鋼ともそのRにあわせてゆかなければならない。金敷きに置物をセットし、ハンマーで打ちながら、Rを造ってゆく。この作業を役所の監督さんも見に来て、その出来上がりのよいのには感心して帰ってゆき、健三は若いのにかなりの金を儲けているのだろうと土方の人達から思われて、コンクリート造りのホテルの側まで作業が進んだとき、先手の人が

「健三さん、昨夜土方の人達があんたが随分、仕事が早いし、腕が良いので金を儲けたらうから、分け前を貰おうぜという相談をしていた。どうする？」

と健三に伝えた。健三はかねてこのような時にと、母からも余分に小遣いを貰ってきていたので、壱円をノシ袋に入れて腰のポケットに忍ばせていたところ、夕方になって予想通り、土方の飯場の頭らしい四十五才位の人が、

「鍛冶屋さん随分この仕事では儲けたる。」
と喋ってきた。

「本当にいろいろご配慮を有難う存じました。については、ほんの心ばかりですが」といいながら、ポケットからノシ袋を渡す。裏を見て

「これじゃ、少ない」といい出した。

「私達は請負できてるんじゃないんですよ。」

健三はい、余りわけがわからなければ二人でハンマーを振り上げて、おどす事に相談ができていたので、先手の人が頃はよいと見たか、いきなりハンマーを振り上げた。二人で遅れじとハンマーを無言で振り上げると、一寸たじろいで

「まあ、待つて下さい。私が監督から完成証明を貰って上げなければ貴方がたは幾日もこの現場から帰ることはできない。請負でないのなら仕方がない。皆に話して納得させる。」と極くあつさりとした片がついて、その翌日は完成証明を貰った。仕事は一切終わったのだ。しかし、その日の夕方現場近くの池に、残材を始末するため、アングル、丸棒、平鋼が土方たちの手によって池に音をたてながら投げ込まれるのを見て、健三は驚いてしまった。

「何故だろう？」

夜になって土方の人達にきくと

「役所は予算を越えてもいけないが、余らせてもいけない。だから処分したのさ。」
という説明だった。まだ十八才の彼には矛盾だらけの社会構造を理解するのは困難であった。

働きながら学校へ
翌日は道具の後始末をキッチンと済ませ、土方の飯場長に連れられて初めて役所の監督である緑川さんという最高責任者に、工事完了の証明を出してもらおうのと同時に、挨拶に向いた。そしてその夜、土方の飯場の人達と酒を飲みかわしてお礼を述べ、山芋をお土産に駅まで飯場長が送ってくれた。

この仕事は当工場内では、職長や請負の人達のほとんどの意見が現場作業は二、三週間はかかると見込んでいたが、健三には七、十日間にしか思えなかったし、丁度親元を離れての修業には格好の現場だと自分でも思っていた。しかし、前述のような食事の件でも健三は未知の経験させられるなど、人間形成の上にどの位役立ったか、計り知れないものがあつた。

愛次郎の思い出

健三が菊川幼稚園に通っていた頃、雨が降ってきて、近所から通っている人達は傘を持ってわが児を迎えにきて健三は唯一人残されて悲しくなり、大久保先生に慰められていたところへオートバイの近づく音がした。

「ああ、お父さんだ。」

急に元気がでて、はしやぎながら逞しい愛次郎の腕からオートバイのサイドカーに移された。口鬚を蓄えた愛次郎は、厳めしい顔付で家へ向かった。

愛次郎は犬が好きで、健三に仔犬をあてがって、「情操教育」を施したりしていた。これが縁で健三は生涯犬との付合をするようになる。犬には随分と助けられている。溝に落ち、流されてゆくのを啗えて引きずり上げられたり、泥棒を再三にわたり捕まえる手柄を立てたり、愛玩と実用を兼ねて犬は健三の友となり、おもり役であつた。

愛次郎が子供の頃、まだ学校はなく、寺子屋だつたと思われる。愛次郎はときおり火鉢の灰に火箸でよく文字を書いていた。健三には特別厳しく、時々難問を出す。小学六年生の頃、

「健三、ッさすがッという字は」

とくる。「流石」と正解なら、ご機嫌だが、間違うと機嫌はすこぶる悪い。

健三が習字で丸を貰つてくると、ニコニコして事務所でも時々職員に披露する。そういうことで健三はますます習字をやらなければならない羽目となつてゆくが、次第に習字に対する興味が出てきて、「区」や「市」の展覧会にはクラス代表として出品をするようにまでなつた。自分の天性を引き出したのは、実は「父」である。健三は感謝している（習字は現在でも続けている）。

愛次郎は小学三年生だった健三を連れて市川に空気銃を持参し、小鳥を打ちにゆく。清宮さんが一緒に、夕方は料亭によって酒をくみかわす。芸者さんが「三味線」で健三が牛若丸をやるなど当時学校で教つた遊技を披露したりした。その帰途、愛次郎は健三に「母には内緒だよ」という。翌日、健三は母親から

「昨日は、何処にいったのか、話してみなさい。」
とつめよられた。しかし、男同志の約束だ。決して「口」は割らなかつた。

電気館

健三が小学校四年生の頃、浅草（六区）に電気館が建設されたが、繩張りがあつて随分苦勞されたようだったが、強圧に屈することなく、遂に完成させたのは愛次郎の努力であつたと番頭さんから聞かされていた（愛次郎は正義感に富み、常に弱者の味方であつたという）。

映画にもよく、健三を連れて菊川町の音羽館へ行つた。また角撲見物も好きで中学生の自分を連れて、わずかの時間をさいては、国技館に行つたものである。

当時、大関大ノ里一行は協会と分離行動を取つたが、「天龍」はその後、帰順し、武蔵山時代が到来する。愛次郎は角撲には大変な熱の入れようであつたし、また鉄砲打ちも好きであつたが、投網の舟を出しては、家族一同と海上で楽しんだ。時々夕食には大森の「沢田屋」まで、蟹料理を食べることが好きで、円タクで一家全員乗り込んで行くこともあつた。子供の頃から、愛次郎は健三を可愛がるというより、自分なりの教育を施しているように思えた。

中学三年で健三が中退するのを惜しんで、
「ゆけゆけ、面倒は見る。」

と薦めたが、健三の茨の道を歩む決意に愛次郎は無言ではあつたが、それなりに満足しているように思えた。

その頃は、猿江の工場を引き揚げ、大島に移り貧困の中であったが、「ゼネス」(欧州物)のオートバイを買って与え、希望を持たせたのは子供の健三にも痛いほどよく解った。仕事には非常に情熱を傾け、情深い愛次郎は反面、恐い父親でもあった。青年になった頃、オーバーを作ったら、

「まだ、生意気だ。」

とひどく叱られたが、健三は「ハイ」と返事をするだけであつた。また愛次郎は仕事を覚えることや「勉強」は自分の力でやれ、仕事にしる勉強にしる、教えてもらうのを待っていないで進んで自らやれ、という。ひいては「自立せよ」が愛次郎の鉄則でもあつたようだ。

健三が中学三年となり、猿江(現毛利町)から大島に移つた。借家の道路を隔てて百坪ほどの土地を借り、そこに清家という大工さんを相手に工場を建て屋根をふき、周囲の塀を作つたりしていた。

その頃、愛次郎は五十才である。健三は「父は偉いな」と心から思った。その時代は五十才といえど「人生五十年」が常識だつたし、五十才で事業に支障を生じた場合、そのまま終つてしまふのが普通のパターンであつた。これを跳ね返したのである。

大島の工場が稼働して、二年目の頃、深川の住宅に愛次郎の帰りを待っていた紳士がいた。この方が戸田利兵衛氏、すなわち戸田建設(当時の戸田組)の社長である。何故、夜、正木家

にきたのだろうか。

理由は「岩手県の釜石製鉄所の火力発電所の工事を請け負ってやってはいるが、現場がトラブルでどうにもならず、工事を中止している。納期は迫ってきているし気が気でないが、戸田組としてはどうにもならない。そこで、正木君に一肌脱いで貰いたいのでお邪魔した」というのである。

兄の茂を始め、番頭さん達は「戸田組は正木を面倒みると最後の土壇場までいっていなから、遂に放置した。許せない。戸田の仕事は一切やらないと思つたし、また思われた」に違いない。しかし、戸田組としては事態は切羽つまっている。

会社の信用にかけても、このピンチから早く抜け出さなければならぬ。

「何んとしても」と、社長はかなりの覚悟できているに違いない、と健三には思えた。それから社長は三回位、同じように夜きて、盛んに愛次郎を説得していた。それから二、三日後、愛次郎は職人四名を連れて釜石に向かうこととなつた。

仕事の少ない時ほど、職人達の出入りは多い。そうした中にも釜石に行っていた者の話などから、「釜石では毎月のように喧嘩の挙げ句の果ては人が死亡する。警察の力も弱い。」という風評がたつていた。危険だ。工場の誰しもが「釜石行き」に危惧の念を抱き、愛次郎にやめるよういつたが、本人の決意は固く出発した。上野駅に送つたが、愛次郎は平常と少しも変わら

ぬ様子で旅立った。

一週間ほどして、愛次郎が帰ってきた。工事が再開し始め、もう大丈夫とみて帰京したという。健三は愛次郎に

「現場はどうでしたか。」と尋ねた。愛次郎は

「現場に到着すると、直ちに仕事に係った。石丸君もいたが（戸田建設の副社長までなった人、当時釜石の現場主任、学校出のエリートで、父とは戸田組の下請け時代には交際が深かった）連中（もめている連中のこと）もきて、平気で仕事に係っていた。正木がきた、というだけだったよ。」

と話した。東京では鉄工所の草分けだから、鍛冶屋さんは一度は正木鉄工所に草履を脱いだのだろう。

愛次郎の信念は、「人に迷惑をかけられても、人には迷惑をかけない」ことに徹していたようだ。理由はとにかく、戸田組は、仕事を続行できるようになったのだから、目出たいことであった。後日談となるが、「火力発電所工事」は、釜石製鉄所としても、最も重要な工事の一つであり、本工事が中断されて手のつけられない状態なので、製鉄所の現場監督は、大船渡川の対岸の山腹から望遠鏡で現場の毎日の状況を視察していた、ということを北山善太郎（昭和十三年当時、当社施工の同所鑄物、機械両工場新築工事の担当だった施設係長）がいていた。

また神奈川県が生麦に小倉石油（現日本石油）が備蓄用油タンク（直径十メートル×高さ十メートル）を三基請負った。現場は臨海地帯で砂地である。松本鶴吉氏が部下を十名ほど連れて乗込んだ。仕事の少ない時であったが、深堀組の若い衆が「仕事をさせてくれ」というので松本氏が見積らせたところ、鉦一本が予算の十倍の三十銭だったので、驚いて松本鶴吉氏は川崎から愛次郎に報告にきた。愛次郎は

「よし、俺がいく。」

と翌日、現場に向向いて自らも作業をしていた所、暫くして十数名の連中がやってきた。

「おや、おやじさんだ。」

そのうちの一人がいった。

「その節はお世話になりました。」

といわれ、愛次郎は覚えてはいなかったそうだが、先方の組頭は「草間」と名乗って、今までの経過を詫びたという。そこで愛次郎は、

「真面目に働かなければいけないよ。」と注意したそうだが、一応作業はやらせ、鉦の単価はこちらの予算よりも低く、仕事も丁寧によく働いたという。健三は深堀組の事務所兼住居のある生麦の小高い山の上に建っている家に、勘定（お金）を届けにいったことがあった。

真面目にさえやっていたら絶対に敵はなく、必ず最後はうまくいく。「人に欺かれても人を欺

そこで健三は、戸田利兵衛氏は絵には堪能であるから、紹介を願おうと思い、戸田社長とお会いして、今里龍生先生を紹介して戴き、愛次郎の写真三枚から「生けるが如き胸像」は完成された。先生の住居は鎌倉であったから、小田原の親戚の人々にも見て貰った。

健三が出征したあと、三年後には兄の茂の出征となり、愛次郎は箱根に病後の療養を母と共に



正木愛次郎を囲んで（昭和15年4月砂町工場て、中央が愛次郎）

いてはならぬ。」というのが愛次郎の身上であったと思う。

終戦後の或る日、那須ベルト商店の社長が大島の焼け跡のバラックに初めて訪ねてこられた。戦前は錦糸町のJR駅前（現在の巡查派出所のあるあたりで四ツ通りに面していた）に事務所があったが、戦後は旅所橋通りに事務所を構えられた。初対面ではあったが、戦時中から戦災のこと、それから話は父の愛次郎のことに及び、次のように話された。

昭和十四年冬の頃、お店に（錦糸町店）老紳士が訪れて、若い店員に金十五円也を差し出し、「私は以前、こちらに大変ご迷惑をおかけしたことがあります、今日はその償いとしてこのお金を置いて帰りますからよろしく。」といいおいてお店を出られた。驚いた店員は（当時十五円といえば大体現在の二カ月分の給料）、直ちに社長に取り次ぎ、店員にこの人の後を付けさせたら、「正木」である事を付き止めたそうで、この話を聞いて健三は愛次郎の隠れた一面を知らされたのである。そして健三は、

「父の愛次郎とはこういう人だった」に感激を新たにしました。

ある時、茂は自分の子の「愛一」のために三輪車を買ってきたことがあった。その時、愛次郎は茂に

「三輪車をなぜ正一にも買ってこなかった。健三は出征中なのだ。これは持つていく。愛一の分は後から買え。」

と三輪車を砂町に持つてこさせたことがあったという。また、五月の初節句には愛一も正一も全く同じものを買ひ与えた。何事にも公平・平等が父・愛次郎の願いであったことが、健三には十分理解できた。

後年になって、当社が創業五十周年の行事を営むに当たり、愛次郎の胸像を造って、毎日愛次郎が「健三を見守る」、「父親に報告する」をすることによって、「愛次郎は現在でも生きている」のだという考えに至った。その胸像についてふれる。

創業五十周年行事の一環として、健三はかねてより創始者である父の胸像を造りたいと考えていた。

に、毎日規則正しく送っていたが、療養も途中で東京に帰り、兄嫁は乳飲み子、愛一を連れ伊東に疎開した。かくして、大島工場に父母は起居した（ヒサ、正一は砂町工場を守る意味で疎開はしなかった。両親の心中の決意を言えば、そうせざるを得なかった）。愛次郎はこの時、すでに覚悟を定めていたのだ。したがって母も同じ思いであった。自分たちが一生を掛け命がけで築いてきた「城」が今や戦争という外力によって瓦壊することは時間の問題である。

年老いて病に倒れたりといえども守り抜くというその信念・執念が死してなお「守護神」とならんとの心境に到達していたことは容易に察し得るところである。

創業者の苦悩

健三が小学生の頃、父の愛次郎は経営面で苦勞していたのが、子供ながらにしてよくわかった。夕方、「健三、今日は音羽館に行くよ」といわれても三年生頃のことだが、余り嬉しくはなかった。しかし、愛次郎の息抜きである位のことには、子供心にも判った。それも必ずといってよいほど、弁護士さんの所で一時間は話をしてからの音羽館見物なので、子供の健三には退屈この上もなかった。が、父親が苦勞しているなと思うと、断る気にはならなかった。

中学二、三年の頃は、よく「お使いに行つてこい」と高利貸の高橋のさたけさんやほしなさんの所へ、利息らしきお金を持って行くお使いをさせられたが、父親が気の毒で自分がなんとかできたらと随分思った。その頃は仕事らしい仕事は余りなかった様子で、不況で金づまり現象であったから、経営者にはとくにこたえたのであった。

この不況の時代のある日、声高に「〇〇組の〇〇だ。おやじはいるか。」と全くあきれかえる大声で、伴纏を着た二人組の男が入ってきた。丁度、休日だったので愛次郎は大声で「今、いないといっておけ」と兄の茂にい、茂は仕方なく二人に「今、いない」と告げる。押問答が続いて、最後に「〇〇がきたとおやじにいっておけ」と捨て台詞を残して帰ってゆく。これは浅草の電気館の工事を愛次郎が請け負った名残が尾を引いていたのであった。

この工事は、当時としては縄張り圏の中の工事だったから、当事者は仕事よりも、この縄張りにこだわったことは想像に難くない。愛次郎が鉄骨屋として、この圏内に飛び込んでいったのであるから、勿論、相当の決意の上のことである。

〇〇組から呼びつけられて、応接室に通されると、そこには壁掛けに日本刀がズラリと並び、他の壁には鉄砲が並び掛けられていた。ほどなくして、この家の主が出てきて、挨拶が済むと日本刀を一振り取り外し、この刀の自慢をする。こちらが「やくざ」ならまだしも、極く真面目な素人なのだから、相手がどのような心境になるかぐらいは考えてよい筈であった。しかし、愛次郎はこのような仕草にも敢えて平然と堪え、必要以上の言葉は発しなかったようだ。こうしたことは再三にわたり繰り返された。

工事主任は本工事に着手してほどなく、縊死したと聞く。愛次郎は敢然と本工事を最後まで、やりぬき完成した。当時の封建思想の華やかなりし頃の父親の努力の一面を垣間見ることができ。

健三が中学一年か、二年のお花見の頃、工場は休日であ次郎から小遣いを貰い、妹の富美子連れて映画見物に出掛けようとした矢先、四人組の鍛冶屋がドヤドヤと事務所の前を通り、工場の中に入っていったが、すぐ出てきて事務所前に咲いていた桜の小枝を一人が折って、立ち去ろうとした。その時、「二寸待て」の愛次郎の大声が家の中から聞こえてきた。

四人組は立ち止まった。健三は心の中で早く帰ればいいのと思った瞬間、愛次郎が飛び出してきた。「断りもなく、工場に入るとは何事だ。」

愛次郎のものすごい剣幕で四人組は慌てた。彼らは早く立ち去りたくても愛次郎が立ちはだかっている。事務所と塀の間だからどうにもならない。するとなかの一人が、
「何だっというんだ。」

と窮鼠猫を噛むの例えて居直った。健三は富美子がいるので、

「おじさん達やめて下さい。」

といったが、四人組は「どうすりゃいいんだ」という。

愛次郎は大喝一声「謝れ」と雷が落ちるような迫力があつた。四人組は「すみません」といつて揃って出ていった。

家には、健三と富美子の外になかったので、健三は一時はどうなることかと、心配をしたが、無事に四人組がかえったのでホッとした。「早く行っておいで」と優しい父親に戻っていたわるようにいわれた時は、愛次郎は本当に偉いんだと心の奥底から思った。

横網町の「震災記念堂」は、当時の工事としてはかなりの大工事であった。鉄骨工事だけでも千五百トンはあつたし、神社仏閣の鉄骨工事は、わが国初めてとあつて、屋根面の上反り、四方転び、それにまつわる鉄の伸びの割りだしは、特に入念であつたようだ。

当時の戸田組（現戸田建設株）は建設会社としては、下位の方であったが、予算の関係で仕事に堅いので東京市からとくに相談を持ち掛けられ、それに応じたわけであった。健三が小学五年の時に話が出て、翌年には縮尺の模型ができて上がり（当時百円と工場内でも噂にのぼった）、健三は子供心に「もったいない」と思ったものである。

愛次郎は現寸の責任者に染川一彦さんを選び、その一切を任せた。鉄骨はとくに現寸屋さんの腕で仕事が決まるので、愛次郎としても古くからの職人もおり、人選にはどの位苦労したか苦労のほどが察せられる。

現地加工であったので、番頭さんには、志賀さん、大野さんがその任に当たられたが、諸方（穴屋、取り付け屋、カシメ屋など）が全部外来の人達なので材料から加工に至るまで「金策」も含めて、大変な苦労を一人で背負ったのである。しかも奇合い世帯を切り回す難しさはとも筆舌につくせなかったであろう。

こうした中にながら、愚痴は一言も漏らさなかった愛次郎は、本当に偉大な人物であったと思う。

全てを我が責任と感じ、森羅万象悉くは吾が心境なり、と受け取れる迄には余程の修業を積んでも到達出来る境地ではない。その上、仕事は全く完全無欠で後世までその名が残る素晴らしいでき栄えだったのである。

しかし、遺憾なことに工事は大赤字を計上し、遂に工場を明け渡す結果となり、大勢の方々に迷惑をかけることとなった。

仕事で千歳と釜石へ

北海道の千歳飛行場の格納庫鉄骨工事（大湊海軍）が突然施工と定まり、鍛冶屋の親方は本市田市郎氏となり、二十名位の職工を引率して乗り込んだ。千歳は明治時代から既に飛行場の予定地として数十万坪の見渡すかぎりの地平線にまで芝生が植えられていた軍用基地である。「明治屋」という旅館やその傍らに明治天皇御駐輦之碑があつて、その時代から用意されていたものである。先見性というか、まだ飛行機が実用機となつてない頃の時代の先を見越した素晴らしい予見着眼である。

この工事の総指揮を池田平太郎氏（当社出入りの鈴木塗装店、鈴木聞吾氏の義兄）が受け持った。これにはかなりの機械工具が必要であり、社長もシャリングマシンや自動ガス切断器十台、アングルカッター、ポンチングマシン、五十HPコンプレッサー（玉木鉄工所製・五十HPとしては第一号機）などかなりの設備投資を行ったものである。

大湊海軍は、刑務所の囚人を使役として三十名位雇用していた。朝、夕の往復に護衛が五、六名ついてはいるが、健三たちとすれ違ひざまに馬の毛であんだ米粒ほどの草履やわらじをタバコ欲しさに動作で代償を求める。だれでもが、そうした場合持っているだけのタバコはあげてしまう。それが人情というものなのだろう。

この飛行場の滑走路工事には外部よりアスファルト屋が入ってきた。区域外に飯場を建ててそこで寝起きをしている。

果てしない広大な地面には自然はあるが、それ以外の何物もない。当社でも作業小屋を作つて雨水から機械類を守る小屋がポツンと二棟建てられていた。健三がこの現場に釜石から呼びつけられたのは、東京より近いということ、健三をことあるごとに勉強させようとした父親の配慮と受け取れる。何故かという現場での苦労は、工場内で製作しているときは全く違つた人間に変身してしまうから驚くやら困るやらである。

愛次郎の「命令」を受けて、初めから釜石の現場に健三の相談役として同行した田辺夫妻は別格で大工の木村さん、經理の中村君、現場監督の小原さん、竹田さん、皆さんよい人達のだが現場という開放感があるうえに満足感がなく淋しさがある。そこで、手取り早いのがつい酒ということとなる。飲むほどに酔うほどにエスカレートしてくる。「酒」ほど罪の多い飲物もないと思う。人が全く変わってしまうのだから始末が悪い。

ところが愛次郎の酒は本物であつたようだ。ませや伯母からよく聞かされたが、一晚中飲んでいても膝を崩さない。いくらでも飲むのだそうで、誰も敵わなかつたといわれる（前述したように兄の茂も大変、酒が好きであつた）が、同じ兄弟でも健三は全く駄目で、父親から夕食時に差されると、一口か二口位がよい所で、すぐに眠くなるから困る。盃を持ったまま、盃の

酒をこぼすことなく、そのままの姿勢で寝入るといふから面白い。時折、酒の席でハッと目ざめることがあるようだが、右手に盃を水平に持っていることに気付いたそうだ。愛次郎が酒豪であったから正木家では四斗樽がいつもおいてあった。

鉄工所という職業を「水商売」という。何故かという、商売の起伏が激しいからである。一般の商売と違って相場の変動が激しいのである（鉄は昭和四十八年以来、相場は下がり放しで冷えきっている。現在は構造不況業種で誇れない）。従って儲けも大きい、損も大きい。旅館や料理屋にもこの水商売という言葉は用いられる。

さて、この千歳の現場で酒から男達の喧嘩となり、刃傷沙汰にまで及んだことは想像もできなかった。

春先の道内の水は冷たい。ご駐輦の碑の前の池に刃物が、投げ込まれたからと、冷たい水の中を刑事が捜したという。こんな事件を起しているのは仕事は進まない。機械も破損したということ、健三も釜石から急遽かけつけた。早速機械の掃除をして油を差し、動かして見ると平常通りの運転で安心し本社に報告した。池田氏に後事を依頼して健三は釜石に帰りはしたが、この工事は完成はしたのだが、大変な赤字となってその補填には随分と苦勞をしたものである。

現場では思いもよらないことが突然起きてくる。どう対処してよいのか？判断がその場ではできないことが多い。こうした時、参考となるのは経験である。経験を持ってすれば、大体が

うまくゆく。論理や筋論ではないのである。

人間は感情の動物だというけど全くその通りで、要は人間関係を上手にやればよいのである。道理ではわかってはいるけど、いざ実行となると若さ、経験不足でつい感情が入ってしまう。

釜石の現場には、初めの頃から田辺氏夫妻、柳原一郎君も手伝いとして来釜し、会社からは竹田氏、小原氏というそうそうたる現場主任級の人達にもきてもらった。本社の経理を担当していた中村氏も現場で実際の勉強をするということ、釜石へきたが、惜しいことに酒で体調を崩し帰京した。竹田氏や小原氏達は、優秀な現場監督で、この二人が、来釜したら工事は面白いように進捗した。この釜石では、健三は俵屋旅館に投宿していた。それは現場でも自分自身はよかつたのだが、会社の代表者として、会社の面子上そうしたのである。

若冠二十二才の若僧では誰も信用はしない。誰一人として知人もいなかったし、頼れる人もいない釜石の地へ愛次郎は自分の代理として、よくぞ健三を派遣したものだ、父親の炯眼には今だに敬服している。

健三は全くの世間知らずであったが、釜石で困ったことは、まず言葉で、東北弁でペラペラ話しかけられると全くわからず閉口した。例えば、「ヒッコペッコクレンセ」というのは、「火を少し下さい」という言葉である。しかし、覚えるより馴れろで次第に判断できるようになつていった。

後のことになるが、昭和四十年に欧州へいったときでも、言葉が全くしゃべれなかったのが、お互いにわからないのだから手振り身振りであれば何とかなるということ、二十数日間をわたって七カ国を旅行してきた。

言葉には、摩訶不思議な力があって、必要の程度に応じて相手に反応すると、何かの本に書いてあったことを思い出す。

これは全世界の人間全てに對していえることだと思ふ。意思とか、感情とかいうが、それを表現しなければ絶対に相手には通じないのである。その頃まだ二十二才の若さでは信用もなく全くみじめな存在だった。従って工事を完成させるため毎日くが必死の勉強であつた。

ヒサ(妻)との出会い

昭和十四年に岩手県釜石市に鉄道が開通した。釜石は、「良質の鉄」が生産される。

明治二十年の頃、田中長兵衛という人が、小倉博士を招聘して外国の製鉄技術を見よう見真似で鉱脈から鉱石を採り、キューポラで溶解して鉄を作る事業を興した。ところが、思ったような結果が得られず、苦心慘澹していたところ、ある夜、鉱石をキューポラに入れ、白い鉱石を入れて点火した所、ドロくくと鉱湯が湯口から出てきたので歓喜した夢を見たという。

その白い鉱石は何かと種々考えたところ、その周囲に大橋という所があり、そこに石灰がある事が判明したので、早速この石灰を投入してみると夢で見た通りの湯が湯口からドロくくと出てきた。小倉博士と田中さんの血のにじむ努力が遂に報われて、製鉄というものが事業化した、と市内の鈴子町公園内に由来が記載されている。

鉄の街「釜石」と無資源国「日本」、ここに幾多のドラマが展開されてゆくのである。健三たちが当時、使用していた鋳(リベット)には釜石物が最上とされていた。純度が高いので軟らかく折れる心配がないことから珍重がられていた。

自分達の職業の原点である鉄の街にきたので、健三は「男として鉄に取り組むことは本懐であり、一番かたい(固、堅、硬)とされている物」に取り組むので強靱な意志と不拔の実行

力がなくてはやり通せることはできない。いわば、男の中の男の仕事である」と自分なりに考えていた。そう考えていたので釜石滞在中は、健康とか寿命とか病気など全く考えず、命がけで仕事に打ち込んだ。

こうした健三を母親は心配し「熊のい」（胃腸の薬）や寒かろうとあわせや足袋と一緒に「お守り」などを送ってくれた。

旅館の人達とも健三が長逗留しているうちに、その一員のようになっていた。主人である館主、郷広助氏は、釜石市の名士であり、堂々とした紳士だった。頭髪を角刈りし、角帯をキチンと締めたその姿は古武士の面影を残し、その上、東京弁を話し英語も堪能で釜石には珍しい旅館の主人であった。彼は出身地は土佐、高知市で以前は捕鯨会社を経営していたという。この釜石での健三の生活は朝は早く、夕方は遅かったので、体をきづかって旅館の奥さんが、「主人から、このお菓を飲むと身体によいから」と栄養剤を時々くれた。

健三は釜石にいても鉄に関することなら、ほとんど何んでもできる自信はあったが、煉瓦とか、セメントとか、土木工事などには全く未経験であった。

ある日、夜八時頃帰館してみると工事の入札が届けられていた。土木工事なので全くわからない。現場事務所へ電話をして聞くより、他に方法はない。土木でも煉瓦積みなどは、自分でその動作をやって見て単価を作ってゆく。そんなことで徹夜で見積をよくやった。苦心の末、

やっと作った見積書も入札の当日、朝九時に（入札も初めての経験だったが）談合屋が健三の来るのを待っていて、この仕事は是非「〇〇組に」と第一、二、三回と入札の額が記入された札を入札者全体に配布して「落札」するわけである。

見積は、施主である製鉄所側の予算の七十%以下では落札しない。勿論、予算をオーバーすれば何回も入札させるが、落札する側としては、これ以上は入札に応じられない（予算ではできない）ような時には、一旦中止して日を改めて入札やり直しとなる。

談合とは、仕事の関係上、どうしてもその仕事に欲しい場合に談合屋さんが加わるのだが、この時、落札者はその工事費の何%とかを他に積み立てて（親睦会ができている）忘年会とか、暑氣払いとか、親睦会に使う仕組みになっていた。こうすることが製鉄所を中心とした下請け業者間の潤滑油の役割を果たしていた。

清水組、大林組、戸田組、間組、鴻池組、宮地鉄工所、正木鉄工所、菅組、阿世知組、福田組など代表的な一流業者と地元業者が加わって繰りひろげられる日本製鉄釜石製鉄所第一期拡張工事は、行き詰まったわが国の経済発展への糸口でもあった。

その頃、〃紀元は二千六百年〃という歌が流行し、国家意識の高揚は勿論、昭和六年、柳条溝に、その端を発した日中戦争は、無資源国日本が当然そうなるべき運命に立されたものである。A・B・C・Dラインによる日本への経済封鎖は、浜口内閣の「金解禁」によって、ます

ます強い圧力となって日本経済に大打撃を与え、「国の死活の問題」を提起し、ここに日本の「中国進出」が明確となって、中国全土に日本陸軍の侵略が始まっていった。

話は、さかのぼるが日露戦争の時は海軍司令長官・東郷平八郎大將率いる日本艦隊はバルチック艦隊三十八隻中、二十六隻を撃沈して全滅せしめた。一方、乃木希典第三軍司令官は旅順攻略戦に参加歩兵十三万のうち五万九千の大犠牲をもってようやく攻略し、「海の東郷・陸の乃木」と不滅の金字塔を打ちたてた。これによって日本国の国威は全世界に知れわたり、小国日本が米・英・仏の大国の中に入っていったが、小国たりとも、侮り難い日本に3S政策（スクリーン、スポーツ、セックスの方向に向かわせる政策）などによって国民の意識をかえようとしたのである。

日本国民は勤勉であり、真面目である。徳川三百年の長い鎖国の間に培われた高い文化・高尚な思想・さらに民族としての血が若く、全てに熱心だ。

これは相手から見れば、扱いにくいしろものである。こういうしろものには、3S政策によって扱い易くしてゆく方が得策と考えたからであろう。

一寸話しは外れるが、日本人の眼の光は相当なものだ。これは日本人同志だからわからないが、外国に行つて見るとよくわかる。眼光はららんと輝きわたっているのである。他国民のほとんどが眼はドロリとしている。いわゆる、やる気のない眼であり、光がない。この眼の輝

きこそ民族の年齢であると健三は常に思っているが、それは日本人でも眼の輝きのない者だつて多い。

輝くとは心が輝いているのではなからうか？やる気十分、眼の色が違うなどという。商談・縁談・学術・芸事・芸術・習字・経営などすべてにいえることだ。

柔道などでも試合中は相手の眼を見ていればよい。眼の動きは心の動きである。「来るな」と感じる時には、必ず相手が仕掛けてくる。

かつて竹芝先生はよくいわれた。

「相手の眼を見よ。そうすればすべてがわかる」と。

真面目な日本人を扱うのには、先進技術（産業・ファッション・教育・医学など）を指導する方法がよいのである。

それから金解禁に伴う波乱や経済封鎖へなつてゆくのである。そうした背景から日本は、飛躍的な増産が必要で、健三たちの街工場もこの増産ラインに乗った。それが現実（釜石行きとなつて）となつて当社工場にも、その波は伝わってきたのである。

この機会を捉えて、製鉄所は岩井河原に鋳物工場、機械工場の二棟を建設する計画を立てた。そこで、当社が入札の結果、他所よりも1/3、または1/4位の価格で仕事を手中に収め、次々と工事を消化したのである。

たまたま昭和十四年に釜石市へ鉄道が入ることとなって、釜石駅に製鉄所から電気を送らなければならなくなり、送電線工事が突貫工事であったが、当社の受注する所となり、同十二年九月十四日の開通に間にあわせるべき工事が開始された。

この送電線の製作は約三百五十トンあり、柱型は大小二十本位であった。現場の建方が大変な作業で障害物の連続であった。健三はコンプレッサーの故障等で約一カ月現場に泊まり込んで、そのうち一週間は完全に睡眠をとらず頑張り通した。

この時、健三がお世話になったのが、同製鉄所の製缶部の北野工場長で、コンプレッサーの故障では、高所作業員と製鉄所を挙げて応援して貰い、最終納期の夜は豪雨の中を全員でアンカーボルトの再点検を行い、グシヨ濡れの姿で小川工作部長宅に工事が終わったむねの報告に行き、旅館に帰って二日間眠り続けた。

翌年、北野氏が東京に出られるのを待って、健三は、歌舞伎座、伊東、三原山と案内し、当時の礼をした。

二月の接待を終えて帰釜すると間もなく、急性肺炎となり（東京からも両親がかけつけて危篤状態までなった）生死の間を彷徨した。本人は高熱のため、よくわからなかったが、持前の粘り強さで切り抜けられたのか？あるいは母親の命がけの祈りのお陰かもしれない。この時、健三の世話をしていたのが、この旅館の娘（映画会社勤務）であった。

死線は突破したが、病後の回復がおもわしくないので、東京に帰って、主治医である前川先生に診断して貰った。気管支炎ということとで全治一、二カ月、空気のよい所で安静治療が必要となり、東京に滞在、母親はこの間、「ヒサ」さんがよいから「嫁」に貰ったらと、今まで再三、結婚の話があったが、仕事、仕事の一点張りであった健三に静養の赤信号がでた以上、この病魔と徹底的に闘わなければと決心した。

そこで「ヒサ」さんに手伝いに来て貰おうということになり、先方の了解を得て約十日ほど、手伝って貰った。妹の富美子も病弱であったが、その間、大変うれしそうであった。こんなことが縁で翌年、昭和十五年九月十六日、挙式となった。

母親の思い出

母親はいつでも（健三が七十才になっても）健三をどこかで見ているように思える。生命のかぎり、愛情をそそぎ、たえまなく燃えきった彼女、素晴らしいとおうか、もつたいないとおうか、その精神の純粹さにおいて、再び出会うことのない絶対無比の深い愛情を持った人は、彼女以外にはない。また、あり得ない。

現在でも健三が怠けたり、困ったり、嫌になったりすると、優しく自分を叱り、激励してくれる。そして「健三」たのむわよ、というように思えてくる。健三が母親を語れば、恐らく一冊の本になるであろう。思い出はつきない。

健三は彼女が三十三才の時の子供だったので、こんな話をしていた。

「三十三才の時の男の子は出世する」と。

生まれた時は「玉のような子」であったというが、祖父の孝之助に似ていたので、孝之助は大層喜ばれ

「玉のような男の子だ。大事に育てなさい。」と、彼女にいったそう。

母のませは三河の生まれで士族の家柄の外山作次郎の長女として明治十九年に生まれた。祖父・作次郎は苦勞知らずに育ち、剣道は達人の域まで鍛錬され、警察の師範を勤める腕前であ

ったが、生真面目一途が人生の指針を狂わせたか、放蕩のかぎりをつくし、あげくのはては、火災にも遭い、事業も失敗して一家は離散した。

母のませは弟の賢治（当時八才）を連れて、東京の知人を頼って上京。髪結・食堂と刻苦精勵、一日も休む事なく働き続けたそうである。しかし、郷里に幼い妹を一人残してきたことが気がかりで、東京で自分になり振りかまわぬ毎日ではあったが、朝な夕な妹の無事息災を祈ったという。妹のたか叔母は、姉（母のませ）に

「姉さんは私を置いて、兄さんだけ連れていってしまつたものなあ。」と責められると、母のませは

「あの時はどうにもならなかったのだから許しておくれ。賢治が八つ、私だつて東京にいても、どうして食べてゆかれるのかアテがあったのではなかったのだから。」と眼に一杯涙を浮かべながら、母とたか叔母が語り合っていたことを覚えている。

十五、六才の少女が八才の弟を連れて、何にも持たずに見ず知らずの東京にでてきたのだからどの位苦勞したか計り知れない。その苦勞をも口にしない母のませ。まるで働くために生まれてきたような母。健三が母親を一番知っているから自分が偉くなって、ませを安心させ、十分尽くしてあげたい、と願っていた。

ませは何時に起きて何時に寝るのか。とつても器用で髪結さんに奉公した位だから自分で「丸



母ませと幼少の健三

まげ」でも「銀杏返し」でも簡単に結ってしまふ。髪は黒く、艶があり、美人だった。とくに目が美しく、澄んだひとみに会おうと心が落ち着いてきたものである。

身長は五尺一、二寸で父とあまり変わらなかつたと思うが、やせ型で八貫目位（三十キロ・五十五、六才頃むりに計量させた）だった。

健三を可愛がり、五才位まで膝にのせていたそうである（叔母の話だと乳を飲ませていた由）。

性格は几帳面で素直、即行型で、気性は芯が強く、外柔内剛でやさしいけど、きびしい存在だった。また働き者で遣り

繰りが上手だった。

健三の成長期には、使用人が五、六人位おり（多い時は十人位いたそうである）、女中も使わず早朝から食事の支度、縫物から洗濯まで使用人の分までやったのだから大変である。朝から晩まで働きづめだった。夫の愛次郎がかね金（料理屋の名前）で飲んでいると迎えにゆき、自分も相手をしながら、何とはなしに連れて帰ったことなど二、三回あった。

母を取り巻く人に、まず賢治と妻・安子（母と同名だったので安子と改名した）、竜仙寺の伯

母がいて、よく面倒をみていた。

そのおやすさんは時々鳥目（夜になると目が見えなくなる夜盲症）にかかり、ませは前川医院に連れていき、「めがね印の肝油」を茶飲み茶碗一杯にして飲ませ、それ以後は味噌汁に盃一杯づつを浮かばせて飲ませていた。そうすると、叔母の目は、たちまち直ってしまうのである。健三もこのメガネ印の肝油を飲まされたが、一寸臭みがあり、飲みにくいので食事の終りに味噌汁に浮かべて、ぐいと飲んだものである。兄弟中で健三だけがややか細いといった感じだったのでもう少し肥えさせてやりたいという親心であったようだ。

こんなことがあった。母親がよく話したことである。震災以前のことが、当鉄工所の長屋に「堀さん」という職人（独身）がいた。

ある時、この堀さんが頭が痛いといふと休業し、母が様子を見にいくなかなかかなりの高熱である。これはいけないと、早速、前川先生に来院をしてもらった所（この頃は午前中は内診で午後から外診）「これは腸チフスのようだから早速入院が必要」という診断が下された。母は入院となった。それから大変といろいろ考えたあげく、「みみず」を（二十四位）どびんで煎じて、堀さんに飲ませたそうである。翌朝、母が熱の具合はどうかと見に行くと、汗が敷布団を通して畳まで出て、熱も下がっていた。本人は食物を欲しがっていたが、与えず前川先生の来院を待ち、来られた先生は非常に驚かれて、

「すっかり快くなっている。何か、薬を飲ませたか？」

と聞かれ、ませは返答につまったが、思い切って自分の作った「みみずの煎じ薬」を話した所、先生は

「それはよくやった。医者の方も敵わない。」

といわれ、この病人については消毒と、重湯・おまじり・お粥というように根気の良い食事療法が大切であると話され、ませと病人は先生の注意をよく守り、半月程で平常に復した話を時々されていた。この堀さんは震災の後、郷里に戻られたと聞いている。

母のこの「みみず療法」は、俗にいう「漢方薬」の一種だと思うが、生きている「みみず」をそのまま煎じたのだから、乾燥したものよりよく効いたのであろう。

今、考えるとその当時、当鉄工所は鉄を加工する草分けだったので、多くの人達が入り込んでいた。堀さんもこの一人であった。

軍隊生活

健三は「召集令状」を受けて、昭和十六年七月十一日、千葉県柏の東部第一九〇三防空部隊に入隊した。東部第一九〇三防空部隊は「下志津」という所にあり、陸軍の空の「守り」を任務としている部隊である。

現在ならば、レーダーによって目標を捕捉し、直ちに高度、航速、進行方向が割り出せるが、その頃はまだ聴音機を使い、目測によって計算班が計算する。それから高射砲隊へ通信による伝達が行われて砲の発射となる。五千メートルで五十メートルの射程圏がある（弾が上空で炸裂し五十メートル拡散する）。健三はこの防空隊の通信兵となった。

「出征することは、一家一門の名誉であると思え」。二十一才の検査のときの検査長だった大佐にいわれた言葉を想いだす。死を鴻毛の軽きに置く。現在、こんなことをいったら笑われるだろうし、軽蔑されることと思う。しかし当時はそうだった。

健三は出征に際し、幼少から歯の質は悪い方だったので、まず入れ歯を全部新しく入れ替えた。両親に軍隊で立派な働きをして、喜んで貰えることが最大の「親孝行」である、と思った。その反面、現在まで仕事の上でも、家庭内でも健三を取り巻くすべての環境は恵まれすぎており、この応召によって、一兵卒から、「人に使われる術」を勉強しようと考えた。

健三は母親にこうした自分の考え方を話した。彼女はただ黙って健三の話を聞くだけだったが、千人針を作って与えた。

健三の兄弟は、茂・こう・健三・富美子の順だが、健三は富美子を心から可愛いと思っていた。小学二年生の頃から、富美子を背負っては付近の子供達と遊んだりした。学生時代の富美子との思い出は夢をみているように楽しいものであった。

しかし、女学校二年生の頃、胸の病に冒されていることが判明し（小学校六年生の頃、学校で机の角に強く胸を打ったのが原因）、休学して療養しなければならなくなった時、健三は当時、釜石に長期の出張をしていたが、母がこのことを伝えてきた。

「健三から富美子に話をしておくれ。」

という。母は自ら可愛想でとつてもいいがせなかつたのだろう。

釜石から東京に仕事上の打合せに帰宅した健三はそれまでにいろいろと考えていたが、富美子が学校に行かなくなったらそれこそ、どうやって生活してゆくのか？「死の宣告」をするようなものではなからうか、とも考えた。姉の「こう」は十九才で夭折している。

結核患者は特別な扱いをされる。しかし、母は姉・こうの場合もそうだったが、富美子にもこの差別を本人にわからぬように細心の気配りをしていた。ませの心中は察するに余りあり、強いていうならば、自分が死んで替われるものならと思っていたに違ひなからう。

健三は考えぬいた挙げ句、さりとらということにし、二階の客間にそれとなく誘い、医師の言葉を簡単に伝えるように話したが、

「どうしても学校をやめなければいけないの。」

「やめるのでなく、早く治すために療養して。」

「治るのかしら。」

「みんな協力して。」

とまではいったが言葉に詰まってしまった。富美子は泣き伏してしまった。当時としては治る見込みのない「死の宣告」である。

そつと健三は階段を降りた。下では母親が心配顔で、落ち着かない様子であった。

「はなしたよ、お母さん。」

あとは涙で言葉が続かなかつた。母のませも泣いていた。そのまま二階に上がり、三人はいつまでも泣いていた。

それから、療養生活が始まったのだが、一進一退を続ける。そのことがあって以来、どこに行っても富美子のが頭から離れなかつた。朝夕、神・仏に健三は富美子の全快を祈願する。珍しいものを見付けると必ず買い求めた。釜石の現場から週に一度位手紙を出す。妹から折り返し手紙がくる。家の様子や犬のことなど詳細に書かれている。

富美子の身体の調子が良い時に釜石まで連れていったことがある。夏のことであった。一週間ほどの滞在だったが、富美子は母親に似てまめに健三の着るものを繕ったり、洗濯をしたり、部屋の飾り付けなどをした。

食糧事情が悪化していったので母の苦労は大変だったに違いない。この病気は当時は栄養をとって療養するほかに道はないのだ。

健三の妻の「ヒサ」が出産し、長男「正一」が生まれた。この頃から富美子の病状が徐々に悪化していった。

健三が応召後、約一年で上等兵となった頃、富美子は病状が悪化して遂に千葉医大に入院となった。休暇を利用して父の愛次郎とともに面会にいったが、富美子は痩せこけて、顔が半分にしぼみ、起きることが出来ないほど、衰弱し切っていた。

「兄さん、上等兵、よかったわね」と祝って、

「お隣の方から書いて頂いたの、お母さん、見せて。」

と隣のベットの患者が書いた色紙を見せられた。それは素晴らしい絵であり、そばには歌が書かれていた。病人同志の心の通ったお互いの心境でもあった。

富美子のか細くなった手や腕をさすったが、哀れて涙がてそうになるのをこらえるのが精一杯であった。だが、これが富美子との最後の別れとなった。

数日後、富美子は健三兄さんと姉さん（ヒサのこと）によろしくね、と静かに息を引き取ったという。

ませから聞かされて胸が潰れる思いで、富美子の冥福を祈った。ませはその後、吐血したが妹の看護疲れで過労が原因だった。乗り物のない当時としては千葉医大と砂町の毎日の往復は本人にはやはりこたえたのであろう。富美子を亡くして寂しくはなったが、健三の長男の正一がよちよち歩くようになり、両親にも心の安らぎを与えたようであった。

戦争は次第に日本に不利となってゆく。昭和十九年、愛次郎が脳溢血で倒れた。気付いたのが早かったので、後遺症もなく順調に回復して行ったが、ある夜川沿いの道路に突き出したままになった宋橋に自転車ごと衝突して横転し、それから父の箱根での静養が始まった。宮の下の借家から、強羅の家を購入し、そこで静養した。とくにこの頃、食糧事情（その他衣料、生活物資、釘などまで「統制」される）や生活物資が逼迫してヤミ物資が横行する。母の苦労は一通りではなかった。

昭和十九年夏に兄の茂が出征した。昭和十九年十月、五百キロ爆弾が砂町の家の東側道路に投下され、六メートル道路に大穴があき、直径六十センチ位の石が正木家の二階屋根から床を破って床下まで落下した。ヒサは母と正一らとお産の準備で、実家の釜石へ、父の愛次郎は大島の事務所に行っていたので無事であったが、健三は臨時外出を許可されて家に直行し（親戚

の中山久夫さんが見舞いに「青砥」からきてくれた)、現場をみて驚いた。爆風で桜田機械の一棟の工場のスレートが殆ど吹き飛ばされ、鉄骨が露になっていた。その威力の凄まじいこと、夜であつたら全滅であつたかもしれない。

その年の暮に兄・茂の長女・千賀が出生したが、空襲を逃れて伊東に茂一家は疎開した。後に残された老夫婦二人で最後まで守り抜こうという気持の現れと取れた。

空襲はますますひどくなるばかり、戦局はアツツ島が玉砕、補給のための物資輸送船がすべて敵潜水艦により撃沈され、補給不能に陥った。

両親は空家となった大島の事務所兼住宅に最後のご奉公として移住した。空襲でもしものことがあつたら取り返しがつかない、健三は責任を強く感じた。

昭和二十年に入って、ユーモラスな事件が起きた。

通信班の中沢二等兵(青森出身)が逃亡の罪に問われる事件が起きた。通信班内のことは総て班長の責任であるし、また中隊ひいては連隊の名誉にも関することになるのである。

罰すれば、小隊、中隊の名誉に傷がつくし、と言って軍規を冒した兵隊に懲罰を加えぬわけにゆかないし、痛しかゆしの出来事である。

ことの起こりは「シラミ」からである。ある日の休憩時間に内務班の先任上等兵が中沢二等兵を盛んに吊るし上げている。聞いてみると、毎晩「お寝小」をするが、本人はいっこうに平

気である。その上、本人持参の千人針に「シラミ」が湧き出した。夜中に必ずかわや(トイレ)に起すのだが駄目であつた。いわゆる知恵遅れなのである。その場は健三が引き取り、以後は心して十分に彼を庇護し優しく教育した。次第に隊の空気にも染まり、半年が経過して中沢二等兵にも外泊が許可された。

休暇を終えて帰ってきた上野駅で「大塚」までの切符を買っている間に手荷物を盗まれてしまった。彼は動揺し、彷徨、遂に色街に足を踏みいれ、二晩目に憲兵隊に通報され、逮捕となり、連隊本部に「〇〇中隊の中沢二等兵逮捕」の連絡が入った。

連隊本部に軍医の大尉がいた。彼は年配で応召され、右手を二回上下するくせがあるところから、「百」とあだ名され、ユーモラスなので人気があつた。彼が中隊に飛んできた。隊長とも話したが、ラチがあかないので班長の健三と対策を練った。健三には既に一案ができていた。中沢は平常の神経の持主ではないので、本人を「精神障害者」と診断すれば、無キズで送還され、連隊にも傷はつかない。

一石二鳥の妙案である。この案を示した所、軍医は非常に喜んで、健三は早速連隊本部より身柄を引き取り、本人を伴って市川の鴻台に精神鑑定のため雪の降る二月二十五日頃、斎藤見習士官(当時の病院院長、経済学博士・医学博士の肩書きを持っていた)に面接した。彼は優しい、にこやかな温和な性格で人間としてのぬくもりを感じさせた。健三は正直に今までの一

部始終を話し、案を示した。

「それは困った事態だ。拝見しよう。」

と本人を診て

「これなら大丈夫でしょう。」

と賛成を戴き、早速本人は檻に入られた。

そして白衣を着せられ、犬のようになった中沢二等兵に万感をこめて、

「おまえはここでおとなしくしていれば、少しの辛抱で郷里に帰れるのだから」といった。

斎藤院長にくれぐれもお願いして大役は完了した。

帰隊の途中で母親に会いにゆく。東京の空襲も日増しに激しさを増して、市川への道すがら、神田方面の一区画がそっくり焼けているのが電車の窓から見えた。これでは年寄り夫婦の逃げ場はない。私は危惧の念にかられ通しだった。大島は家が密集している。特に心配だったので立ち寄った。母は、

「お父さんと一緒に守ります。」

ときっぱりいわれた。その後、三月五日に休暇で帰宅した時も健三は

「東京は危険だから箱根か小田原に疎開をした方が良い。」

と懸命に進めたが、聞き入れられなかった。丁度その時、親戚の康子さんからも「叔父さん、

東京は危ないから」と電話があった。

番頭さんの山口房治さんは小岩に住んでいたが、交通機関の中断で動きがとれず連絡がとれない。山口さんは正木家兄弟、役員の増山正造君などが出征し戦争の末期には、唯一人残った番頭さんであった。得意先である東京ロール製作所、日本加工(株)、藤倉ゴム工業(株)などの仕事を細々としてではあるが続けていた。

両親は工場を守るという信念で、頑として周囲の言葉は聞き入れなかったため、相談の上、若い人を一人両親の住む大島に寝泊まりを依頼して、「いざ」という時に備えた。

二月五日、母は健三に、「私は今度の空襲で死ぬでしょう。健三、あなたは私の骨を拾って下さい。これは預金通帳、これは生命保険証書、これは今井の家の権利証です。全部あなたに差し上げます。」

健三は何もいわず母の手をしっかり握っていた。これが最後になったのである。

事実、三月十日の空襲で、両親は行方不明となり、焼死と断定された。これから、健三の人生は大きく大きく変わっていったのである。

三月十日の真夜中の空襲警報で警備にいた六中隊には約三十分後に東の空が真っ赤に焼けただれて「江東方面がやられた」のニュースが入り健三の胸はさわぎ、一夜、まんじりともしなかった。両親は無事であつたらうか。どうか無事でありますように。ヒサ、正一もお守り下

さい。

健三は一心にまっ暗な個室の中で祈っていた。胸騒ぎは一層ひどく、動揺がどきんどきんと音を打っていた。この時、両親は猛火に追われて逃げまどっていたに違いない。

大きなお腹を抱えた健三の妻のヒサ、正一も砂町工場の防空壕で高野長六君、中島君とともに家が焼けるのをただ、呆然と見守っていたが熱風にいたたまれず、防空壕の南側の池（約百メートルの距離）に入ってしまった。そして泥水を掛け合いながら一夜が過ぎたのであった。猛火は、所々に龍巻を起こし、この三月十日の空襲は、焼夷弾と燃燒油を併用したといわれ、その無残さと残忍さは生涯われわれの眼底に残っている。

健三が焼け跡へ帰省を許されたのは、空襲を受けた翌々日の十二日であった。巣鴨陣地の近くにあった自転車を借りた。焼け跡まで行くのに交通機関がないのである。

東京大空襲

昭和十七年四月十八日と記憶するが、ボーイング B 10 爆撃機が東京上空を飛来した。高度は約四百メートルの低空飛行で機上の人間が動くのが巣鴨陣地の六中隊（防空部隊）から見え、城の大隊本部の部隊長は、切歯扼腕、防空部隊の戦闘能力が攻撃形でなく、受身であることを残念がった。

当時、陸軍大臣談話としては、

「東京上空に敵機は一機も侵入を許さず。」

と答弁した直後だけにボーイング B 10 爆撃機の東京上空旋回飛行は、日本防衛軍の手の内を見る偵察が狙いであったかと思われる。それ以来、アメリカの航空機は東京に飛来せず、日本は「飛石作戦」といわれるフィリピン・マレ半島・インドネシア・アッツ島等々、戦線を拡大していくのだが、アメリカはその間軍備を整えて、戦争への体制造りを終えて時機の到来を待っていたのである。

勝利に沸いたマレーの虎、山下奉文將軍は、英国のパーシバル將軍とシンガポールのフォード工場で降伏の調印をし（現在でもその会議室は残されていると聞く）、海上では英国の旗艦プリンスオブウェルズ号を南太平洋沖で撃沈させ、フィリピンにおいてはマッカーサー司令官を

逃走させ、日本の快進撃は止まる所を知らず、連日のように大本営発表は日本軍の勝利を発表していた。

だが、これは次第に逆転され、昭和十八年後半に入るや、戦況は不利となり、特攻隊の出番となる。しかしながら、物量作戦に物をいわせるアメリカ軍は、ジワジワと攻撃を開始し、物量作戦を各戦線に惜しみなく投じて圧迫し、確実に勝利を収めていった。

日本軍は、補給路を断られ、次第に逼迫し伸びすぎた各地区陣地への食糧、弾丸、その他の輸送は日本本土周辺を取り巻く潜水艦によって、輸送船団が港を出港するや間もなく、捕捉撃滅された。あの戦艦「大和」にしても、昭和二十年四月、沖繩作戦参加のため出航途上の九州南方海上で撃沈された。これは、日本が世界に誇った不沈艦であった筈である。

日本と西側の同盟国、ドイツ、イタリアにおいても英、米、仏の連合軍に、ソ連の参戦となり、松岡洋右氏の外交は戦線の不利と、ドイツ、イタリアの敗戦によって完全に孤立、無援となり、時の軍部は遂には本土決戦を決意するに至った。昭和二十年八月六日、広島に投下された「原子爆弾」は世紀の戦争の汚点を史上に止めた（二瞬〇・四秒にして二十万人の生命を奪い、四十二年後の現在でも傷跡は残る）。

戦争に道義なし。これでは地上の人類を滅亡させ世界は崩壊する。

昭和二十年三月九日、夜半から翌十日未明にかけて、米軍のB29爆撃機編隊による本所、深

川、城東方面の大空襲によって同地区は全く焼土と化した。その二日後、空襲による被害を受けた兵隊に外出許可が出された。空襲の夜は風があり、木造家屋の建てこんだ、これらの地域は焼夷弾を受けて、紙のように燃えた。噂では、城東方面は、とくに被害がひどく全焼で住民も全滅と伝えられた。

さて、健三は昭和二十年三月十二日の朝、飯盒に一日分の食糧を携え、自転車で大塚、小石川、後楽園、両国橋とペタルを踏んできたが、橋の前後や隅田川に幾多の犠牲者を見た。川面は見るも無残な残骸が隅田川狭しと浮き沈みしている。

風の吹き抜け道である川に猛火が火勢を強めて、川面のすべての物質を焼きつくしてしまった。隅田公園内に照空隊があり、その電車で運手たる兵隊が乗ったまゝの姿で「骨化」している。骨だけが残っている。あとの全てが焼きつくされてしまったのである。それほど火勢は猛威を極めた。関東大震災の時もかなりの死傷者（約十万人）が出たが、三月十日の空襲による被害は江東方面に限られていた。多数の犠牲者が出たのは、空襲が熾烈を極め風が強かった上に夜中であつたことが理由として挙げられる。

健三は両国橋上で川の兩岸に沈没している舟、とくに運送舟の大型が鉄製、木製を問わず焼けただれて沈没しているのを見て、頭をハンマーでガンと打たれたような衝撃にかられた。

これでは駄目だと思った。しかし、「万が一」ということもある。ペタルを踏みながらも一心

に祈った。

江東橋のたもとでモデル人形のように両手足を空に向け、真黒になった犠牲者を見た。「うーん」とうなってしまう。思わず合掌する。

自転車がパンクしたので、錦糸町の市電バスの車庫で応急修理をして亀戸の小名木線のガードをくぐった所で、左側の土手を一寸見ると焼けた自転車の残骸が積まれているように見えた。実はこれが、全部犠牲者である。千葉街道に面した電柱は折れ、電線にはトタン板や布団、その他の衣類が引つ掛かり、地上には犠牲者が無数に倒れている。

生きているような姿で倒れている人が多い。もしやと思つて声をかけ、揺り動かしても硬直している。周辺の建物はすべて焼失し、全くの焼け野原である。焼け木杭があちこちでくすぶり、異様な臭気が漂つて息がつまりそうだ。犠牲者の焦げる臭いである。気が遠くなりそうだとともにこの世とは思えない惨状である。

これは余りにも醜い。この世の生地獄が終焉したままのむごたらしい残骸である。ひどすぎる、あんまりだ。罪のない人達を……。健三は、もうやり切れない思いと恐怖が身体中を駆け廻る。異常な臭気の中で息が詰まるのを堪えながらパンクしている自転車を片手でひきずり、やっと五ノ橋の上まで辿り着いた。ここでもまた気が遠くなるほど驚いてしまった。

目指す正木家には門型クレーンと金庫が見えるが、前面を見ると見渡す限りの焼け野原であ

る。焼け野原の南先端には海が見える。砂町方面まで焼き尽くしてしまったのである。

亀戸も同じである。電線にトタン、布団、衣類などがひらひらとはためき、住宅地は一軒も残すことなく全焼し、余燼が至る所にくすぶつて、海の方まで続いている。

両親は健在だろうか。ヒサ、正一は？身を焦がす臭気が一杯にこの焼土を覆っている。瓦礫を踏み越えて、夢中で正木家の焼け跡に、たどり着いた。何にもない。防空壕の蓋をあける。「カラ」である。防空頭巾が一つあるのみ。

もしかしたら砂町工場か。自転車をそこにおいて、直ちに砂町へ。道なき道を幾多の犠牲者に手を合わせて、途中を近道し、空き地を横切る。この跡地の原っぱに若い母親が乳飲児を抱いてうつ伏せのまま焼死、焼け焦げた姿が貞女を物語っていた。この原っぱにもかなりの犠牲者だ。衣服は殆どまともにない。

丸八橋も焼け落ちて、水道管を伝わって渡る。この辺りは人家の密集地帯だったが、焼野原で、焼け木杭がくすぶっている。興奮と恐怖が入り混じった異常な神経の高ぶりである。異様な臭いは依然として続く、変わりはない。やっと砂町工場につく。地下防空壕からヒサが真黒な顔をヒョイと出した。

「ヒサ子。」

「お父さん。」

「よく生きていてくれたね。」

「大変だったわよ。」

高野君、中島、正一も皆いる。助かったのだ。

「よかった。」

「お父さん、お母さんは。」

「それが大島にいたので、今朝から高野さんと一緒に大島まで探しに行ったけど見えないの。」

「この身体で大島に行ったの。」（妻は八カ月の身重な身体）

「食べ物は。」

「桜田さんの食堂から中島君が持ってきて。」

飯盒の飯を出したが、誰も食べない。私もとても食事どころではなかった。

「午後三時までに隊に戻るが、また明日くる。」

「今夜どうする？」

「防空壕しかないでしょ。」

言葉に出ない。不憫さが胸を衝く。しかし今はどうにもならない。よく助かっていてくれたものだ。多くの犠牲者や火災の惨状を考えたりすると、生きている方が不思議な位なのである。

「隣り組の人々は班長につれられて、荒川土手に逃げた。」

とヒサは泣きながらに語る。

「私たちは裏の池に入り、一夜中、池の水に漬かりながらトタン板で飛んでくる火の粉を防ぎながら過ごしたの。」

夜が明けて顔はみんな真黒で、まゆげ、まつげまで焦げている。眼が焼けただれて充血し、よくは見えない。着替えなどあろう筈がない。着たままで衣服を乾かしたという。到底この惨めさは味わったものでなければ理解できない。

凄まじい猛火との戦い。一致団結して切り抜けた喜び、本当にご苦労さん（心の中で健三は大きな歓声を上げていた）。しかし、両親の事を考えると、喜んでばかりはいられない。時間も無い。明日を約して、健三は隊に帰った。

翌朝は、陣地前の久保田製作所の自転車を借りて、まだ全部がそのままの焼け跡へ行く。昨夕、連絡をしておいたので山口、小林の両氏と焼け跡で今後のことを打合せした。

金庫を破って印鑑を出さなければならぬ。小田原の従兄の山田孝三郎氏と金庫を壊し「会社の代表印」は健三が持つこととなる。孝三郎には金庫立会いを依頼し、書類はヒサに預ける。

山田孝三郎氏は、

「大変だ。これでは伯父、伯母も助かるまい。」

と、余りの惨状に息をつまらせながら立ち戻る。

高野君と中島君にはそれぞれお金を渡して郷里に帰らせることとなる。ヒサ子、正一はどうしたらよいか？小林君が池袋の家にとりかかると、空襲から七日目でそれぞれ、別れてご厄介になることとする。伊東に疎開した兄嫁と徳永さんがきたそうだが、すぐ帰った。この生き地獄のさまを見てどう考えたか？

戦局は刻一刻と不利である。空襲は連夜に及び、東京が焼土と化するのも時間の問題と思える。健三の妻子は池袋、小岩と転々とし、遂に箱根にゆく。

これから以後の健三は、小林氏が朝鮮兼二浦製鉄所の出張工事で、当社の責任者として出向しているの、毎月のように送金した。山口氏が小切手を貰いにくるので隊長の許可を得て久保田製作所の事務所まで印を押す。

米英連合軍は、東京へ上陸するという「デマ」が飛ぶ。敗戦は目に見えているが、会社をどうするか最大の問題だが、まだ除隊されないの、どうにもならない。

「上田に疎開する案」が土屋氏から提案され、大島工場の使える機械を上田に送ることとする。

健三の中隊ではいよいよ本土決戦を目前に控え、上陸してくる米戦車隊に下士官は、箱爆雷を小脇にかかえて自爆する訓練が始まった。模擬戦車を作り、ペンキを塗って内部に兵隊が十名位入ってゴロゴロ転がすのである。

敵が上陸してきたらどうする。その時は、その時よと兵隊の誰でもが考えていた。戦友であった神保、路川はそれぞれ先に逝った。「俺達を待っているよ」と戦友達はいう。

巢鴨陣地の空襲

二月十日の大空襲以後、B 29による日本本土への攻撃はますます激しさを増した。

四月末になり、健三が週番下士官勤務の時、午後二時頃に巢鴨上空にB 29が飛来し、焼夷弾が投下された。バラバラと音を立てて落ちてくる。将校、兵隊は全員が防空壕に避難した。健三は週番下士官として兵舎、倉庫、その他、食事に至るまで、一切の責任がある。健三は円匙を一挺持って陣地内の焼夷弾を覆土して回った。投下されたばかりだと、すぐ消し止められた。しかし、上空からは次々に投下されてくる。根気の勝負と覚悟を決め、陣地内を一人で駆け回る。

夜に入っても空襲は続き陣地の周りの火勢に囲まれて逃げ場を失った付近の住民は、柵を破って隣接の小学校に逃げ込もうとする。学校側の柵を切り開いて通路を作った。避難民は潮が引くようにこの通路から小学校に吸い込まれていった。

健三は不思議と「焼夷弾」に当たらなかった。何百という焼夷弾を消し止めているうちに兵隊が手伝い始めたから速かった。お陰で建物には全く被害はなかった。週番士官の古沢准尉は爆弾には弱く、炊事場の溝に挺身したままで日頃の武勇伝とは似つかなかった。

悪夢の一夜は明けたが、周囲は全く焼土と化し、小学校のコンクリートの建物と兵舎と消防の物見櫓しか残らなかった。隣の造幣局の建物が焼け崩れてゆくさまを見ながらどうにもならない自分達が悔しかった。

昭和二十年八月十五日、遂に終戦の大命は下り、ここに戦争は終結したのである。健三は声を上げて泣いた。

「お父さん、お母さん！」

と父母の死は、何にもならなかったと思った。

九月十日、武装を解除され、籤引きで貰ったリヤカーに仔豚を一匹乗せて草履と雑囊を一つ持って健三は大島の防空壕（一・八立方メートルの地下式鉄板製）に向かった。

とにかく再建しなければどうにもならない。大島の焼け跡の整理から始めよう、と再建に着手した。しかし、全くの焼野ヶ原に知人もなく、資材の購入もできず（統制令が戦事中心ひかれていた）、バラック一軒を建てるにも非常に困難であった（戦後、預金は封鎖された）。周囲の人々の協力を得て、翌年四月、今井からこの焼け跡に親子四人（友子誕生で）が暮らすこととなった。

砂町工場

日本橋「うわばみ」ビルに三信工業株の本社があり、阿部社長は戦時中から砂町の当社工場隣接の工場を買取り、当社が戦災を受けると同時に陸軍航空本部の前田監理官を動かして、健三に「工場」を譲渡する工作をしたが、健三は当時日本製鉄株の永野大将が社長となっていたので「復興命令」を発動して貰い、これに対応した。

時の海軍大将であるから、どうにも手が出ないので（バリケードを張って三信所有の如くしていた）、終戦と同時に、三信工業に「即時撤退」と「持ち出し・機器の返還」を求めたが相手は頑として聞き入れない。土屋氏（当社役員、土屋伸銅の社長で茂、健三とも柔道場で知り合い、交際を深め、事業も日本鉛化工業株を協同して興すなど公私にわたり親交厚く、生涯の交際となった）にも同道して貰ったが、頑として動じない。不法地帯の焼け跡、法律も警察力も通用しないので、健三は困り果てていた。

十二月の雨の降る寒い日である。雨に濡れながら一丁羅の軍服姿で、阿部氏を訪問し、火のないストーブを中央にして激論が交わされた。

阿部氏の言い分は、

「陸軍の航空本部の命令で接收したのだから自分のものだ。」
というのである。

こんな論理が通用するのも戦争の副産物だ、と健三は思った。しかし、この人にも（五十五・六才位）親がいた筈である。健三はふと、もし父だったら自分は何というだろうと思った。

「阿部さん、貴方の親御さんが貴方のこのやり方をご覧になったら、どうお考えになるでしょうか。」

と、健三は誠心誠意相手の良心に訴えた。

阿部氏は暫く考え込んでしまった。しばらく沈黙が続く。寒かったが、頭だけは熱っぽく二人だけの暗斗が続いた。しばらくして彼は真顔になり、

「わかった。私が悪かった。接收機械もコークスもすべてお返しします。」

難渋した事件は急転直下、解決したのだった。

なお、正木を継承する者は、このことを忘れてはならないと思う。

茂（兄）のこと

正木家の長男に生を受けた茂は身体が大きく、繊細な神経を持っており、何事に対しても熱心であった。小学校を六年間、一日も欠席もなく「皆勤賞」を受賞した（同学年中、唯一人）。母のませはよく茂のことを、

「口数は少ない（子供の頃、多少どもりであった）が、実行力はすばらしく小学校の頃、風邪をひいて高熱があっても学校へは通いとおした。」

と弟の健三達にも折りにふれて話した。また、研究心も旺盛で青年期には、仕事で使う道具や機器についても改良・研究を盛んに行った。

ハンマーを振ることも横座となって火造り仕事をすることもリベッテングハンマーで鋏をカシメルことも鍛冶屋の悴だから当たり前といってしまうばそれまでだが、父・愛次郎の薫陶を受けてそれなりに成長し、技術を会得したものと思う。

東京大震災の時に、当大島分工場に逃げ込んで命拾いをした山本五郎さんがあるとき、職人さん達に詰問され、困っていた。

それは、茂が現場へ山本五郎さんを連れてゆくために市電に乗った。その市電に乗る時、財布を落とした。その財布を山本五郎さんが所持していたのである。これは日本国内では問題だ

が、中国では拾ったものは自分のものになる、というのだ。国家間の問題だが、山本五郎さんが皆んなに詰問されている。健三も小学生三年位だったが山本さんが好きだったので何とかならないか、と思っていた。事態はますます悪化の方向を辿る。工場長である外山氏が怒りだした。これは容易ならぬ事だ。袋叩きにあう事が目に見えている。

この時、茂が突然、

「おれが悪かったのだ。山本を許してやってくれ。」とやや吃りながら弁護した。

しかし、職人さん達の怒りは止まらない。

「山本は泥棒だ。」茂は、「落した俺が悪いのだ。」

何回か繰り返された。次第に皆んなが冷静さを取り戻す。

「茂ちゃんがいうんだから許そう。」

「おい、山本、わかったか。日本では拾ったら持ち主に返す。」

ということだけりとなった。

健三はこのとき、心根のやさしい兄の茂の一面をかいま見た。

鉄工所という商売は、荒っぽい商売である。世の中で一番「硬い」ものの代名詞「心、鉄の如し」に用いられる。硬い物質に挑戦するのだから、並大抵のものではない。勿論、世の中のことは何事によらず、その道に通ずれば通ずるほど難しく、奥行き深いものである。

この硬い鉄を粘土か、鉛細工のように自由自在にこなせるまでには、鍛錬による余程の技術と精神力、体力とが混然一体となって、常に自在の自由境に遊泳していなければ、為し得るものではない。

「禅」の世界に似て、また実働の危険極まりなき職業。健三はこの職業に従事している事を誇りとしている。この職業は、「男の中の男がやる職業である」と自負しなければ到底、出来ない職業である。

したがって、この職業に携わる人々は殆んどがある悟りの境地を得ている。自分の体力の限界、能力の限界、精神力の限界を自認、自覚する。人間すべて自分の持てる天性を十分發揮し得たら、これは安心立命の境地である。だから、この職業に従事する人間は、尊い人々なのである。

戦後の再建第一歩

焼け野原となった江東区亀戸の五ノ橋上に立つと南の遙か彼方に海が見える。周囲は何一つなく全て灰燼となってしまった。戦争の最中、しかも日本本土に敵の上陸が迫っていた。食糧も資材も衣服も足らないものづくめで、「勝たんがため」に頑張ってきた一億の民、総動員の戦争体制であった。アツツ島、硫黄島、沖繩と玉砕が続き、日本の誇る戦艦大和、武蔵撃沈の報が入る。

戦況は日を追うごとに、神国である日本に不利になり、内地の防空兵にも食糧・衣料が不足した。このような状況下では、江東区の復興など到底及びもつかぬことであり、終戦を迎えた八月十五日でもこの焼け野原は放置されたままであった。終戦となってもこの何もない焼け野原に戻って来る人がなかったのは、人情でなからうか。

終戦の翌月（九月）五日に健三は応召を解除された。早い人は八月末ごろから帰宅できたが、中隊の幹部だったので最後まで残された。巢鴨中隊の周囲も四月の空襲で焼け野原となっていたが、範囲は割と狭かった。解除とともに焼け小麦や仔豚など隊で独自に扱っていた物品が籤引きで兵隊に分け与えられた。健三は九月五日、籤であたりヤカーに焼け小麦と仔豚を積んで大島に帰ったが、出迎える者は誰もいない。それより今後をどうやってここで生きてゆく

か。水道も食糧も電気もない焼け野原、かねてから覚悟はしていたものの、困るのは差し当りの水であった。

手紙を書いても新大橋を渡らなければ出せない。電話など望むべくもない。地下防空壕（鉄板製）はあるが、衛生上問題だ。食糧・衣料すべてに及ぶ。何をすべきか？工場を再建する目的は何か？問題は山積している。しかし、どうやってゆくか先行きがわからない。要は家を建てることだ。山口房治、土屋君雄両氏と相談の上、工場を再建するということを決定する。こゝでは夜になると健三は、焼小麦を選別して粉挽機でひき、フスマごと焼いて食べ、地下防空壕に寝た。

隣接の高砂鉄工所はぼつぼつ人が目につく位、再建しだした。この焼け跡では人が懐かしい。亀戸線のホームに人が二人立っているのが見える。電車が来る。去ってゆく。五ノ橋を見ると山口さんが歩いている。周囲に何もないから丸見えである。毎日／＼工場の焼け跡の整理が続いた。

小網神社の服部せんさんは愛次郎の二番目の妹で健三の伯母にあたる。戦災を受けた後はこの伯母の所を榎正木鉄工所の本拠地とした。焼け跡まで交通機関が皆無なので自転車を通う。一寸の隙に自転車を盗まれたこともあった。しかし健三は、若さと情熱に燃えていた。

「父・母が命がけて守ろうとした鉄工所の再建をしなければ、父・母は浮かばれない。」

と固く再建を決意していたからであろう。

江戸川区今井の髪結の家を母のませが入手した話しを思いだし探しあて、そこに住むこととし、家族を箱根の強羅から呼び寄せ生活し、翌昭和二十一年四月には焼け跡にできた事務所兼住宅を住居にした。

幾度か、栄養失調に陥りながら精神力と医者に助けられ、製缶機械工場を建て直した。知人もなく、何の手がかりもない焼け跡での再建は健三の生涯を通じて、社会の有り難さを骨身にしみて感じさせた尊い体験である。

得意先の日本化工は、軍需品の防毒マスクを軍に納入していた関係で、終戦とともに持っていた設備を平和産業に切り換え、同社を山口房治氏が担当していた。藤倉ゴム工業(株)も古くからの得意先で、これまた平和産業に切り換え、その設備工事は健三が担当した。焼け跡では放置された機械に油を差し、ペーパーで磨く。カウンターのシャフトは館のようにクニヤクニヤと曲がっていたが、真直になおせるかどうか見当はつかなかったが、焼け跡では使わなければならぬ。また使えるようにしなければならぬのだ。戦後から今日まで、このシャフトは健在である。

人間はその環境に置かれれば、その環境に相応わしい努力と知恵が浮かんでくるものである。動力は隣の高砂鉄工所さんから「キャブタイヤコード」で分けて貰い、機械を動かすことができた。その時の有難さは決して忘れてはいない(熊沢工場長、広瀬氏、今野氏が係だった)。電話は何としても入れたい。機械が動いたのだから、仕事をするためにも絶対必要である。丸ノ内の通信省に足繁く通い、資材は一切当社負担で焼け跡に丸太を立て、電話線を張り、遂に開通した。

この焼け跡にも終戦の翌々年になるとぼつぼつと人が帰ってきた。しかし、ほんのわずかである。当社もこの際、表通りか裏通りに面した所に出たいと考え、地主にも相談したが、「そういわずに、そこが正木鉄工所発祥の地でしょう」と逃げられた。

焼け跡では、一番早く住居ができたので知人が時々尋ねてくるようになったが、周囲は依然として、瓦礫の山で、昭和三十年頃まで放置されたのである。

昭和二十二年には、当社の経理担当の増山正造氏が病魔のため逝去した。健三は片腕を挽ぎ取られた思いであった。増山氏は、元金原銀行支店長内山正三氏の紹介により入社し、前社長の信頼も厚く役員に任ぜられた人物である。その後、二十三年に広瀬勝次氏が縁あって入社し、経理担当となり、現在に至っている。

昭和二十三年も暮れになって茂専務が帰還し、不在中、健三常務が社長となっていたが、茂は社長になり、健三は専務となった。しかし、血をわけた同じ兄弟でも性格の相違から一旦は離別を決意するが、(株)東陽機械製作所社長・伊藤金五郎氏の忠告により翻意した。

朝鮮動乱で飛躍へ

昭和二十五年、朝鮮動乱により、日本の産業は、俄に活況を呈した。そのあと、昭和三十一年、神武景気となり、産業界は一大飛躍時代を迎え、鉄鋼界は勿論、大多忙を極めるが人手が不足した。

当社も大谷重工業(株)をはじめとする得意先からの発注には応じきれないほど、工場が一杯になった。人手不足なので職安の窓を覗くと、職人達の賃金は鰻のぼりで、担当職員も事業所の賃金は低すぎるとインフレの元凶のようなことをいわれた。

当社は来るべき溶接時代を予測してM A式鉄骨を開発した。日本溶接協会にも加入し、青木先生の指導も受け、昭和三十四年三月、「東京都優秀発明展」にM A式鉄骨を出品し、優秀賞を受賞した。

昭和三十六年、茂社長の急逝により、健三専務が社長に昇格した。

昭和三十七年には東京都の構造係より、M A式の鉄骨の届け出件数が多くなったため、東京工大の藤本博士の研究室へ実験の上、都へ結果を提出するよう指導があり、藤本先生と都建築係小菅係長の立会のもとに実験が行われたが、予想を越える強さに、M A式鉄骨の優秀性が実証された。

昭和三十九年、十八回東京オリンピックが開催された。参加国九十四カ国、五千五百五十八名の選手団を迎えるオリンピック村が代々木に設営された。東京都知事は東龍太郎氏であった。当社としては、朝鮮動乱(昭和二十五年)、神武景気(昭和三十一年)、なべ底景気(昭和三十二年)、岩戸景気(昭和三十四年)、資本の自由化(昭和四十二年)、ドルショック(昭和四十三年)、オイルショック(昭和四十八年)と、昭和二十五年以来いろいろと仕事面に表われているが、この時期を逸すべからずとばかり、工場の拡張、設備の投資などを行った。しかし、大企業を除いては、現存している工場は殆んどないほど現実は厳しいものである。

したがって「景気の良い時に」事業を拡大させるだけでなく、逆にあの焼け跡から這い上がった経験을当て嵌めてみると、「例えどのような事態が起ころうとも堪えられる企業体質」を作るのが基本であり、事業上の利益は応分に分配して骨を折って働いた人達に報い、税金を喜んで納め、かつ、寄付などをすれば、「申し分なき幸せ」と感謝させて頂くこととした。事業は伸ばすことは容易でも縮めることは至難の業である。

当社は何とケチなやり方と非難される向きもあったが、不況に入って昭和五十八年以降は赤字経営を予測したので、社長の減給を六十一年一杯続けた。

戦後の経済界について一言付け加えると、第一次・二次産業に真面目に従事している者には、賞が与えられず、第三次産業と称するサービス業、斡旋業者などに大きな賞が与えられるとい

う不合理性が見られる。

日本は、無資源国であり、産業を振興し、世界の各国に製品を買って貰って、利益を得るわけだが、これを取り扱う商社は右から左に商品を動かすだけなのだから、利益は戦前は5%と相場が定まっていた。戦後は生産業者が、製品の受注後は材料の購入から製品化までの労力と時間は大変なものである。やっと完成しても「注文どうりでない」と難癖をつけられて返品を食らうかも知れない。人間のやることだから時には間違ふこともある。メーカーはその国の産業を維持する大責任があり、しかもリスクのつきまとう仕事をしている。だから戦前はメーカーの荒利は30%は見込むのが常道となっていたが、戦後は商社がかなりのマージンをとることで、メーカーとは立場や利潤が逆になってしまった。これは間違いだと思う。メーカーはもともと強くなければならない。

当社は、昭和四十二年のモントリオール万国博には菊池文治工事部長を派遣し、新技術商品の開発に意欲をのぞかせた。

昭和四十五年にはわが国で初めての万国博覧会が大阪で開催され、また昭和五十年には沖繩で、昭和五十五年には神戸で各々開催され、当社社長が参加している。

昭和五十七年には当社社長が中国の北京・上海・坑州・蘇州など九日間の視察旅行に参加し、中国農業部の許力氏と知り会った。

また昭和五十八年には、当社社長が単身で東京から指宿（九州）までを自家用車で二千五百キロ走破し、国内事情を調査研究している。さらに昭和六十二年には東京、新潟、郡山、十和田、弘前と二千二百キロ走破し、実情を調査研究した。

MA式鉄骨の実用化

健三は工学院の夜間部に通学し、工場で基礎的なことを習得しながら、仕事を覚えていった。腕前が上達してくると、この次は、現寸を書くこととなる。現寸場は、鉄骨仕事では最も重要な役割を果たすもので、これはなかなか大変なことである。

初めのうちは、小さい工場の現寸をひき、自らキザミ、組立て、リベット、現場建方までを完了した。手違いは全くなく、無事終了した。これが手始めとなって次々と手がけた。

その頃、学校では「材料力学」を勉強していた。すべての構造物は三角形を利用し、三角形の組み合わせの方法が構造物の強さを定める。全くその通りで、図面をみてもすべての構造物が三角形で形作られていることが判る。しかし、材料に三角形がないのがおかしい？なぜ材料に三角形がないのか？兄の茂に聞いても、「余計な事は考えないこと」の一点張りである。

たしかに当時は、溶接作業は、アセチレンによる金属の溶融方法と、電気棒（被覆）による方法があったが、電気はコスト高につきし、考えても無駄なことであるに違いない。当時としては、各部位間の繋ぎ方として、リベット（鉄）による接合方法が取られていた。何とかならないものか。十七才であった健三は真剣に取り組んでみた。計算をしてみると、かなりの強さがある。アングルに蓋をして三角形を作ったことで判明してきた。しかし、問題は、ただ、図

面上や計算上のことだけではない。実際に使用できなければ何にもならない。健三の頭におけるげながら、「溶接時代」は必ず到来する、とその時代に思ったものである。

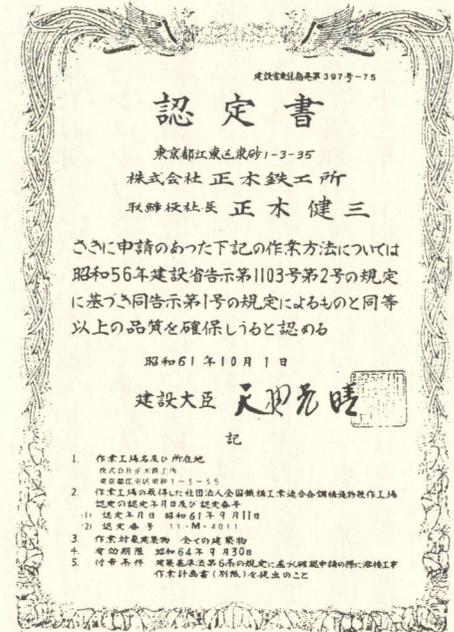
以来、幾変遷の歳月を経て、溶接時代の幕開けとなった。

終戦後の混乱期には、まだ「リベット」が使用されていたが、幾多の変遷を経ながら音もなく徐々に日本の技術革新は進行していた。「石川島造船所」はやはり、日本を代表する、この分野での草分けであった。「跨線橋」が全容接によって造られていた。「アセチレンボンベイ」が「カーバイト」に代わってくる。「カーバイト」の代替品として「プロパンガス」が台頭してくる。「ボルト」までが「吋」から「ミリ」に変わってきた。

この頃には健三は友人の菊池文治氏が手伝ってくれることとなったので、かつての宿題に取組むチャンスを与えられたのであった。

三角形の鋼材の実験を試みる。実験は当社の水圧ポンプを利用したが成功であった。計算した通りの強さが出た。ここで「形」には次々と、よいアイデアが生まれてくる。すべてが新しい形である。この種のものには「意匠登録」がよい。中には「実用新案」もある。鉄骨構造物の溶接時代の幕開けであった。

昭和三十二年、上野の松坂屋における「第二回優秀発明展」に出品し、「入賞」以来、今坂會長の努力により、三井建設(株)と、関谷氏の斡旋により北海道室蘭、檜崎造船(株)と、戦友津村正



建設大臣の認定書

二君の知人、垣内小二郎氏の斡旋により九州小倉、岡崎工業(株)とそれぞれMA式鉄骨による技術提携が結ばれた。かくしてMA式鉄骨の躍進時代を向かえた。鉄(リベット)構造のものよりも、約三分のコストダウンが可能であった。こうなると、競争相手がない。

技術提携をした前記三社にしても、受注がかなり大幅な値引きによるもの

だから容易である。とくに市街地付近におけるリベツテングの騒音の解消には好評を得たことは当然であった。大手各社もこれに刺激されたように、「ヤハタスタンフレーム」、「カワテツフレーム」、「鋼管フレーム」、「住友フレーム」等々次々と時代を追うが如く、続けて新製品を発表した。

三十年代に入ると、欧州から「軽量形鋼」が輸入され、日本各社も遅れをとらじと生産に入った。これは「断面係数」を有効利用したものであるが、日本のように湿度が高い場所では母屋・胴縁などに利用することが望ましい。この出現によって「デッキプレート」が製造される

ようになり、建築界に大きな貢献をしている。

昭和四十年代に入って、鉄鋼業界に一大革命というべき、H型钢の出現を見た。これは高度の圧延技術から製造された軽く、強く、加工費が安くてすむ「夢」の鋼材の出現であった。健三はここで「MA式鉄骨」にこだわることなく、今後の鉄骨および構造物製造業界に溶接に代替するものが出現するまでは、溶接技術を深めなければならないと再認識し、鉄工所の経営を維持するために何に取組むかを考えた。構造物で一番、確実、信頼性のある技術は何だろうと研究した結果、橋梁技術が浮かんだ。そこで五年がかりで、この技術を修得した。現在当社の「鉄骨加工技術」は橋梁製作なみの技術である。

MA式バックについて

「MA式鉄骨」と同時に開発した、三角形を利用して作られたのが、MA式バックである。これは「実用新案」に登録された。

簡単にいえば、箱の隅（コーナー）は強度的に弱い。この弱い「隅」に蓋をして三角形を作り、蓋の両縁を溶接によって固定すれば、外力は二分される。したがって、強度が増すことになる。また外側縁に従来使用されていた山型鋼（アングル）は、その背を上に向け、両縁を鉄板に溶接する。ここにも三角形を作ることによって、ちょうど竹製のザルのように、軽々として強いものができる。鉄材の板厚は約1/2減となり、かなり乱暴な使い方をしても痛まないMA式バックの採用により大同製鋼株の平井工場では修繕費が、これまで毎月二十五万円程度であったが、零となる（同社、知多工場の場合、同社設計のものより二分の一減の重量となる）などの利点があり、また、大谷重工業株でも採用され、各々好評を博した。

このように、一つの三角形の応用により、「MA式」なる固有名詞を造り出し、業界に投げかけた波紋は、溶接技術の発展は勿論、かなりの刺激となった筈である。この「MA」の名称の起源は、正木の頭文字と創始者の名（愛次郎）の頭文字を組み合わせたものを（大正五年頃に作られた）、創始者ゆずりのこの「マーク」を後世にまで残したいという健三の願望から敢えて

「MA式」と名付けた。

マーク標識は企業にとって「旗印」であり、当社の場合、「確固不拔」の信念の象徴でもある。

その「精神」において、かつ「実績」において、また然り、この真価を内外に向かって、堂々と表明できるものでなくてはならない。健三ら「正木一族」に関係する何人たりとも、必ずやこの精神と実績に感化され、「天性の發揮」への正道を歩むことは間違いない事と信ずる。「伝統」とは継承の芸術のようである。

当社が七十年の歴史を持つとは誰も気付かないし、また社員一同も日常「七十年」を意識して社業に携わってはいるわけではない。当社は小さく、弱い存在である。したがって無理をしない。背伸びをすると自らが苦しくなり、ついに倒れる。

当社にも何回か伸びる機会があった。しかし、そのつど、「天」、「地」、「人」の三拍子が揃わないから「これがチャンスなのだ」と思いながら見送ってきた。古くから諺に、伸びることは容易であり、縮むことは至難の業である、というのがあつた。創始者正木愛次郎の時代は膨張時代であり、戦後の当社は収縮時代であらう。

時代の流れに逆らってはならぬ。どの時代にもそれなりの生き方はある筈だ。丁度、水が方の円の容器に従うように従順な心で、何時でも通していれば正しい判断は自然につくものである。

社会には、数え切れないほど恩恵を受けている。当社を中心として、どの位の方々に厄介になつてゐるか？年間百万人（家族を含めて）としても七十倍の七千万人だ。だから一生懸命「社会に尽くす」ことをしないと返済は仕切れない。

真心から燃え尽くしてゆきたいと健三は想う。「愚直」「鈍根」でよい。そして

- 一、人には迷惑をかけない事。
- 一、会社の信用を墜さない事。

である。

これから、二十世紀に向けて世の中は、ますます変化してゆく。

科学の進歩とともに技術面は、止ることを知らないであろう。しかし、そのすべては人類が作り出すのだ。「人」は大事に育てなければならない。現在は「無責任時代」と呼ばれるが、これは、極く一部であつて、我々民族の血は若くままだまだ上昇過程にあり、かつ勤勉、積極で粘り強い。ぐんと胸を張って世界中を見据えながら、素晴らしい「工業日本」建設に努力されることである。

海外に学ぶ

第十八回オリンピックの東京開催は、昭和三十九年十月十日から二十四日間東京で開催された。九十四カ国が参加し、選手五千五百名、二十二種目の競技（他二種目）で日本は十六個の金メダルを獲得した。健三も一日暇を作つて代々木会場に見に行ったことがある。

このオリンピックが架け橋となつて、世界の文化交流が始まつてゆくのである。東京はオリンピック熱で沸き、都内はビルラッシュとなり、見違えるほどきれいに化粧された。この頃、当社も多忙を極めていた。

昭和四十一年の春先、当社のMA式设计担当の小川喜一氏が訪れ、「日本建築士会で今秋欧州旅行の企画があるので、是非行つて見たいと思うが、社長もいかがですか」という誘いがあった。

健三は海外に出たことがないので非常に興味を抱き、早速今坂義雄会長に相談したところ、「願つてもない、よい機会であるから、何とか都合をつけて参加するように」とのことであつた。しかし、仕事も忙しく、会社を二十一日間も放りばなしにして海外旅行に行くことはとてもできないので断念せざるを得なかつた。

協力により、完成へと大きく前進した。

この年は、砂町工場に本社事務所を移転すべく新築中で、ご近所の木幡さんが精魂をこめて大工工事を引き受けられ、また当社の出入りの職方からなる「正輝会」の中央スレート、三角鉄太郎氏、丸義重量運搬(株)の村田今二氏、酒井架設(現酒井重機)の酒井安応氏、森木材の森氏、上柿硝子の上柿武士氏、青柳鋼材(株)、殿焔商店(株)、会田工務店会田栄一氏、富士ボルト(株)、区議会議員入江善吉先生など江東区内の有力業者から結成された「協力会」があり、昭和三十九年から毎月例会を開き、情報の交換、相互の連絡、無尽などで夕食を兼ね、集まって貰い、当



創業者・正木愛次郎の胸像

会社としても、この年は創業五十周年にあたる年であり、該当する行事を行わなければならない。健三はこの五十周年を記念して父・愛次郎の胸像を造り、社長室に設置しようと考え、事業の面で愛次郎を一番よく理解していた戸田建設(株)の戸田利兵衛氏に相談した。

戸田氏は大変喜ばれ、彫刻界の実力者今里龍生先生を紹介してくれた。この胸像の製作に当たり、粘土を拝見した時には「生きている父」に会った思いがし、今にも「健三」と話しかけてくる錯覚さえ感じた。粘土なのに本当に感激してしまった。さらに驚いたことは、この像の後に回って見た時である。

健三は常日頃、夕食時に愛次郎が一杯やりながら、後に回ってその肩を叩く。そして今日の出来事の会話が始まる。これが東京にいる時の健三の日課であった。だから父親の頭の格好は十分知りつくしている。頭の後頭部天辺の中央部が親指大ぐらい凹んでいる。何故だろうと思っていた。その凹みが何とその胸像に生前中の如く表現されている。感激に加えて驚きが重なった。

今里先生は、この凹みについて、次のように説明した。

「この凹みは社長のお父さんが、正義感の強い方で愛情が深く、進取の気性に富まれ、かつ実行力のある方であった。こうした人に自然に生ずる人相のようなものです。戸田さんからお父さんのご性格をくわしく伺い、こうなる筈と思って製作したのですが、やはりありましたか。」とさも満足げに話された。

彫刻をする人は人相学、骨相学まで精通される。絵を書かれる方も同様で例えば、猛禽の骨格を調べてから書かれるという。健三は先生に心から尊敬と感謝の礼を述べた。

先生は大層ご機嫌でアトリエから奥様に声をかけられ、「お祝いをしたので、用意をして下さい」と暫くして、ウイスキーが用意され、小網町の叔母も含め、乾杯をした。

こうして当社五十周年記念の最も難しいと思われた事業は、戸田利兵衛氏、今里龍生先生の協力により、完成へと大きく前進した。

社が受注の一式工事をスムーズに進行させていたものであった。

この方々の協力で、砂町本社事務所も着々と進行し、山口房治工事総監督の指揮のもとに諸受注工事も進行し、好評を博した。

このように会社の内外ともに多忙を極めていた折柄なので、健三には到底、欧州旅行計画を実行出来る筈のものではなかった。

今坂会長は、海外旅行用の手引きの書籍二冊を少しでも参考になればと健三に贈呈し、

「病気になって入院したつもりで思い切ってゆくこと。」

「貴方自身のためでなく、正木鉄工所の将来のため海外から日本の国を眺めると日本の国のよさがよく解る。」

「語学はどうかなるもので大して問題ではない。」

「狭い日本の生活から、広い生活を味わって見る。」

「最も重要なことは、心が広々とする。」

など自身の体験を交えながら海外旅行を薦め、親にも勝る情熱にうたれた。そして健三は突発の急用が生じない限り、行くことを決心した。

こうして出発二週間前に山口房治、広瀬勝二、菊池文治の三氏に、欧州旅行計画を打ち明け三名の合議制でことを運ぶように依頼して後事を託した。それから、健三の欧州行きのための

本格的勉強が始まった。

今坂会長から貰った書籍や欧州旅行のパンフレット、注意書き等々、出来得る限り手広く読み、また海外旅行の話聞いた。

昭和四十一年九月十五日、当社の職員、下請関係者、親類、友人一同に見送られ、午後十時、爆音と共にジェット機は「日本建築士会」の一行百三十名を乗せて雨の羽田空港を飛び立った。機は暫く上昇を続け、高度四千メートル位の上空を被っていた「雨雲」の層を突き抜けると上空は光々たる月空である。下には「積乱雲」が綿のようにふんわりと見える。

機は根室上空で「エアポケット」に入り、上下の揺れが気味悪く感じられた。機内ではスチュワーデスが飲み物、機内食を配って忙しく立ち働く。ビールが特にうまい。旅行馴れしている人は無税販売品のウイスキーを傾けていた。食事が済むと各々手紙を書く（無料サービスの由）。

約七時間後、アンカレッジに到着。夜が明けていて朝である（夕方なのだが、そう感じた）。我々の飛行機は、沈む太陽を追いかけて無理矢理に明るくしてしまったのである。ここでは給油と機体の点検で一時間二十分位、時間を要したであろうか。

こここの空港売店ではエスキモーの人達が作ったアザラシの帽子やコートが販売され人目をひく。また、鉛筆に仕掛けがしてあるスード品（日本製）などがあった。空港側はコーヒーとク

ツキーを出してくれた。外はさすがに寒い。「樹」も余り育たないらしく、大木はなく雑木が無秩序に自然林を形ついている。

機体の整備が完了し、アンカレッジをいよいよ出発だ。北極の真上（地球の中心とされている点）を通過するのだ。高度約一万メートルである。上空には雲一つない。眼下に見えるものは、氷の層の大平原である。所々に氷河が見える。高度は依然として一万メートル、ここには夜はない。

健三はスチュワーデスにきいた。

「この窓が一カ所破壊されたら、どういふことになりますか？」

スチュワーデスは暫く考えていたが、

「この小さな窓が破れますと、機内のお客様は一分後には全員凍死し、五分後には完全冷凍人間となって、永遠の若さを保てます。」

と答えた。

「この上空での温度は？」

「大体マイナス六十度です。」

機内は空港を飛びたった時と少しも変わらない。自然に挑戦する人類の英知が、ここまで進歩している。「機」は約八時間半後、西ドイツの「ハンブルグ」空港に到着する。ハンブルグ空

港は整備のゆきとどいた空港である。通路には陳列品があり、お店もあったが朝六時頃なので、まだ開店していない。食堂へと向かう。二、三時間前の機内食に続く朝食である。

出されたチーズ（八〇ミリ位の丸型）の所々に穴があいているのが印象的。味はかなり強いが美味しい。ハンブルグ空港からオランダのアムステルダム空港までは約三十分だが、ソ連上空を通過し、ここで乗り継ぐという。

出発まで十五分位の時間があつたので、健三は「トイレ」に立った。時間がなかつたので急いでいたせいもあったが、トイレに飛び込んだところが内は真暗である。少し目をこらしてと書いて、暫くジーっとしていたが、時は経っても全く判然としない。

手探りで歩きだしたが全くわからない。ライターかマッチがあればよかったが持ち合わせない。尿意は刻一刻と身体に伝わってくる。どうにもならない自分をここで見いだした。尿意の我慢は出来ても、時間の経過は止めることは出来ない。ここで健三は覚悟した。時間に遅れた場合、取り残される。

地球上のハンブルグ飛行場内の唯一点、即ち自分が立っている場所である。広い地球上に現実には立たされている。

考えてみると、腹巻に東京へ帰る飛行代金は持っている。荷物は旅行が終えれば自然に帰ってくるだろう。残念だが致し方ない。せつかくここまで来たのではあるが、決心がついた。す

ると次ぎの考えが湧いてきた。

今までドアらしきものを「押して」いたが、今度は「引いて」見ようと真暗の中で手探りで（部屋のなかを歩いてしまったので見当はつかない）探っているうち、ドアらしきものがあつたので軽く引いてみると急に明るい世界に戻れた。「助かった」という思いであつた。

男専用のトイレは少し先にあつたのだ。用を済ませた頃、仲間が「オーイ、正木さん」と探しにきた。

アムステルダム空港を出て市内を見学する。何んといっても水の都である。七十二本の河川が縦横に市内を区切っている。水は澄んで美しい。カルガモが群れをなして遊んでいた。遊覧船に分乗して回る。

建物は古いがしっかりしている。「煉瓦」造りで二階以上の家が多いので、荷物の出し入れにロープを吊る金具がどの家の棟にも付いていて、何事によらず「合理性」を重視する民族性を象徴していた。海岸の鋼材置場でも鉄板を横積みにならないで枠を置き、立て掛けてあつた。

橋も多い。四つの橋のうち、一つ位の割合で橋下に「鉄格子」の酔っ払い収容用の建物が設けられて施錠するようになっていいる。翌朝、酔いがさめて「昨夜の出来事に反省」が済めば帰されるという。

昼食にレストランに入る。準備万端が整っていて、日の丸の小旗がケーキの上に歓迎の意を

表わしている。他国に来て初めて自国の国旗を見た場合、誰だって感激する。食事は入念に造られていて「真心」を食べさせられている感じである。ボーイさん達は若く、二十才そこそこのように見える。

東京オリンピックで柔道無差別級に優勝したオランダのヘーシング選手を彼らは誇りとしていいる。

「ヘーシング、ヘーシング」

と話しかけてくる。

「オー、ナイス、ヘーシング」

と持ち上げると、うれしそうにガッツポーズをしてみせた。誰かが

「俺は柔道三段だ。サー来い。」

と挑むと、肩をつぼめて後づさりする。なかなかユーマアたっぷりでもてなしがよい。

また市内見物をする。珍しかったのは電車に必ず「ポスト」が取り付けられていたことだ。われわれ一行は、昨夜から一睡もせず飛行機の乗り継ぎ、市内見学と時差（八時間）のせいも手伝って、宿舎のホテルの夕食時にはコックリ／＼と殆んど全員が船を漕ぎ出す始末であつた。

翌日はオランダを出てドイツに向かう。ライン河沿いのローレライの岩には白い花が咲いて

いた。さらに南下を続けると「ケルン」の聖堂の百五十七メートルの偉大な塔が見えてくる。天にそびゆる魔天楼、ケルン聖堂は実に六百年の永い期間をかけて完成されたものでゴシック会堂建築の最もすぐれた例の一つとされている。日本には残念ながら、この様な「物」は一つない。ドイツ国民の信念の強さには舌を巻く。「もって見倣うべし」である。

海外に来てみると、風俗・習慣の違いで見えるものすべてが珍しい。とくに、建物・家具・調度品に至っては、我が国のそれより頑強でかなり高度の品物が使用されている。例えば戸締まり金具一つでも真鍮製だが、ガッチリと大きい。それをピカ／＼に磨き込んで、丁寧扱っている。日本のホテル・旅館は体裁は良く見えるが、ここまで凝ってもないし、手入れもしていない。大分「段」が違っている。

さて、ケルン聖堂の補修工事現場の基礎まわりを見たが、土台は「煉瓦」であった。欧州全体は細かい砂地であるので、日本の灰土とは全く違う。話しは一寸飛躍するが、フランスのノートルダム寺院は七十年間計り続けているが、一ミリの狂いもないという。いわゆる土質が砂地であるからである。

地中管を埋没する現場の溶接方法なども、その開先の取り方は、誠に丁寧に用意周到そのものであった。また国民性も親切で、特に日本人には好意以上のものを持っているように感じられた。

街に出て「本屋さん」をポリスに聞いたが、言葉が相互に通じない。手ぶり身ぶり、手帳を出して読むまねをした所、やっとわかって教えてくれたので、二百メートルも歩いた頃、さあどっちの方向に行くのか思案していたら、肩をポンと叩かれ左の方向を指したのは先程のポリスであった。本当にうれしくなって何度もサンキュウを繰り返した。

聖堂の前で青年が自動車のパンクの修理をしているのを見ると、手先の不器用さが目立つ。タイヤ交換のボルトにナットをかけるのがなかなか出来ない。見兼ねて「手伝おうか」と申し出ると手を横に振り、「いやいや」と汗をかきながら、かなり時間も経過したが、完了して「サンキュウ、」と出てゆく後姿に何故か「ドイツ魂」の一端を見た思いをした。ケルンの夜は楽しく、歌い、踊り、歓待してくれた。街に出ても会う人ごとに声をかけてくれる。「さくら、」の唄や「荒城の月」など、唄ってくれて如才がない。友人、親戚の人といった感じである。

高速道路（戦時中に物資の輸送用に造られた）をひた走るバス三台に分乗しての旅行である。このバスはドーバー海峡を渡るまで約十八日間、我々を輸送してくれた。

「ボン」ではベートーベンの生家を見、フランクフルトに入る。ここでホテルの手違いが生じ、学都「デュッセルドルフ」まで六十キロの道程を走り、やっと夜八時頃ホテル「ゴールデンスローズ」に着く。名称はよいが学生の泊まる宿屋でベットも堅いし、風呂の湯も出ない。部

屋も狭いし、全くお粗末だ。しかし、食事だけは素晴らしかった。食後に近所の人達、とりわけ子供達ががやがや騒がしいので、日本から持参した飴を持って出てみる。私達を見ると何か話しかけるが、答えても相互に言葉がわからない。しかし、なんとなく通じているものが空間を隔てながらも伝わってくる。

ゲルマン民族と大和民族は、よく似ている。とくに肩の丸みなどはそっくりで、後姿だと甲乙つけ難いと思った。

健三は持っていた飴を一握りづつ、「ジャパニーズキャンディー、オープレゼント」といながら子供達に与えた。子供達は皆、喜んでいる。「サンキュー、——」
翌日はベルリン見学である。東ベルリン（ソ連）、西ベルリン（米国）へ飛行機とバスを使つての道程はかなり疲れた。

印象的には西ベルリンは自由主義圏なので朝からレコードをかけて賑々しいが、東ベルリンは西との境界には二百メートル位のバリケードの張りめぐらされた「地帯」ができていて、監視が百メートル間隔に立っており厳重を極める。我々のバスも一メートル角の「鏡」を底部に挿入して検察を受けた。勿論パスポートから所持品までに及ぶ。無表情で気味悪い査察官はドイツ人だ。

昨夜、東側から西側へ若者が逃亡し、ジープを使ってバリケードを突破し、発砲を受けたが当らなかつたという。同民族だ。上空に向けて発砲したに違いないと思った。ニュースを聞き、幾人かの人が犠牲となった供養塔には花束や花輪が掛けられて、同民族の悲劇を悼む。日本にもこのような悲劇を味わされる筈であった。

物見櫓で東側のバリケードの深さを見ながら「歩硝舎」に目をやると、歩硝が早くゆけ！と手で合図する。

東ベルリンに入ると、西側と全く違っている。まず暗い、活気がない。道路を走る車もない（車の使用は高官のみとか）。歩いてる人は皆、下を向いて歩いている。空爆で裸となって、骨ばかりになった議事堂がそのまま放置され、錆び放題な鉄骨ドーム。凱旋門上のエンゼルが、東向きに方向を変えられている。純金女神の像百二十トンは四十メートルの高さを誇りつつ、ヒットラーの自殺広場を見下ろしている。

「休憩」があった。日だまりのよい所で老婆が編物をしており、「キャンディ」を差しだし慰めて上げる。裏側のアパートには老人夫婦が淋しそうに無為無策をかこっていた。

市場に入って果実を買う、とてもうまい。バスの中で皆で食べる。とにかく東側は圧政といった感じで暗い。

西側に戻る際、小さな木造バラックが百戸ほど立ち並んでいた。これが、西、東に分けられた肉親同志の面会所で、一年に一回は定期的に面会が許されることになっているという。悲劇

である。

帰途につく。西側に入る前に「ゲ・ペ・ウ」の例の査察官が再検察でバスに入ってきた。日本の「五十円玉」と交換してくれといっているという。幾人かの人が五十円玉を出したようだった。

遅い昼食と買物が済み、ベルリンを後にして、空港へ。この円型の張り出しドーム状の建物は、七十メートルも柱なしで飛び出している。構造学的に素晴らしいと思った。夜八時頃、やっと「ハイデルベルグ」の宿舎に帰った。

ここでトラブルが起きた。ベルリン見学組の他に残留組（約三分の一位）が七時すぎまで皆の帰りを待っていたが、待ち切れずビールを傾けていた。飲む程に酔う程に酒のつねだ。ボーイがビールの本数を間違えてきた。話しても判らぬので柔道三段、空手一段の某社課長は若さも手伝い、ボーイの鼻をつまんでボーイを怒らせた。ウエイトレスも怒り、二人はサッサと帰ってしまった。そこへ私達が帰ってきたのである。

皆、腹ペコである。炊事場を覗くと料理人は右手に金串を刺して負傷し、全く元気がない。リバイルガーゼを貼って元気を出させ、料理の支度にかかって貰った。ボーイ、ウエイトレスは我々が代理でやる覚悟でいたが、ほどなく帰ってきた。平謝りに謝って、日本製の「翁の夫婦」、「おかめひよっこ」の壁掛け焼き物を渡した所、途端に小踊りして機嫌を直し、全員こ

となく夕食となった。旅行中としては面白い出来事ではあった。

翌朝はハイデルベルグの古城見学、全員が揃った。健三は昨夜の立役者を演じた格好となり、皆から感謝され、グループ内で一躍有名になった。

こうなると健三の仕事は多くなる。買い物、忘れ物、電報、時には電話など雑用はほとんど彼の所にくる。しかし、うまく話せないから買い物くらいならできるが、その他のことはできない。「ルツェルン」では「ローレックス」の時計工場直売部があり、一度に多くの人に頼られて汗だくだくで対応したが、さて自分の分がないので係に申し込んで奥から出して貰う始末であった。

アルプス越えは壮快で、日本では見られない青く澄みきった空、牧場、煉瓦造りの家々、まるで絵を見ている感じで汽車に乗り、イタリアに入る。昼食のレストランで愉快的仲間が踊り歌って、食事を楽しませてくれた。自然の中の人間同志のふれあいに見栄も外分もいらなかった。心から歓待する誠意が全てをのり越えて我々を十二分に楽しませてくれた。踊り方を知らなくても自然に解け込んで踊っている自分に気付き、心から感謝した。

ピサの斜塔、ミラノ、ローマ、バチカン王国など見るものが多く、食傷する位であったが、欧州は人類の歴史を作った文明の博物館だ。とくにナポリで紀元四百年にベスビオ火山の大噴火で火山灰に埋め尽くされた古都を発掘していたが、水道管（鉛管が太い）もあり、共同風呂

もあり、春画もあり、婦人、犬の化石を見てもすべてが現代と余り変わらない。建物も煉瓦作りで、これをつなぐためのセメント（石灰が使用されていた）であった。

人類の文化は紀元前よりかなり開けていたと考えられる。ただ、当時は「エンジン」のようなものまで発展しなかった。いわゆる機械、例えば、紡績用機械や、引き臼による粉食化や醸造などで原始時代から見ればかなりの進歩である。現代は飛行機を始めとする交通機関の発達により、文明は極度に高度化し「電子時代」を迎えている。

隔世の感があるといえはいるが、人間が生きるためのものとなると、大した変わりはないようだ。医学の進歩で栄養のバランス、病原菌の発見など寿命はかなり延長されている。

さて欧州旅行も後半に入り、ジュネーブに入る少し前でスイスの兵隊が二十人位で鉄砲をかっついて軍事訓練をしているのを見掛けた。スイスは軍隊のない国と思いついていた健三は自衛のため、徴兵制度をとり、年に一回は「訓練」を披露するという説明を聞き、国連の本部がジュネーブにあるのに気がついた。

こゝでは高層ビルの上部を壊しているので市の役人の説明を聞いたところ、

「この建物は五年ほど前に建築されたが、違反が発覚したので直ちに取壊しを命じ、目下工事中のこと。日本はどうだろう？建築ザル法などとさえいわれているほどだ。「守れない法律」は作らないことだ。やたらと欧米かぶれして背伸びして「理想像」に近づけるから、このよう

な結果となる。

昭和三十四年に制定された「工場等を規制する工業制限法」でも、首都圏から工場を追い出すことをねらいとしたらしいが、この法案を作った人達でさえも到底守れない法律を作っているのだから始末が悪い。

日本人は背伸びをしすぎる。もっと地道に堅実に、自分自身をよく知って行動し、社会のために世界のお役に立たせて貰うように努力しなければ、世界中から受けている御恩のお返しをすることはできないのではないだろうか？

時流はマスコミに左右される。大体マスコミも大げさすぎる。だから、マスコミはその使命を直視、反省すべきである。ジュネーブで「信賞必罰」の実例を目の当りに見て、人間としてかくあらねばならないと納得し、共感をも覚えた。

このあとフランス、シャモニックに向かう途中、世界一の高低差と二十キロメートルの長さを持つトンネル内をバスは邁進し、真っ暗のトンネルを三十分後に抜けた。出口はフランス領でトンネルの幅が十五メートル位であった。出口で、柱なしで突き出していた。コンクリート作りの屁だ。そのセンスの良さに感心しながらカメラに収めて、上空を見上げるとアルプスのモンブランの奇峰がのしかかるように青空にそびえて素晴らしい景観だった。我々の仲間の一部はアルプスの途中のロープウェイのある場所までのぼったらしい。ここで昼食だったが、モ

ンブランを一望できるレストランでフランス美人のママさんが、日の丸の旗を掲げての歓待には一同感激も一入であった。

パリでは、モンマルトルの丘で未来のゴッホ、ピカソを目指す青年画家の作品が眼を引いた。寺院の建築の優、劣についてはフランス滞在中の田村氏の説明で納得できたし、美術の勉強に役立った。

セーヌ河沿いに至るノートルダム寺院は荘嚴な建物で、サスペンドガラスの直径十メートル、重さ十トンといわれる。絵柄の極彩色は少しも劣化することなく、実に見事だ。現代技術では不可能とのことである。この寺院の屋根の軒先についている軒樋に象、虎、犬、鹿など獣の頭が模様としてあしらってあり、その中に（右側から数えて四番目に）人間がある。何故、動物の中に人間がいるのか？理由はこうだ。

この男は平素から働かないで、「金をくれ」といつていたので、フランス人は、獣の仲間に入れて、「ナマケモノ」と名付け、青少年の教材としていているそうだ。

ルーブルの美術館を見学し、セーヌ河に沿って、高速道路の建設が始められていたのを見た。夜はムーランルージュで最先端をゆくフランスならではのショーの数々を見た。エッフェル塔にも昇ったが、細かいところまで行き届いているのには驚いた。凱旋門を中心とする放射状の大通りにある歩道の幅が日本の二、三倍あるのが印象的であった。

コルニエでは、カーテンウォール式で建築された建物をみた。サッシュユ、ドアーなどを設置したままコンクリートを鉄板に流して、約一時間で凝結させ、熱板を八十度まで起こして一枚のコンクリートのパネル状（湯気がぼかぼか立ちのぼっている）となったものを、クレーンで吊り、工場外部へ運び出し、本格的に乾燥して出来上がった製品を組み立てて二・三階、またはそれ以上のビルに組上げてゆくという。

パリ郊外に建設ずみのアパートをみて歩く。欧州の大都市は、ローマのエウルのように、パリ、ロンドンの郊外にそれぞれ造成中であった。

イギリスも色々見学したが、紙面の関係で割愛する。

三十一日間の旅程で羽田空港に無事着陸した時は、正輝会の会社の人々から歓迎を受け、懐かしく感謝した。

この欧州旅行は健三にとって非常によい勉強になった。それは今までに海外に一度も出たことがなかったから、見るもの聞くものすべてが真新しく、気候といい、風土といい、全く別天地であった。そしてそこ、ここに住む人達によって切り開かれた生活の場が一つの部落をつくり、部落の集団が市となり国となってゆく。言葉も食べ物も着る物も生活の様式は、さまざまであるが、その中に統一されている何かがあることに気付かされる。

健三は本旅行前に今坂会長から送られた本やその他によって、ある程度の予備知識を得て参

加した。その一つに、「言葉」の問題がある。訪問先が七カ国にもわたるのだから、英語が少し位出来ても間に合わないであろう。勿論、出来ればよいのはわかっている。だが、その本は明快に答えてくれた。言葉には魔力というか不思議な力があって、言葉を通じて相手に必ず意思は伝達される。本当に困れば恥も外聞もない。手振り身振りで説明するようになる。本当に困らなければ身振り手振りはやらない。それは自分があるからだ。健三はほとんど「オーイエス」とか「ノー」、「アイトントノー」、「サンキュー」または「サンキューベリーマツチ」、「アイノー」、「アイトントノー」位だったと思うが、中学時代の英単語が時々飛び出してくるのは大変面白い現象だと思った。

これも背伸びをしないで、自分では出来ないことに徹していたからだと思う。この旅行中、班長になった吉田さんは英語が堪能だったので、多くの疑問に対して流暢な英語で相手に話しかけ、一つ一つ解いてくれたので、大変助かった。もう一つ感じたことは、健三はこのとき丁度五十才、せめてもう十年早く海外諸国を見ておけば、仕事の上でも日常の生活の上でも随分とプラスになったであろうということである。

創立五十周年を迎える

菊池氏の提唱で当社の五十周年記念は、昭和四十一年十月二十二日、砂町工場で行った。

当日は、開始一時間程前に物故職員の慰霊祭を行い、その家族に出席して貰った。

来賓には、戸田利兵衛氏、大谷米一氏、母堂サト夫人、江東区長伊藤和助氏を始め大勢出席を頂いた。

式典開始と共に進行係を当社の菊池文治氏、経過報告を広瀬勝次君がそれぞれ行い、続いて来賓祝辞となり、社長の謝辞が終わって、創立者故正木愛次郎翁の胸像除幕式がその孫達の手によって行われた。

次いで祝宴に入った。「三献」締めも鮮やかに幕を閉じ、出席者一同も大いに満足し、今後の結束を誓いあって散会となった。

その翌年の昭和四十二年四月二十五日、本社は大島から砂町に移転した。また昭和二十七年から始まって一時、中断していた書道会が「墨東」に誕生した。

今回は木村英之氏夫妻の肝入りもあり、石塚文、幸田安子、藤井智恵子、木村光江さんなどの尽力によって発起し、現在（六十二年七月）に至るも、なお依然として継続している。

大谷重工業(株)の再建問題

一、奇しき縁

戦後最大の倒産として、世間を震撼させた事件には、山陽特殊鋼、サンウエーブに続き、大谷重工業(株)がある。

当社は大谷重工業(株)とは深いかわりがあった。経営者の大谷さんは「種銭哲学」で名を馳せ、立志伝中の傑物として有名となった。また時の大蔵大臣田中角栄氏は、大谷米太郎氏の孫に当る大谷明正氏の結婚の仲介役をされた。そしてホテル・ニューオータニを紀尾井町に建設し、東京オリンピック開催に「国際的協力」をされたのである。

当時の自民党副総裁であった川島正次郎氏は、「ニューオータニ」柿落しの挨拶で、次ぎのように話された。

「このホテル・ニューオータニはオリンピックを控えて、わが国にホテルがどうしても足りない。そこでわが党として大谷さんをお願い申し上げ作って戴いたものであります。従って、この建物は、大谷さんが営利を目的としてとか、その他の理由では毛頭なく、氏が国を思う一念からわが党の要請を受け入れられて、ここにめでたく完成されました。国際的な意義を含めてご

同慶の至りであります。大谷さん、本当にありがとうございました。

つけ加えますと、世間でいわれているような大谷重工業問題は、ホテル建設による倒産では全くありません。わが党としてご依頼申し上げたのですから、もしかりにそのような事態はないと思いますが、起こったとしても党として全力で阻止することをお約束申し上げます。」

ホテル・ニューオータニの紀尾井町の土地は、昭和二十四年頃、伏見宮様が所有されていたものを、大谷米太郎氏が譲り受けたもので、氏は当時、江東法人会の会長で、ここに茶室を建てられて同法人会の「茶会」を催されたことがあった。この時、健三は兄・茂と同道して写真を撮るなどしてお手伝いをしたものである。以後、ここには現社長の米一氏が住居とされてホテル建設まで住まわれた。

ホテル・ニューオータニの建設は、大成建設(株)の設計施工によるもので、建築としては他に類をみない豪壮なものであり、とくに十七階の屋上は回転式(スカイラウンジと呼ぶ)で、いたまま東京が展望でき、建築学上の「粋」を極めたものであった。

その大谷社長の邸宅が台東区橋場にある。以前は料亭であったものに手を加えられた。広々とした敷地には、樹木が手入れよく植えられ、全国から集めた社長好みの石はほどよく配置され、誠に見事なものであった。健三は兄・茂の没後、奥様が年に一回催されるお茶会には、招待され、カメラを持参してはあれこれとお手伝いをしたものであった。社長も「正木、正木」

と目をかけられた。

これは、戦前からの大谷さんとの交際があったからで、健三が小学六年生頃、大谷さんが市議員に立候補されて選挙に落選。工場はスト騒ぎとなった（当時覚えているのは、粕谷磯平、朴春琴氏が市議員に立候補）。

当時、不況（金解禁によって日本が経済上の打撃を受けた）であったが、東京ロール製作所を大谷さんが理研の石山さんと協同で設立した。大谷さんは上京後、角力取りとなって鷲ヶ獄というしこ名で国技館に出て十両まで進まれたが、東京大震災を契機として鉄に取り組んだのである。

その頃、共産党は官憲の目の敵で、共産党というと、良・否はともあれ検挙された。政界は政友会、民政党の二大政党の衝突で浜口内閣が金解禁で倒れるや犬養毅が時の首班となり、両党相譲らぬ論戦を展開して政界をリードしていった。この頃、社会党ができたようである。

さて、東京ロール製作所のストは、バリケードを張り巡らしていた。大谷社長の身辺に危険が襲うかもしれないというので愛次郎は五、六名の腕ぶしの強い、職人を護衛として（いわゆる用心棒）派遣した。士は知る人ぞ知るである。相互に暗黙の内に信頼関係は出来上がっていたのである。その後、大谷米太郎氏の辣腕は、日本の製鉄事業の発展にもない、羽田、大阪、満州国にまでおよび順調に伸びていった。しかし、これに対抗してライバルがすぐ出来る

ものである。青ロール製作所が頭角を表し、両者ともに躍進を重ねて巨大な財をつくり上げていった。

しかし、時代の流れは常に変化していくものである。昭和三十年代に入って（戦後の一大特徴は「自由なる経済」なるが故に職業道徳を無視した企業進出である）優秀な設備と技術を持った日立製作所、東芝機械製作所が進出してきたのである。

こうしてロール製造業にかけりが見え始めた頃、大谷重工業では平炉・電気炉による製鉄事業に触手を伸ばしていった。しかし、大企業の組織だった経営と資本力の前には兜をぬがざるを得なかった。このような背景の中に大谷米太郎氏も年をとってゆかれた。

ところで、大阪に外島という島がある。この島の半分を日本通運が七十億で買うこととなっていた。ところが日通が汚職問題を起こしてこの外島の買取りが中止となった。これが大谷重工業の倒産のキッカケとなってゆくのである。

昭和四十三年に入って、大谷重工業の経理部長の更迭、新役員の木城氏の不慮の死とアクシデントが続く。

大谷社長は四十二年秋頃から別人のごとく、元気がなくなってしまうわれた。健三が丁度、大谷家（橋場）を訪問していたが、午後三時頃、社長は帰宅され、玄関に出迎えたところ、社長は奥様や健三に振り向きもせず、頬はこけ、肩はこそと落ち、歩くのも大儀の様子であった。

その年の暮れに行つた時は、遂に病床につかれて、毎日輸血をされていると奥様から聞いた。大谷重工業(株)は父・愛次郎の時代からの得意先であり、戦後も茂が羽田工場に通いクレーンの製作(百トン)から平炉の作業台、チャージングバック、スクラップ挿入バックなどの製作、または取り付け作業でかなりの仕事をやらせて貰っていたものであるが、次第にこの業種にもかげりが出始めてきた。それは後進国(東南アジア、韓国、台湾など)の低コストによる追い上げである。そのために製品はストックの山となり、メーカーは倒産、廃業があとを断たなかつた。戦後としては珍しい状況の展開である。

果して、大谷重工業もこの波及は免れられるよしもない。加えて大谷社長の病氣である。

当社の大谷重工業(株)派遣の従業員も次第にその数を減らし、正月休みを利用した修理のための特別出勤も、以前の十分の一位となった。健三は他に活路を見出さなければならず、非常に忙しくなってきた。

二、下請けの奮闘

当社としては正月の賀詞交歓会も一月中にはそのほとんどを消化したが、つぎの手がかりが思うように掴めず、今坂会長も酒井宣夫氏にも大変心配してもらったが、そう簡単に仕事などは決るものでもない。

MA式鉄骨・バックの数も昭和三十四年以来、かなりの実績をあげた。自社設計によるもの、

三井建設受託によるものなどがあつたが、H型鋼の出現と高工賃によるコスト高で、次第に採算があわなくなつていったのである。こうした全般にわたる鉄鋼不況の中で、大谷重工業(株)はどうなつてゆくのだろうか。この年の三月にはいつて、木城さん(経理担当重役)の急逝によつて、経営事情はいよいよ逼迫していった。

一方、大谷重工業(株)の下請けを一括した「協力会」が昭和三十四年頃、組織されていた。

協力会は、大体、春、秋開催され、関連会社の社長もしくは、同等の役員が出席し、懇親、情報の交換、会社側の指示などがあつて、一夕を過すのである。従つて、下請けの社長同志が仲良くなれば、部下が喧嘩やトラブルを起こすはずがない。この会に入っている会社は多かつたが、実際に会に出席する会社は十五社位だった。たまたま開催されたこの協力会で、各社から緊急動議として、大谷重工業(株)の約手が割れないのではないか、という問題が狙上にのぼつた。これは大事件である。

健三は、この協力会の会長を勤めていた関係上、直ちに幹部と計り、一週間後、協力会全員を羽田工場に集めて、会社側より会沢工作部長を始めとする幹部(経理課長を含む)の方々に会社の実情を説明して貰う「特別緊急会議」がごく内々に開催された。会社側の説明は概要次ぎの如きものである。

一、会社の総負債額 約二百七十六億円

一、会社出入りの商社(大) 六社
一、会社の下請け(商工) 東京 約二百六十社
大阪 百七十社

下請け(商工) 負債額 約七十六億円

この説明を聞いて下請けは動揺した。一週間後には、そのほとんどが羽田工場より撤退を開始する事態となった。そこで健三は(株)仁藤自動車の社長、仁藤氏に相談して会員の再招集を図った。そこでは約五十社が参集し、大谷重工業(株)問題についてそれぞれの意見をのべ、今後の見通しなどについても十分話し合った。

この第一回の会議では、事態は悲観的であった。いわゆる、経済問題である。今までの取り引き高はすべて水泡と帰するかもしれない。そうだとすれば早く引き上げて欠損を少しでも軽くしたいというのが大方の意見である。人情の然らしめる所かも知れない。しかし、本問題をこのまま各自の自由意思にまかせておいたらどうなるか、答えは明白である。大谷重工業(株)は、操業不能に陥る。平炉の火は止まる。今、大谷重工業(株)の操業が止まれば一切は止まる。

一大事だ。こうした切迫した事態のなかで、もう一人の自分がいた。

「健三どうする、しつかりせい。」

という。顔がほてり、身体中の血が激しくかけ巡る。この問題を処理していくには、「大谷重工再建協力会」が必要だ。誰かが責任者となって、全員が一丸とならなくては、この問題は解決できないということがこの時、突如として健三の脳裏に浮んだ。

そこで健三は、集まっていた約五十社の方々にこの考え方を示したところ、一同から「良い考えだ。これで行こう」と衆議は一致した。ついで「会長」をどうするかということになり、仁藤氏が音頭をとったが、結局健三が指名されてしまった。健三は再建とか債権取り立てには全く経験がなかったので固辞したが、全体の意見でそうさせられた。副会長はこの種の件にはベテラン中のベテランである仁藤社長が推挙され、村上商店、古川ポンプ、伊藤機械、太平洋工業、武井工業、小村工業の六社が委員として指名された。

かくして「大谷重工再建協力会」は東京で一応の結成を見た。だが、このままではいけない。明日からでも従来通り、羽田工場に全下請けが稼働体制に入って貰わなければならない。

健三はこの問題に対して自信は全然なかった。しかし、健三は、こうさげんだ。

「私もそうだが、皆さん、ここ二、三日か十日位の損失は目をつぶってください。それより今迄の売掛金を全部貰うことを考えましょう。」

という皆から

「その案は、どういうことなのか説明してください。」

「いや、まだありません。」

「しかし、必ずそうになると確信して行動しましょう。」
なぜならば、

「最後まで協力した者を見殺しにできないでしょう。」

「皆さん、いろいろ事情もあると思いますが、是非とも大谷重工業(株)の再建にご協力下さい。
お願いします。」

健三は命がけて皆に頼んだ。しばらくすると、二、三人の方々が

「よし、やりましょう。会長のいう通りだ、やります、明日から……」

一見、白面のなよなよした自分にこの重大場面で見事に協力してくれる。有り難い、と健三は心で思わず叫んだ。少し間を置いて仁藤氏からも

「どうぞです。皆さんやりましょう。」

と、一同に協力を求めた。次第に

「やります。」「やります。」

と手が上がってゆく。数分後には全員であった。健三は全く未経験なのだが、腹は決まった。

そして翌日から殆んど全員が元のように稼働状態に入ってゆき、羽田工場は急に活気づいた。これでよし。次はどうするのだ。何をするか。そら時間がないぞ、と目に見えない敵が、健三をぐらぐらと揺り動かす。

健三は夜、昼なく考えたが、名案らしいものは殆んど浮かんでこない。こういうことは自分で解決するしか他に道はないと思った。

昔、釜石の現場で岩井太助氏(釜石氏の富豪で岩井河原の所有者)が「裁判で相手の弁護士と論議する前に、フトンをかぶって墓石の下にいる気になって考え、弁護士を一度も頼んだことはない」という話をいつのまにか思いだしていたが、どうしても、良い案は浮かんでこない。村上さんからも電話があったが、やはり苦しんでいる様子であった。

三、亡き父・愛次郎の墓にゆく

それから二、三日経過した頃、ふと顔を鏡で見ると、今まで黒々としていた頭髮が、前方だけが急に白くなっていった。その夜、健三は父の愛次郎となにやら話をしてる夢をみた。びっしり寝汗をかいていた。そうだ。父のところへゆこう。朝のまだ暗い三時頃そっと身支度をして、車で父の眠る千歳烏山「妙壽寺」へ真暗い道を走りつづけ、四・五十分後には到着して真暗の中で父の眠る墓石と相対した。そして、大谷重工業(株)と下請会社を救う方法があったら健三に教えて下さい。そう頼んで軽く目を冥った。二、三十分ぐらい経過しただろうか。真つ暗の中から暗雲を突き破って「この負債の二百七十億の中の下請分、七十六億円は大手商社六社の各社より上回る。従って、下請負債七十六億円の全社が協力一致して、大谷重工業再建協力会の名のもとに、まず再建に懸命の努力をし、もしも破綻を生じ、債権者の合同会議に臨ん

だ時でも、一丸となっていていれば、その額は六商社各々の何れよりも大きく、従って発言権も最大である。」という考えが浮かんできた。そうだ。これだ。これでよい。今まで探し求めていた答えを与えられたように思えたのだ。眼をあけると、既に夜は明け放たれ、東に太陽が昇るのを感じ、心は一転して晴れ晴れとしてきた。

でも、これは自分の一人よがりかも知れないと思い直し、東京商工会議所の調査部の平野晃氏の所へいき、「返事を明日までにして下さい」といつて帰った。つぎの朝十時、同氏を訪問したところ

「この案で良いそうです。」

の答に、私はこの時、不満顔をしたに違いない。

「正木さん、新聞記者の意見を聞いてはどうでしょうか。」と平野氏のアドバイスで、「溺れるものは藁をも」の心境だから外聞も何もない。直ちに記者の方々に一同に集まって戴き、今までの一部始終を話した。たしか、記者は七人で真剣に討議して貰い、結論として、

「この案が最上でしょう。このまま実行して下さい。仮りに倒産することがあれば私達は全員であなた方を応援します。」

「有難うございました。よろしくお願いします。」

「正木さん、しっかりとやって下さい。」

皆から激励をうけ、健三は百万の味方を得た感じとなった。

四、解決へ向って

かくして健三は、仁藤氏に全員の集会を依頼し、自ら車で羽田の仁藤氏宅を訪れた。急なことなので約半数位の方々が不安の表情で集まっていた。そこで健三は、

「これこれしかじかで、この案でゆこうと思います。」

と東京商工会議所での記者団との話し合いを説明した。

「会長の言う通り、うまくいきますか。」

と心配する向きもあり

「絶対ではないが、大丈夫と思う。」

「大和が約手を割りません。」

「ええ?」

これは困った。何故だろう。島岡課長（経理）に内容をきかなくては、いろいろな不安材料が一気に健三を押し上げてくる。とにかく東京商工会議所の平野氏に電話してことの次第を告げた（数日後、神奈川県は東商川崎支部の幹施で大谷重工業問題に関連している下請け会社に五十万円までを直ちに貸しつける緊急貸付の窓口を作った）。

大和が約手を割らない裏には、何かがきつとある（大谷のメイン相当のバンクだ）。事の真

相はともあれ、割ってくれる銀行を探さなければならぬ。三井銀行、横浜正金銀行から承諾をとる。そうこうしているうちに大谷重工業(株)の深川倉庫から、

「富士製鉄から機械を取りにきている。全部出来上がっているのだが、一部品の納入で下請けが現金引き換えといい張っている。」

「よし、今すぐ金を持ってゆくから品物を持ってくるよう、私の名前で、指示してくれ。」
というわけで、小切手を持参して深川倉庫へ飛んでいった。

舟は積み遅れたら取り返しがつかない。信用問題である。約十数万円程の付属品であったが、健三の顔をみると、その商社の社長は

「会長に来て貰って申し訳ありません。お金は要りません。」

と品物を置いていった。後ろ姿を健三は「申し訳ない」と見送った。「〇〇会社だが、約手が割れない。」各方面から電話がくる毎日である。

この場合、どうにもならないのだが、自分が叱られているみたいなきらんだ。

そして再建協会なので、ともあれそれぞれに手形を割って貰える銀行を伝えて結果を連絡するようにする。当社の事務所では、「大谷重工再建協会」への入会申込書を作り、出入り商人、会社、下請業者のすべてに、速達便で直ちに入会するよう、返信料を同封して発送する事務手続きが行われていた。

大阪へも関連の下請けに「大谷重工再建協会」に急いで入会するように薦めなければならぬ。大阪に電話しても幸吉常務はその時不在だったが、しばらくして幸吉常務より懐かしい声で電話が入った。

「正木君ご苦労さん、すっかり頼むよ。」

「常務さんわかりました。できる限りやっています。〃協会が〃が一丸とならないといけないので、大阪を纏めるように総務の山内さんに依頼してありますから、常務さんからなるべく早く纏めるように指示して下さい。」

「では今からすぐ申し込み書を取りにやる。」

「二、三日前、速達で出していますから、もう少しで到着します。」
「そうか。ではわかった。頼むよ。」

大阪は早かった。数日後には約二百十社の「再建協会」の申込書は、新幹線によって健三の手に届けられた。また大阪の代表、約十名の方々も決まった。東京は返事が遅れている。中には健三の名前など聞いたこともないと不安がっている人もいるのかも知れない。何れにしても事は急を要すると感じた健三は突っ走った。こうすればこうなると確信があつてのことではない。ただ、そうしなければならぬという激流の中で行動していた。結果など考えてはいられない。時間がない(これには島岡課長から二十四日に十八億の約手が回ってきて、これが

最後となるであろう、と聞かされていた)。

当社の二階に社長室がある。ここで全てが考えだされた。父・愛次郎の胸像がある。決断が早い。内閣総理大臣にも、椎名通産大臣にも会いたい。

そして、この窮状を訴えて、最善の方法を講じて貰いたい(自分はどうなっても構わない)。
内閣官房長官木村茂氏に連絡を取ったが、なかなか多忙のようで摺えられない。「木村の秘書に伝えて、秘書を通してご返事を戴いたらどうですか」と先方から教えてくれた。政界のことなど全く知るはずのない健三が、ガムシヤラに突込んでゆく。電話をかけて二日目にやっと、木村氏の秘書に連絡がとれた。事情を話すと、その秘書は「それはお角違いだ。木村はもっぱら外交の面だ。内政のことならば、亀岡副官房長官がよい。亀岡の秘書に連絡を取りつけておいて上げる。」という。八百社三十万人のキャッチフレーズは、当時、毎日のように新聞紙上に書き立てられた。

また椎名通産大臣を電話で追っているうちに先方から注意があった。

「通産省は大臣が動かしているのではない。貴方のいう大谷重工業(株)問題ならば重工業局が担当だ。重工業局長にお会いしてお願いしなさい。」

と忠告された。それならば、直接お会いしてお願いをと思ったが、先方が会ってくれるか、となると疑問だ。とにかく事態は急を要する。

「では局長さんよろしくお取り次ぎ下さい。」
となった。

また、今坂義雄会長には、時の新日鉄社長の稲山嘉寛氏に大谷重工業(株)の救済方をお願いして頂くため、日参してもらった。しかし、時期が時期だけに稲山氏の秘書から

「十分ご意見をたまわった。当方としても考えているが、今は何ともいえない。しばらく待って下さい。」

と含みのある言葉であったが、落ち着いている様子だった。これは四面楚歌だ、と思った。しかし、「さて、ここは一つ成り行きに任そう。」と、考えなおした。

東京、大阪と大谷重工業(株)協力会会員を集めて東京丸の内東商地下会議室を借りて、正式に「大谷重工業(株)再建協力会」の発会式を開催することとなった。中小企業庁の金融課長井川氏から「融資の運用について」と題して、低迷する約手問題を含め、貸し出しに関する金融問題の講演を約一時間して戴き、設立総会に入る。経過報告、会則の審議、役員の選出などを順調に進行させ、満場一致で、ここに正式に「大谷重工業(株)再建協力会」は誕生したのである。

仁藤氏は大阪の竹内、宮脇両氏と共に副会長となり、東京より六名、大阪六名の役員構成であったが、大阪からは約三十名ほどの方々が上京し、ホテル・ニューオータニに宿をとられて本格的な再建運動へと弾みがついていったのである。

五、通産省との折衝

健三には、まだまだ多くの仕事が残されていた。

大和銀行は当社（正木鉄工所）にとっても主力銀行だが、大谷重工業（株）にとっても主力相当の銀行である。この大和が大谷重工業（株）からそっぽをむくということは、余程のことがなければならぬ筈だ。当時の大和銀行錦糸町支店の支店長は、吉村氏であった。その頃の当社は、まだまだ好況の波に乗っていたので、支店長も時々、社には見えられていたので吉村支店長に、この点をざつぱらんに聞いてみた。その理由は、大谷重工業（株）の尼ヶ崎工場とその関連の関西商事との間にトラブルがあったことがあることを挙げられたが、東京本社は厳としていることが判明した。

そこで健三は、大阪の大和銀行本店の寺尾頭取に直接電話をしようと思ったが、行き過ぎと思ひ、常務の原氏に現状を密かに説明して、八百社、三十万人の関連の人達が、みんな苦しんでおり、大和さんを頼りにしている。早急に約手割引の手段を講ぜられるよう寺尾頭取にお伝え願いたい、むねをお願いした。大和銀行としても直ちに全国支店長会議を開催し、この対策を協議したと仄聞する。

また、この頃、当社の会長・今坂義雄氏とは事業を通じて昵懇の間柄であった大谷重工業（株）の松山常務が、本問題が進行するにつれて当社へ再度、自ら足を運ばれ、激励を受けた。松山常務といえば、ロール界の重鎮であり、有名な人で健三など直接会うことさえできない人である。

「会」としては組織作りが完了し、対外的なことはいよいよこれからである。早急に次ぎの課題を消化しなければならない。

- 一、椎名通産大臣に面会して事情説明をし、最大のご協力をお願いしなくてはならない。
- 一、新日本製鉄の社長稲山嘉寛氏には、当社会長今坂義雄氏より再度お願いする。
- 一、水田大蔵大臣にも「再建のため」財政的に、後援をお願いする。
- 一、中小企業庁長官乙竹虔三にもお願いする。

気持は焦るが、なかなかそう簡単にお会いできるものでもないし、時間もかかる。打つ手を打てと自ら己れに叱咤激励した。

午後三時頃、通産省の高島重工業局長から電話が入った。

「面会したいから、すぐ来て貰いたい。」

「今から手配するから午後六時頃となる。」

「貴方の所は江東区だから一時間位でこられないか？」

「大田区羽田に会の幹部がいる。連絡や交通事情もある。」

「わかった。午後六時に局長の秘書まで来るように。」

それから大森副会長、古川、伊藤、村山、小村の五氏が定刻に集まり、高島重工工業局長と初めて面会した。

その内容を要約すると、新聞紙上では佐藤首相は今、騒がれている大谷重工工業問題にふれ、椎名通産大臣が答えた。下請けに連鎖反応が起きないよう「つなぎ資金の用意がある」の発言について、その「つなぎ資金」とは、「売り掛けの二十%から三十%を信用保障協会を通して貸付ること」であった。私は言下に「何れにせよ。弱小業者の多い下請けには向いてはいないと決めつけ、

「局長には、実情がお判りにならない。」

という健三の発言に局長が席を退かれた後、課長から注意された。

「正木さん、局長を余り苦しめないで下さい。」

「その心算りではないのですが。」

「いやかなりきびしすぎますよ。」

と課長は、「皆さんはご存じないが」と次のことを聞かせてくれた。

「ここ数日にわたり、真夜中の二時か三時頃、局長は水田大蔵大臣と二、三十分この問題で話されている。」

「では稲山さんへは……」

「五、六回局長自ら出向いている。」

「寺尾頭取は……」

「大阪から五回ほどおいで願っている。」

その話を聞いて、申し訳ないと反省し、着席された局長に謝る。

別れ際に局長から、

「サンウェーブも山陽特殊鋼も、これだけ熱心な下請けがいたら、倒産しなかったであろう。」

と評価して下さった。ついで、

「議事に報告しなければならぬ。」

と局長がいわれた。

健三はここで安井謙代議士を想い出した。安井先生には電話であったが、「八百社三十万人の話しをして置いた。」ということを聞いていた。私はこの時「御願書」をすぐにも書かなければならないと心にきめた。夜も七時半を回っていたが、東京商工会議所では、平野晃氏が待っていた。事情を説明して、平野氏と一緒に「御願書」を作文した。

約三十分で出来上がり、私は帰途についたが、亀戸駅で誰かが私を附けていることに気付いた。二人連れである。帽子から足の先まで真黒の装身である。「五ノ橋堂」で筆と巻紙を買い求める。わざと薬局で仁丹を買う。少しも恐くない。影が自分とともに動く。いよいよ本物だ。

五ノ橋の上だな、と思った。

橋の手前の道路を横断しようとした時である。突然タクシーが健三の目の前に止まり、ドアが開き、乗る。真つすぐに行くよう指示して考えた。自宅付近では危ない。今井にゆこうと決める。今井に着いてから自宅へ電話したが誰もこないといっていた。安心してねじり鉢巻で徹夜で「御願書」を五通書く。

翌朝、大谷重工業(株)の本社事務所(庶務)に浅野担当重役を訪ねて、総理苑の「御願書」を提出する了解をとり、高島重工業局長に提出後、中小企業庁長官にも提出、総理官邸に向かった。東京、大阪の会員合わせて十名いたが、首相官邸に入るのは、皆初めてである。

亀岡副官房長官は、「御願書」に目を通すと胡蝶をたて続けに吸いながら、

「手は打ってあるから大丈夫。もうすぐわかります。」

約十五分間位で退出した。

首相官邸前方に国会議事堂がある。当日は学生のデモに備えて、機動隊と警察官があちこちに配備されて、物々しい警備である。私達は、この網を抜け出し官邸に沿いながら坂道を下る。広い道路を横断して、右角のビルの地下にレストランがあるのを見付け、昼食を食べに入った。間もなく、そのテレビが

「大谷重工業(株)問題は、稲山氏がこれを引受けることとなり、一応倒産は免れ、再建すること

になりました。」

と放送した。本当か。十人は立ったまま、ただ、呆然としている。そして皆、眼から涙が溢れ出している。自分だけではない。声も出ない。

健三の頭の頂上から、重たいものが刻一刻と下に降りはじめた。額を通過して、眉と眼に、後方では耳に、鼻に、口に、喉に鉛のように重いものが、次第に降りて胸のあたりで、わからなくなった。重荷を下ろしたというが、その言葉通りであった。しばらくして、

「よかった。助かった。」という言葉が各人の口から続いた。

何とかしなければ「大変なことになる」という一大事を控えて、人間の神経は、極端に一点に集中し、何を置いても純粋にその達成に全能力が一斉に働き出す。そしてそれが「可能」か、「やや可能性がある」との判断に至ったとき、猛烈な勢いで全身全霊が、異常とも思える活動を開始してゆく。そのとき、全く無の心境、ただ純粋にである。これを「真の働き」というのであろうか。

山々に降った雨の一滴、一滴は凝って大海に注ぎ大河を形成し、流れて万物生成の糧となり、発して万象の源となる。我々は凝って一丸となり得たのである。全員の頬を伝って流れる涙は皆一つであり、その想いも感激も、降って流れる岩流、はたまた激流となった筈であった。

押しに押し、突くに突き、捨てに捨てた我が身体から、今、一瞬にして反転してこの縛りか

ら解放されてゆく、自分がここにある。身体全体が不思議なほど軽くなってゆく。これは本当なのだろうか。夢を見ているのではないだろうか。

我々は「貴重な体験」をさせて戴いた。今までは利害、損得、自己本位の社会構造の中にあつて、事業、商売、駆け引きはすべて、儲けるための何物でもなかった。だから、そうしたことがあたり前になり、慢性にもなってきた。またこれを助長する社会機構に抵抗もなく、押し流されていたひ弱な自分達であつたのだ。本流を見あやまることなかれてある。

我々は手を取り合つて成功を喜びあつた。この同志こそ本物にふれた心の同志である。

ここで再び我に戻る。まだまだ、為すべきことが残っている。大蔵大臣と稲山社長に提出すべき「御願書」の作成であつた。

六、「御願書」

大谷重工業株式会社経営不振に伴う

関連下請企業に対する救済方促進について

最近のわが国の経済環境には未曾有の厳しさがあり、加えて倒産企業も月毎にその数を増し戦後最高の企業数に達しようとしております。

かかる時、我々大谷重工業(株)の傘下にある下請企業数は関東、関西を合わせて八百有余社をかぞえ、このなかには、古くは大谷重工業(株)が創業当初よりひたすら親企業を盛り上げるため、

全面的に企業努力をつくしてまいり、良きにつけ、悪しきにつけて大谷重工業(株)あつての我々下請企業という態度を一貫して持ち続け、今日に至つたものであります。

しかし乍ら、最近マスコミ報道によれば我々下請企業のあづかり知らぬ、経営不振を伝え、今にも倒産しかねないような状態を伝えしております。

またこれらの報道に呼応するかの様に佐藤総理におかれては、去る四月十九日の閣議において大谷重工業(株)問題について椎名通産大臣に、「もし倒産した場合、下請企業に大きな連鎖反応をおこす心配があるので、事前に特別の対策を考へるよう」指示されておられ、通産大臣に於かれても連鎖倒産を避けるために対策を準備していると発言されておられます。

藁をもつかみたい事態に立ち至つておる際、このような発言は下請企業者にとって、何より心強く安堵いたしました。が、いま一步究極に迫られた我々に対し、大谷重工業(株)は必ず救済するといふ具体的な方策をここにお示し願ひ、我々下請企業者が安んじて正業に励めるよう再建のつなぎ資金の便法も、また金融の斡旋も関係筋に強力にご指示くださるよう、ここに要望いたします。

我々は「大谷重工業再建協力会」の名のもとに、親企業の再建を心から祈つており、努力を重ねる決意です。

関係各位におかれても、真情御賢察の上、御取計らい願ひたくここに陳情いたします。

昭和四十三年四月二十四日

大谷重工業株式会社再建協力会

代表 正木 健三

内閣総理大臣

佐藤 栄作閣下

これは、亀岡副官房長官に提出した文面と同じ文を宛名を替えた。

後日、大谷重工業(株)の社長に新しく就任された打浪社長を日新製鋼の副社長室(新橋)に訪問し、ご挨拶を申し上げた。そして「全国銀行協会」と「全国信用金庫連合会」に挨拶を兼ね、大谷重工業(株)の約手割りを全国的に指示して貰うべく、社長のご同道を願った。「全国銀行協会」では、和やかに打浪社長の論説通り事が運んだ。

全信連の会長は、小原鉄五郎氏である。応接間に通されるや、小原氏は直ちにこられて、「大谷さんの落成式には行けなかったが、稲山さんも貴い投資をされたものであると打浪さんから申し上げて下さい。私は新日鉄の株主なのだから。」

と、こちらの話を聞くのでなく、ズバリ所信を表明された。打浪社長も一寸、困惑された。「時の流れに沿った決断」と切り返され剛直、小原氏と火花が散る。健三も、「話が本論に入ら

ぬ」のでは困るので、「本日お伺いしました件は………」と切り出すと、「君(健三のこと)はゴルフばかりやっているのだろう」ときた。

そんなことはどうでもよい。本論に持ち込もうとするが乗ってこない。「小原哲学」は銀行よりも金を持っているという。

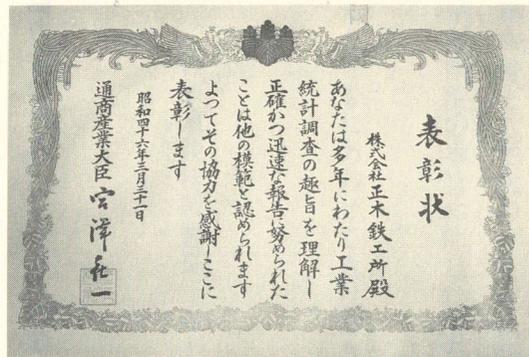
「とにかく大谷重工業(株)の約手の割引きを各信用金庫に伝えて貰いたい」と今度は側近の人に依頼して引き取った。紆余曲折しながら、我々は助けられたのである。夢ではない、本当なのである。

打浪社長さん、稲山社長さん、有難う存じます。平野晃先生のお陰です。本当にお世話様になりました。

大谷重工関連の下請けの方々も一致団結して貰ったお陰で、この団結力が「偉大な力」となって周囲を動かし、遂に倒産という重大破局を防止することができたのである。



東芝製鋼(株)より感謝状受賞 (昭和42年11月21日)



通商産業大臣より表彰状受賞 (昭和46年3月31日)

結婚と自宅新築

健三の長男正一は、昭和四十年工学院大学建築科を卒業後、かねてから閨谷氏を通じ、北海道の(株)檜崎造船所に三年間の武者修行を依頼していたが、社長水田正氏の了解を得たので、北海道に渡る事となった。母のヒサが風邪で入院中のことで、淋しそうであったが、そこは男の子、荷物をまとめると元気よく巣立っていった。健三も心配だったので後日渡道し、社長、専務、小野常務にもお会いして、よろしく教育方をお願い申し上げた。

昭和四十三年三月二十三日、このことが起縁となり、大脇家の次女ツヤと結婚式を挙げ、今井の家に住む事となった。

大島の自宅も、戦後のバラックのままなので、子供達も年ごろとなってゆくし、「大島の文化財」などと陰口が聞こえてくる。新築の事で地主さんと話しても「貸した覚えはない」といわれた。いわれるにはそれだけの理由がある筈と随分苦労してこの理由を探したが、自分らの親同志の話から戦後になるまで了解は得られぬまま、昭和五十五年十二月二十五日和解成立までほぼ十二年間法廷のお世話になった。昭和四十四年遂に意を決して建築に着手した。

昭和四十五年三月六日、木下家の次男雅晴氏と長女友子の結婚式、昭和四十五年十一月、長

男の愛一、昭和四十七年十一月五日、次男の房雄と結婚式が続いた。

昭和四十八年十一月八日には大谷重工業(株)社長の打浪吉朝氏が勲二等瑞宝章を受賞され、ホテル・ニューオータニにて「大谷重工協力会」主催で祝賀会を開催、「純金盃」を記念品として献上した。祝賀会には、ご夫婦が出席され、東京側協力会会員五十名の参加で賑々しく、健三もお祝いとお礼の言葉を述べた。

優良法人第一号

昭和四十四年三月十七日、税務署長より優良法人第一号として次のように表彰された。

貴社から提出された近年の法人税の申告は、申告納税制度の本旨に即した内容のものと認められ、ここに深く敬意を表します。

今後とも適正な申告と納税をされることを期待するとともにあわせて貴社のご発展を念じております。

昭和四十四年三月十七日

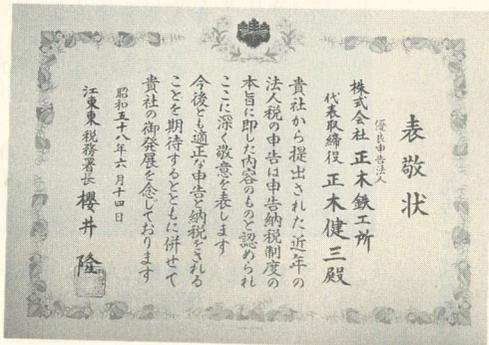
江東東税務署署長 五十嵐 文男

株式会社 正木鉄工所

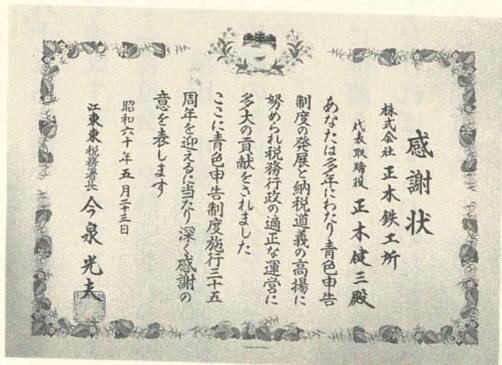
正木 健三 殿

これが優良法人として、江東々税務署管内では第一号であり、大一自動車(株)伊藤鶴松社長とともに現江東西税務署署長室で署長より、朗読の上、頂戴し感激した。

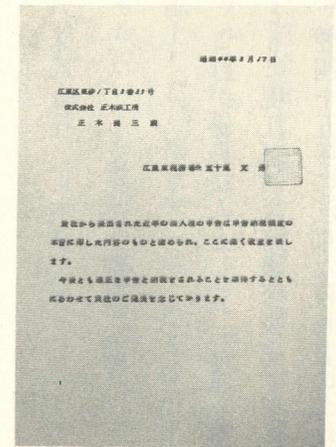
翌四十五年に江東々税務署の「柿落し」があり、同四十九年六月会員相互の親睦と納税理念



江東東税務署長より表敬状受賞 (昭和58年6月14日)



江東東税務署長より感謝状受賞 (昭和60年5月23日)



江東東税務署より、法人第1号の表彰状を受賞(昭和44年3月17日)

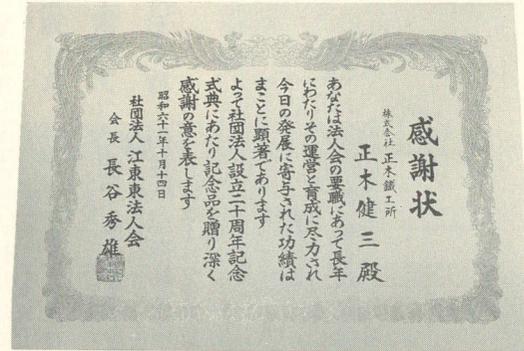
就任され、当社が総務部長を任命された。老朽化した木造の法人会館を鉄筋コンクリート造り三階建てに改造する計画を本会理事会で可決し、「実行委員会」を組織して昭和五十二年四月に落成した。

翌五十三年六月、林会長が急逝されたが、同氏は健三にとってはお得意に当たるトヨヨーカネツの専務取締役であり、法人会のゴルフ部で一緒だったこともあり、その年の優法会の五月の研修会には、ゴルフ会にご出席賜るなど心遣いを戴き、実兄のような親しみを感じた。同氏が懸案だった「就業規則」、「退職金規定」などを白沢副会長と会長の意を体し、時流に適したものに作成し、理事会に諮り決定した。以来、事業部長となり、現在に至っている。

林会長の後任として石井澄三郎氏が第三代目の会長となり、「会員増強」が毎年の重点課題と

の高揚、税務知識の普及を図る目的で、江東々税務署管内の優良法人約四十社による「優法会」が結成され、初代会長に選出され以来、十二年間に亘り、会長を会員皆様の協力で大過なく過ごさせて貰った。

「江東々法人会」においては、同五十一年にトヨヨーカネツ専務取締役・林英雄氏が会長に



社団法人江東東法人会より感謝状受賞
(昭和61年10月14日)

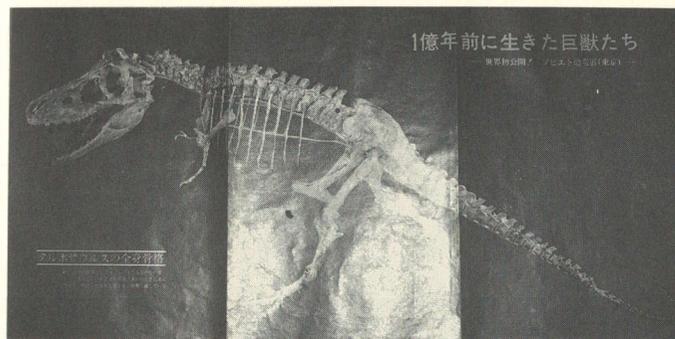
なっているが、ここ数年足踏み状態で六十五%を突破することができない。健三は石井会長の許可を得て、当法人会の二十四支部の支部長に、統括官と事務局員を同道して「六十五%突破」をお願いして回ったところ、遂に目標を達成することができた。また、事業活動の一端として「書道会」を熱望されたので、会長以下、副会長松本、横田、中島、婦人部長松田、青年部渡辺、溝呂木、佐野の各氏の入会を得て、現在にいたっている。

時ほど派手になり、不況時には意気消沈するのは当然のことである。

しかし、好・不況時の浮沈の差を小さくすることが経営上の要点であり、これは経営者の心境そのものである。要は社会への感謝の念の有無であり、心から感謝できれば欣喜雀躍して報恩の道を辿るであろう。会活動は、自己中心では運営できない。時流という相手があり、人と人の感情・感覚の接点で問題をどのように動かしてゆくかに懸ってくる。

自分一人のできたのだ、自分がやったという自惚れが生じたときは、すでに心境は墮落しているから、よほどの鍛錬を積まない限り、向上は望めないであろう。会の活動で心がけなければならぬ点はここにある。

先生が自ら工場内を隈なく探されては材料を切り、曲げ、溶接のみを当社職員に依頼され、第一体が上野博物館、続いて三保の松原ランド、京都の青少年教育センターと三体はまたたぐ間に完成され、現場での組み立て作業には当社より、健三の次男・房雄が三女・由美子とともに出張し完了した。



タルボサウルスの全身骨格

恐竜の制作 (タルボサウルス)

愛次郎の胸像を造って貰ったことが縁となり、今里先生の人柄にも魅せられて、懇意にさせて頂くうちに、昭和四十九年一月の中頃、先生の訪問を受け「ソ連が発掘した一億年前の恐竜の化石(タルボサウルス)を両国大使館を通じ、日本で複製する了解を得たので約一カ月で三体を復元したい。骨の中に鉄筋を入れて、外部には鉄は出したくない。ここ(当正木鉄工所)で製作をやらせてもらいたい」といわれた。

国家的なことではあるし、当時仕事は忙しく、工場も狭かったが、現寸場の階下を作業場として提供し、先生の恐竜製作が凄まじい勢いで開始された。先生は当社内の仮眠室を自ら定められて、こゝに起居され、文字通り寝食を忘れられた。作業が一貫不意、仕事の鬼となられ、鉄をも溶かす熱意と実行力には唯々頭の下がる思いであった。

今坂義雄会長の死

昭和四十九年三月三日、体調を崩し、入院加療中の当社会長、今坂義雄氏が逝去された。今日まで、社会につくされた幾多の功績を偲び、新日本製鉄の三鬼氏と叙勲について話し合ったが、家族の意向もあり、そのままとした。

会長は健三をわが子のように、大事から些細事に至るまで気付かれたことは遠慮なく、びしびしと教育願って本当に幸福であった。

健三は葬儀委員長の大役を仰せつかり、葬儀をとどこおりなく執行させた。

東砂工業会の結成

昭和四十九年七月二十三日の酷暑の時期だったが、向山工業所、蟹江製作所、大東製作所、中島铸造所、他数社の代表者の人達の突然の来訪を受けた。

これは、当社にも関係のある「末広通り」について、地元商店街から「交通規制」の願書が城東警察署に提出された。この内容の要点は、①信号の設置、②時間帯による交通遮断の二つであった。

①は当然のことながら、②は地元商店の営業上に関する重大問題なので、関係者は真剣にこの問題を考えられ、対策を講じなければならない、と鳩合されたのであった。勿論当社としても②が実施されれば、この時間帯の荷物の出入りはできなくなるので、それこそ、死活にかかわる重大事件である。

地元十数社の人達と、このような一つの問題について話し合うことも今までは全くなかった。奇しくも、今日ここで初めての出会いであった。約一時間ほど、皆様から意見が出て、現状では、②は無理だ、という結論になった。

そこで、この意見を警察へ具申し、商店会にも話しかけなければ、同会とは「永遠の別れ」

ともなりかねないので、先ずこちらにも「会」を結成し、具体的対策をねり始めた。健三は極力強行派をなだめながら、東京商工会議所江東支部、城東工場連盟などの協力を得ようと、早速「御願書」を作成することとなった。その会を「東砂工業会」と命名し、会長は固く辞退したが大谷重工問題の実績からぜひにとり、引き受けざるを得なくなった。

かくして、「東砂工業会」は役員諸氏の奮起によって、会員の募集も並行して行われ、「陳情書」も提出されて、再三、商店会とも警察立会いのもとに行われたが、結論を得ぬまま、現在に至っている。

現在、会員は約百社で毎年定時総会、事業活動などを行い、役員ของทีมワークのよさは抜群で、江東区工業連合会結成の根幹となり、同会運営の原動力となっている。

役員は東砂一丁目から五丁目までに各々三名を選出しており、健三が連合会会長の都合で、トヨー消火器(株)の小池社長に会長代行を依頼し、大東製作所のは松社長がこれを補佐し、赤津幹事が連絡の一切を受け持ち、ファックスを利用し、足で回る所はすべて気軽に回っている。

創立六十周年記念行事

昭和五十一年十一月五日に当社の創立六十周年記念行事を開催した。五十周年に倣い、記念行事に入る前に、物故社員の慰霊祭を遺族に出席戴き厳粛に行った(司会は本橋健司氏)。当社の創業から今日までの六十年間の経過報告を広瀬勝次取締役が行った。続いて、記念式典に移り、諸官庁を代表して江東区長の小松崎軍次殿、得意先を代表して、(株)石井鉄工所社長の石井寛殿、トヨーカネツ(株)専務取締役の林英雄殿、社団法人倫理研究所長の丸山竹秋先生などご来賓の祝辞を頂戴し、つづいて表彰式を行った。これには当社に二十年以上に亘って関係した商社、工場、商店、工業所などの代表者に、感謝状と記念品(今後の各社の繁栄を祈念し心経を金泥書したもの)を贈呈した。

そのあと、青柳鋼材(株)代表取締役青柳篤幸氏より、受賞者を代表して謝辞を頂き、式典は滞りなく終了した。祝宴では、乾杯の音頭を元日本化工(株)の優秀な技術者であった川口ゴム工業(株)の斎藤静蔵取締役にお願した。

祝宴の料理は、和洋折衷とし、飲み物はベルを使用した。また、ロッテ会館に初めて亀戸の芸者衆を招き、会場を盛り上げ、余興には林稔氏(現社団法人倫理研究所理事、「清風会」会員

で吟詠鳳翔流家元・雅号神翔」と健三が組んで「書道吟」を演じ、また書友の森四郎君（元大谷重工業(株)倉庫係）の配慮で表装された会員三十点の作品がずらりと並べられ、会場を引き立てた。

かくして会場は、ご出席を頂いたお得意様を始め親戚・縁者、出入りの商・工業関係の方々による懇親会の坩堝となって瞬く間に一時間半が経過し、和気あいあいの裡に当社「正輝会」会長村田今二氏（丸義重量(株)の社長、当地区のPTA会長、消防団副団長、勲六等叙勲）の三献締めでお開きとなった。

記念品には、五十周年と同じ今里静生先生の作品と、「社誌六十年のあゆみ」を出席者一同に贈呈した。今回の行事には、二百名以上のお客様が出席されたので、当社関係者は服装を目立つように、「印伴纏」を着用した。

マンション建設と工場の立場

昭和五十二年十一月に当砂町工場の南西側にマンションが建設されると仄聞した。この頃になると、工業関係に従事している事業場はすべて公害の発生源として取り扱われ、「早く他へ移転する」ことが常識で、現存している事業所は「困ったもの」扱いであった。従って、一般住民から公害課へ連絡があれば公害課は現地に来て、ホーンメータで計り、是正勧告をする始末であった。

これは、遡ると昭和三十四年に「工場等工業制限法」が制定されてからのことである。

都内の過密を避けるのが狙いで、このために人が集まる学校・工場等を制限しようとする条例である。生活環境をよくするための条例なので結構なことで騒音・震動が減少し、河川に汚物を流さないようになったので魚が住むようになり、大気汚染も減っていったが、日本人の特性で余りにも性急なやり方に企業が追従することが不可能で、頭を悩ましている所へマンション業者に自由に振舞われては、我々としてはたまったものではない。

現存している工場は当然そのうちになくなることを前提とした営業を行っているので、入居した者と工場側とにトラブルが起こるのは当然であった。

トラブルが起きる時点では、すでにマンション業者は売り逃げなので、責任はない。工場側は住民パワー（マンションにはかなりの人数が入居している）の猛攻撃を受けて、気の弱いのは他に転出する始末であった（親企業が他に転出しても零細企業はついてゆけず）。公害問題では唯々「平身低頭」あるのみという異常な状態が続き、当区内もどんどん変わっていった。このようなとき、当社前にマンション建設が始まったので、当社としても重大な決意を持って、この対策に当たらねばならない。しかし、一縷の望みは、「東砂工業会」があることであつた。

健三は自衛手段として、直ちに隣接の東京電解㈱と㈱玉川製作所、㈱狩野組の各社に連絡を取って、業者と話し合うべく「マンション建設反対」の陳情書を区と都へ提出した。勿論これには、東砂工業会員の署名捺印も集めた。まだこの頃は、「紛争の調停」は全く雲をつかむようなもので区も都も同じ位の程度であつた。

健三は営業権と生活権の保障を得るため一步も退かなかつたが、竹内さん（東京電解㈱専務）、熊倉さん（㈱狩野組）の助力で、一応調停書に捺印し、この問題は解決した。

江東区工業連合会の結成

昭和五十三年十一月八日、日曜日の朝、新聞に折り込まれた色刷りの基本構想見直しの区報を穴のあくほど、何度も読み直してみても驚いた。工業はまったく蚊帳の外で皆無の状況で、商業住宅に重点が置かれ、盛んに「住みよい江東区」を謳歌している。

困った、無資源国日本は、工業立国以外、生きる道はない筈なのに、どこで、いつの間にか変わってしまったのか？健三は自分に大きな責任があるように感じて、今までのことを走馬灯のように考え反省した。社会の中に自分がある。自分は社会人だ。時の流れに逆らう心算はない。しかし、その流れがもし間違つた方向に進んでいるとしたら、黙って放置すべきでない。

翌日、健三は城東工場連盟の田中専務理事と区報をめぐって、激論を交わした。その結果、健三は自分の脚と精神力でここまで追いつめられた工業を蘇らせるより他に方法はないと思つた。「蟻螂の斧」であることは百も二百も承知であつた。しかし、健三自身の体中の血が、自分をそうさせよう、そうするんだ、ともの凄い勢いで回転しだした。何故、皆は黙っているのだろうか。これでよいのか？片頬を殴られたら、もう一方の頬を殴らせる度量はあつても、自分の意見は何一ついえないようでは社会人じゃない。

彼は夢中で、団体・個人を問わず、今こそ起つべきであると訴えた。とにかく、夜昼なく夢中で目茶苦茶に奔走し、恥も外聞も見栄もプライドも一切なかった。そうしているうちに幾日が過ぎただろうか。ボツボツと反応が見え出した。

各地に志を同じくする人達から連絡や訪問を受けるようになり、たちまち各地に澎湃として「工業会」の結成をみた。それは次の八団体であった（敬称略、○印は以前に結成されたところ、深川南部工業会は、昭和五十七年十月結成）。

亀戸工業会 会長 中沢正夫 江東大島工業会 会長 市川 進

○北砂一丁目親会 会長 田中 徹 北砂工業会 会長 永田 武二郎

東砂工業会 会長 正木健三 ○東砂中小工場協議会 会長 長谷川 保

南砂工業会 会長 飯塚年一 猿江地区工業会 会長 平田 海蔵

各地区に誕生した工業会は、基本構想を見直し工業を存立せしめるべく、それぞれ陳情書、御願書を区に提出し、行政の反省を求めた。

浜田甚三郎氏は、東砂地区を再三にわたり、実情を把握された。審議委員にも個別に訪問し、「工業の存在とその繁栄すべき施策」を懇願した。

昭和三十四年に制定された「工場等・工業制限法」による政令によって、多くの大企業は軒並み他県に転出し、取り残されたその傘下の下請企業が、路頭に迷い右往左往している。

江東区の場合、「公害課」はあっても「工場の育成」を考える気は毛頭ないので、これら路頭に迷っている企業の相談相手になってはもらえない。そこで、前記の八団体は鳩首会合を開いて、つぎのような計画を練った。

一、この会を一つにまとめて連合会組織とする。

二、毎月定例会議を持って向上を計る。

三、区役所に毎月一・十五日に出向する。

昭和五十四年十二月六日、「江東区工業連合会」の発足は定まり、昭和五十五年四月十一日、結成大会を西大島総合区民センターで開催した。

この大会には区長を始め当区選出の衆議院議員、都議会議員、区議会議員の諸先生の臨席を得て、会員二百四十名参加のもとに賑やかに開催された。

産業会館の設立は、東京商工会議所江東支部の布能会長、山岸、多田副会長、工場連盟、商店会などをお願いして区長を説得し、建設して頂いたが、これは本格的に建てる以前の足掛かりに（準備の）住宅公団より二階フロアーを譲り受けたものである。

当連合会は過去八年間、無為に経過したのではなく、江東区のマンション化に対し、無秩序の悪癖を東京地裁において、「二線の確立」をさせた努力は、東京電解(株)竹内専務、(株)ナカガワの中川社長と当社の三社の合同戦線ではあったが、当連合会の後盾を見落すことはできない。



東京都江東区長より表彰状受賞（昭和56年11月3日）

本和解文は、わが国としても初めての事例として「最高裁」にまで届くといわれている。

隣接の墨田区では、産業振興の情熱については凄まじいものがある。前川振興課長の若さもさることながら、前区長山崎栄次郎氏の産業振興への情熱が、墨田区をして官民一体の素晴らしい展開を繰り広げさせたことを我々は、深く認識しなければならない。

さて、この五十五年という年は、悲喜交々の出来事の多かった年で、薄衣佐吉氏の自宅が新築落成し、清風会としてお祝したが、釜石の北野家でもご長男の結婚式があり、橋場の大谷邸が新築落成した。古くから当社と関係のあるコンプレッサーのメーカー、玉木鉄工所の社長の急逝、当社の元役員であった山口房治氏、山中軽金属(株)の山中将行氏がそれぞれ他界されるなど時代の変遷を思わせた。

昭和五十六年、会社行事として、先代正木愛次郎夫妻の第三十七回忌の法要を妙壽寺・中野日本閣で関係者の出席を得て行った。

当工業会の標語「工業で興せふるさと江東区」は二月十六日の正副会長会で決定された。

元正輝会会長三角鉄太郎氏は長年に亘る病魔との闘いであったが、三月八日、ご家族の献身的ご努力により今日まで持ち耐えられたが、遂に永眠された。また、山田操氏（元大谷重工業(株)の役員で東京ロール製作所時代、大谷氏の片腕だった人）が永眠された。

七月には「ポートピア'81」および本・四連絡橋の工事現場を視察、見学した。

またこの年、光ファイバー（光が細い繊維状のガラスを通じて電送される）の事業化を進めている藤倉電線(株)佐倉工場を見学した。

また、付近工場のマンション建設が本決まりとなったが、地域の反対を無視して踏み切ろうとしたので、猛反対を喰ってしまった。

昭和五十六年、(株)羽生田鉄工所さんとは、前社長羽生田順平氏時代（昭和二十八年頃）よりの永い交際で、当社のプレス三〇〇トンを製作して貰い、当社は現社長羽生田三郎氏より工場建家の建設を受注したり、試験機器などでもお世話になるなど深い交際をしている。この年の十月には、ご長男義人氏の結婚式があり、お祝いに参上した。

昭和五十七年、海辺地区の大谷幾三氏が永眠され、ご家族の優しい心使いから、奥様の静香先生は四月二十六日より五月三日まで、そのまま東京で暮されることとなる。

健三は四月に東京商工会議所江東支部主催の中国視察旅行に参加した。北京から万里の長城、

上海、杭州、西湖などを九日間見聞した。

昭和五十七年十一月には榮製作所（小勝榮一氏）のご長男友次氏が結婚式を挙行、健二夫婦が仲介となった。父親の榮一氏とは若い頃からの柔道々場での知人である。

当社に貢献された人々

酒井 宣夫 明治四十年（東京生）

昭和三年、東京大学機械工学科卒。藤倉ゴム工業㈱に入社。役員工場長を経て退社後、当社事務係の顧問となる。当社が昭和二十年、戦災による復興の際、技術面での指導を頂いた。当社社長・長男正一の媒酌人を勤められた。

北野 豊信 明治二十年（釜石生） 昭和五十六年 八十八才 没

昭和十四年、当社が日本製鉄釜石製鉄所機械・鑄物の両工場を新築の際、同製鉄所製缶工場係長で当社の製品検査を兼ね、技術指導を受ける。

釜石市に鉄道開通に当たり、同製鉄所の火力発電所より受電するため、電柱工事が突貫工事で実施された。その折、当社を指導された。戦時中、溶接棒を開発し東條総理より「技術賞」を受賞。終戦後、北野鉄工を開設し、釜石港の船舶修理・製鉄所の工事などを施工。

当社工場の人手不足の応援や、釜石商業協同組合橋桁工事に協力されるなど、実働面で友谊的關係を有し、正木愛次郎とも昵懇であった。当社発展の蔭の功労者である。

正木 茂 明治四十四年（東京生） 昭和三十六年十二月 五十一才 没

創始者・正木愛次郎の長男、工手学校建築高等学科卒。

幼少の頃よりカン強く、鉄の中で育つ。学校卒業後、入所し、愛次郎の片腕として活躍。昭和四年の工場閉鎖時代を経て、日本化工(株)、藤倉ゴム工業(株)の設備関係工事を開発し、昭和十四年、当社が株式会社組織とする際、愛次郎とともに共同代表取締役就任。昭和十年、応召を受け満州に派遣され、終戦後、シベリアに三年間、苦吟の抑留生活を送る。

昭和二十三年十二月、内地に送還され、昭和二十六年当社代表取締役となる。その後、砂町工場の建設に着手。大谷重工業(株)羽田工場の設備関係に進出し、実績を挙げる。同工場内に、「協力会」を創設し、下請け業者相互間の親睦を計った（後年、再建協力会の母体となる）。

小学生時代、学校へは高熱をおしても出席、「皆勤賞」を受けた。よいと思っただらどこまでも突込んでいく徹底型で中途ではやめない。注意力があり（おだてや脅迫に乗らない）研究心は旺盛。他人の分野へは足を踏み入れない。茫洋として大きく、社交的。後を振り返らない（クヨクヨしない）性格、酒は極めて好きであったが煙草はやらなかった。

身体は大きく体重もあり、堂々とした鉄工所の社長タイプ。趣味としては、柔道・時計、晩年に日本舞踊などがあつた。

特技として、長男の小児麻痺に対する父親の愛情から、「日本針灸医学校（四谷）」に通学し、針・灸・マッサージの技能を修得。昭和三十六年十二月九日、病に倒れる。

今坂 義雄 明治二十二年（熊本生） 昭和四十九年 八十五才 没

大正三年、東京大学機械工学科卒、三井鉱山入社、釜石鉱業所に勤務。昭和九年製鉄大合同によって日本製鉄(株)釜石製鉄所に勤務、昭和十年同社理事・技師長となる。昭和十年から十一年の間、欧米の製鉄事業を視察、昭和十六年現韓国兼二浦の同社兼二浦製鉄所の所長として任。

昭和十八年、当社は兼二浦病院建設工事に参加し、責任者小林次郎取締役（現三昌工業社長）以下数名を機械器材と共に派遣し、施工中終戦を迎える。が、運よく昭和十九年東京本社勤務となり帰還し、昭和二十年財閥解体により、同社を退社。終戦の混乱期を経て昭和二十七年、日本開発機製造(株)社長に就任、昭和三十一年同社退社。

昭和三十七年、当社の会長に就任、MA式鉄骨の普及につとめ、三井建設(株)と技術提携。大谷重工業(株)問題の時には新日本製鉄(株)福山支社長に懇請されるなど、活躍され、社内的には社長顧問として重責を全うされた。

昭和四十七年、階段を滑り転倒し、腰骨を痛め、以来静養に専念し、昭和四十九年三月天寿

を全うされた。

山田 操 明治三十七年（長野生） 昭和五十六年 七十六才 没

昭和六年、東京大学機械工学科卒、(株)東京ロール製作所（後の大谷重工業(株)）に入社、同社ロール機械、一般機械の設計に意欲を燃やされ、技術面での同社の立役者（旋盤、クレーンに至るまで設計）。昭和十七年、機械工場を自営。昭和二十年三月、戦災を受け全焼。

昭和二十一年、GHQ工業技術顧問を経て、昭和三十六年、在日米軍兵站司令部（特別顧問）となり、退職。昭和三十六年、日綿実業(株)技術室長。昭和三十八年、大径鋼管(株)専務取締役。昭和四十年、日綿実業(株)東京支社機械建設本部長兼電機重機械輸出部長（参事）。昭和四十二年退職。墨田機械製作所創業。昭和四十五年、同所閉鎖。

当社は、東京ロール製作所時代より接触が多く、終戦後、当社の復興には技術面、精神面の力添えを戴いた蔭の恩人である。温厚篤実の人格者にして、設計技術には、秀れた技術力を有した実力者。

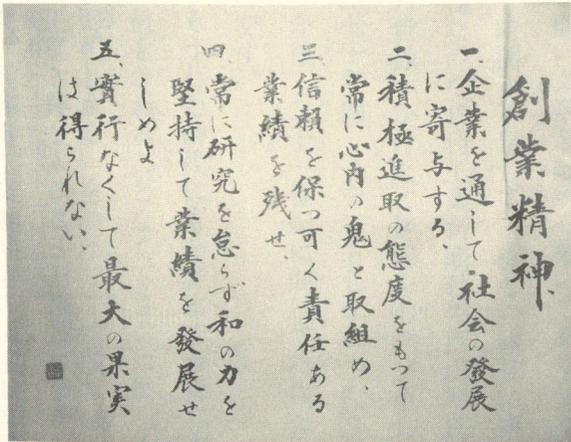
山口 房治 明治三十六年生 日本大学建築科卒。

昭和十六年、現社長（当時常務）出征時、当社に小林治郎と共に入社。以来、日本化工(株)、

藤倉ゴム工業(株)などの工事を手掛け、とくに戦時中、当社が東京大空襲の戦災を蒙り、当時の社長老夫妻の急逝にも動せず、会社の存続に奮闘した。また、MA式鉄骨の施工に関し、努力した功績は大きい。

菊池 文治 大正六年（沖繩生） 日本大学機械工学科卒

現社長と工学院同窓生。昭和三十一年、MA式鉄骨の開発に伴い、当社に入社、MA式の実験・開発に注力する。努力型で芯が強く、難題に対しファイトを燃やす性格。昭和四十二年、モントリオールのカナダエキスポ67に当社より技術開発の目的で視察した。



株式会社 正木鉄工所の創業精神



電通の「鬼十則」

わが社の経営理念

企業経営を行っていくため必要な考え方の基本となる信念について、当社は創業者の個性的な哲学を土台にした「創業精神」を継承し、各個人の努力目標としている。

- 企業を通じて社会に貢献する。
 - 積極進取の態度を持って、心内の鬼と取り組め。
 - 信頼を保つべく責任ある業績を残せ。
 - 常に研究を怠らず、和の力を堅持して業績を發展せしめよ。
 - 実行なくして最大の果実は得られない。
- となっている。

つまり自分に与えられた職場を世上唯一の修煉道場とし仕事一筋に精励すべきということになる(白隠禅師の教訓)。また得意先への感謝の心と、親、社会への恩意識を深め、自己を啓蒙開発し向上させて、自己の天性を遺憾なく発揮することのできる場所でもある。

当社は江東区に創業し、七十年の歴史を刻み、鉄骨、製缶など鉄工一筋に徹し「生中に生なく、死中に生あり」の浮沈、激動の連続など経営環境の変化に対応して今日に至っている。この間、大谷重工業(株)問題の対応は業界のため、関連業者の大同団結により成果を上げている。「工業で興せふるさと江東区」をモットーとして、工業立国日本の工業再建に全力を傾倒している。

あとがき

拙い文章をお読み戴いてありがとうございます。

時間が不足して、夜とか休日にも原稿を書き、思い出してはまたつけ加えましたので、編集に当たった日刊工業新聞社の西山明氏と同社、松田周三城東支局長のご苦勞に感謝し、かつ周囲の皆様へかけたご迷惑をお詫び申し上げます。

七十年間、「なにもしなかった」ことを悔います。

今後、二十一世紀に向けて時代は大いに進化しましょう。それに伴って「リスク」はつきものです。

そうした時代にも今日までお育てを戴いた皆様様が、心からのあたたかいご指導・ご鞭達を今後もかわることなく、さらに厳しくお与え頂くことを重ねてお願い申し上げます。

御礼とお願いをかね、ご挨拶とします。有難うございました。

昭和六十二年十一月十日

株式会社 正木鉄工所

代表取締役 正木 健三

七十年の歩み

年	月	会社関係	社会の動き
大正五年 (一九一六)	三月	現・江東区毛利町二十六―二に正木愛次郎が正木鉄工所を創立	工場法施工(九月)
大正六年 (一九一七)	十一月	現・社長健三、正木愛次郎の三男として同所に出生	ロシア革命(三月) 金輸出禁止令(九月)
大正十二年 (一九二三)	九月	関東大震災に遭遇(全焼) 山本五郎(中国人)救助	関東大震災(九月) 山本権兵衛内閣成立(九月) 支払猶予令公布(九月) 虎の門事件(十二月)
昭和三年 (一九二八)	七月	現・社長健三、腸チフスで入院	不戦条約(日本を含む十五カ国が調印) (八月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和四年 (一九二九)	十月	健三の姉・こう逝去	金解禁断行決定(十一月)
昭和八年 (一九三三)	四月	猿江の工場を閉鎖し、現・大島に工場再開	独、ヒトラー内閣成立(二月) 日本、国際連盟脱退(三月) 米、ニューディール政策開始
昭和十年 (一九三五)	十月	健三の兄・正木茂 結婚 現・社長健三、工学院卒業 正木鉄工所に勤務	伊、エチオピア侵略開始(十月) ロンドン軍縮会議開催(十二月)
昭和十二年 (一九三七)	十月	岩手県釜石製鉄所の機械・鑄物工場を着工	文化勲章制定(二月) 日華事変起こる(七月) 戦時経済立法公布(九月) 日独伊防共協定調印(十一月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和十四年 (一九三九)	一月	現在の東京都江東区東砂一丁目三番三十五号に移る 株式会社 正木鉄工所 設立 資本金十万円 代表取締役 正木愛次郎 本店 日本橋区本町一丁目三番地	ノモンハン事件(五月) 国民徴用令公布(七月) 価格等統制令公布(十月)
昭和十五年 (一九四〇)	四月	外山賢治、栗林製作所で作業中事故死 郷ヒサ、正木家に嫁す 釜石製作所の線材工場鉄骨工事を受注	日独伊三国軍事同盟調印(九月) 紀元二六〇〇年式典挙行(十月)
昭和十六年 (一九四一)	三月	愛一出生(茂・長男) 本店を現在の東京都江東区大島三丁目九番八号に移転 資本金 十九万五千円に増資 健三(常務)応召出征 健三・長男正一出生	日ソ中立条約調印(四月) 太平洋戦争始まる(十二月)
	七月		

年	月	会社関係	社会の動き
昭和十七年 (一九四二)	七月	健三の妹・富美子逝去	米機、本土初空襲(四月) 関門トンネル竣工(六月)
昭和十八年 (一九四三)		日本製鉄輪西製鉄所の線材工場完成	山本五十六連合艦隊司令長官戦死(四月) 伊、無条件降伏(九月)
昭和十九年 (一九四四)		当社、日本製鉄兼二浦製鉄所建設工場に出張(所長今坂義雄氏) 茂(専務)応召出征	連合軍、ノルマンジー上陸(六月) サイパン島陥落(七月) 北九州地方にB29の来襲(十月)
昭和二十年 (一九四五)	三月 九月	東京大空襲で健三の両親(愛次郎・ませ)逝去 一切を灰燼に帰す 代表取締役 正木茂・正木健三共同代表 応召を解除 大島で再建に着手(建三)	米軍、沖縄占領(六月) 広島、長崎に原爆投下(八月) ポツダム宣言受諾、無条件降伏(八月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和二十一年 (一九四六)	四月 九月	大島工場に仮事務所完成 大島工場に機械工場稼働	金融緊急措置令(新円切換)(二月) 吉田茂内閣(第一次)成立(五月) 日本国憲法公布(十一月)
昭和二十二年 (一九四七)	二月 四月	健三次男・房雄出生(現・工場長) 当社取締役、増山正造逝去	労働基準法、独占禁止法公布(四月) 六・三制の小・中学校発足
昭和二十三年 (一九四八)	十一月	茂専務、シベリヤより帰還 当社、現取締役(経理担当)広瀬勝次入社	新制高等学校発足(四月) 昭和電工疑獄事件(六月) GHQ、経済安定九原則発表(十二月)
昭和二十五年 (一九五〇)	十二月	藤倉電線(株)の巻棒用口金を受注	朝鮮戦争勃発(六月) 特需景気起こる 電力再編成促進(十一月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和二十六年 (一九五二)	七月	茂社長の自宅、落成(砂町工場) 改正商法により定款変更 資本金 百五十万円に増資 代表取締役 に正木茂就任	サンフランシスコ講和条約調印(九月) 民間放送開始(九月)
昭和二十七年 (一九五二)	七月 十二月	健三、社団法人・倫理研究所全東京青年 会会長に就任 「秋津書道会」創立	第二十三回メーデー、東京で暴動化(五 月) IMFと世界銀行へ加盟(五月)
昭和二十九年 (一九五四)	一月	健三長女・由美子出生(村崎家に嫁す) 砂町工場稼働	ビキニ水爆実験で第五福竜丸被爆(三月) 防衛庁、陸海空自衛隊発足(七月) 青函連絡船、洞爺丸が転覆、死者行方不 明一、一五二人(九月)
昭和三十年 (一九五五)			国際見本市開催(四月) 保守合同で自民党が誕生(十一月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和三十年 (一九五五)			神武景気
昭和三十三年 (一九五八)	十二月	岩手県釜石商業協同組合橋桁工事、着工 MA式鉄骨、実用段階に入る	東海村原子炉点火(八月) ソ連、人工衛星スプートニク一号打上げ に成功(十月) なべ底不況
昭和三十三年 (一九五八)	十月	健三考案の連続リブ方式によるMA式鉄 骨緒に着く 工場新設(建築主、浦和市 日伸工業株式会社)	米、第一号人工衛星打上げ成功(二月) 関門国道トンネル開通(三月)
昭和三十四年 (一九五九)	三月	第十一回東京都優秀発明展に連続リブ方 式によるMA式鉄骨を出品、優秀発明賞 を受賞	メートル法施工(一月) 皇太子ご成婚(四月) ソ連、宇宙ロケット月面到着(九月) 岩戸景気

年	月	会社関係	社会の動き
昭和三十六年 (一九六一)	九月 十二月	健三、法務大臣より保護司委嘱 代表取締役正木茂、病死のため、代表取 締役に正木健三就任	国民皆保険制度が発足(四月) 第二室戸台風の来襲で、近畿地区大被害 (九月) 北方領土問題で日ソが応酬(九月)
昭和三十七年 (一九六二)	四月 九月	資本金、三百七十五万円に増資 東砂へ新工場設立(約千四百平方メートル) ホテル・ニューオータニ、オープン 今坂義雄、当社会長に就任 檜崎造船(株)、岡崎工業(株)とMA式の使用 権の貸与を締結	北陸トンネルが完成(八月) 三河島で列車事故、死者一六〇人、負傷 三二五人(五月) 若戸大橋開通(九月)
昭和三十八年 (一九六三)	四月 五月	資本金 六百万円に増資 当社工場建家新築完成	統一地方選挙行なわれる(四月) 米、ケネディ大統領暗殺(十一月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和三十九年 (一九六四)	四月	資本金 七百万円に増資	東海道新幹線開業(十月) 第十八回オリンピック東京大会開催(十月)
昭和四十年 (一九六五)	四月	資本金 八百四十万円に増資	山陽特殊鋼倒産(三月) 朝永振一郎博士、ノーベル物理学賞受賞 (十一月)
昭和四十一年 (一九六六)	九月 十月	健三社長、欧州七カ国、二十一日間視察 旅行 砂町工場内に本社事務所新築完成 当社創業五十周年記念式典実施(砂町工 場)	航空機事故相つぐ(全日空機東京湾に墜 落、カナダ航空機羽田で炎上、BOAC 機が富士山頂で空中分解など)
昭和四十二年 (一九六七)	四月	現・砂町工場に本社を移転	資本取引の自由化実施(七月) 西日本に豪雨被害(死者行方不明三七一人) (七月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和四十三年 (一九六八)	四月 五月	大谷重工業(株)問題で「協力会」を組織、総理および関係各省に請願する 大谷重工業(株)社長、大谷米太郎逝去 汽車製造(株)より鉄骨・橋梁を受注	十勝沖で地震発生(M七・八)(五月) 川端康成、ノーベル文学賞受賞(十二月)
昭和四十四年 (一九六九)	三月	大島に住宅建築着手 訴訟問題発生(昭和五十五年二月和解成立) 優良申告法人に選定される(第一号)	東名高速道路完成(五月) 米、アポロ十一号で人類初の月面踏査(七月)
昭和四十五年 (一九七〇)		MA式鉄骨を中断し、橋梁製作に転換	人工衛星「おおすみ」打ち上げ成功(二月) 日本万国博、大阪で開催(三月) 公害問題続発

年	月	会社関係	社会の動き
昭和四十七年 (一九七二)	十二月	砂町工場、五トンクレーン設置 定款変更	第十一回冬季オリンピック札幌大会開催(二月) 沖繩復帰(五月) 田中通産相、日本列島改造論発表
昭和四十八年 (一九七三)	五月 七月 十一月	大谷米一氏、ホテル・ニューオータニ代表取締役就任 優良申告法人に選定される 大谷重工業(株)社長、打浪吉朝氏、勲二等 端宝章を受賞	オイルショック起こる(十一月) 江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞(十二月)
昭和四十九年 (一九七四)	二月 三月 六月	今里龍生氏により恐竜三体(一億年前の草食動物タルボザウルス)製作 当社前会長・今坂義雄逝去 健三社長、江東東税務署管内の「優法会」会長に就任	佐藤栄作元首相、ノーベル平和賞受賞(十一月) 経済不況深刻化、倒産件数も史上最高

年	月	会社関係	社会の動き
昭和四十九年 (一九七四)	八月 十月	健三社長、タイ、バンコックへ視察旅行 「東砂工業会」結成	
昭和五十年 (一九七五)	四月	イヴヌワット・マノー氏来日 当社に三年留学 トローカネット(ローリンググラマー)着工	エリザベス英国女王来日(五月) 沖繩海洋博開催(七月)
昭和五十一年 (一九七六)	十一月	当社六十周年記念式典実施(ロッテ会館)	ロッキード疑獄事件起こる(二月) 福田内閣発足(十二月)
昭和五十二年 (一九七七)	九月 十一月	正輝会会長、村田今二氏逝去 未広通り、道路問題発生 大島スカイハイツ建設	日航機、日本赤軍にハイジャックされる(九月) 円高不況・構造不況深刻化

年	月	会社関係	社会の動き
昭和五十三年 (一九七八)	二月	武蔵野市の鉄骨指定業者となる 江東区基本構想、八地区に工業会結成 大島スカイハイツと調停(東京都)	新東京国際空港(成田)開港(五月) 宮城県沖でM七・五の地震(六月) 日中平和友好条約調印(八月) 米、ドル防衛の新政策で円急落(十一月)
	三月 四月 五月 六月	トバン工業(株)、バリタック表彰祝賀会 公文書館(港区浜松町)出向 上野隆一先生独立 杉田賢二氏逝去 トローカネット専務取締役林英雄氏 (法人会会長)逝去 田尻健氏アメリカへ留学	
昭和五十四年 (一九七九)	四月 五月	前川製作所、工事受注 江東区工業連合会結成の準備開始	第五回先進国首脳会議(サミット)、東京で開催(八月) アフガニスタンでクーデター、ソ連軍事介入(十二月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和五十五年 (一九八〇)	一月 二月 四月	鈴木忠一氏逝去 大谷重工業(株)若尾武治氏逝去 江東区工業連合会、結成大会 薄衣邸の新築落成 玉木鉄工所社長逝去 北野家(釜石)結婚式 自家用自動車城東支部長、江口藤夫氏逝去 橋場、大谷家の新築 当社前取締役、山口房治氏逝去 大島工場、和解成立	中国、華国鋒首相来日(五月) 初の衆、参ダブル選挙、自民党圧勝 第二次オイルショック (六月)
昭和五十六年 (一九八一)	二月 三月 四月	標語「工業で興せふるさと江東区」決定 三角鉄太郎氏(前正輝会会長)逝去 中徳氏当社監査役に就任 山田操氏逝去	豪雪被害(北陸、上越)(二月) ポトピア八一開催(三月) 福井謙一、ノーベル化学賞受賞(十月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和五十七年 (一九八二)	二月 四月 七月 九月 十月	健三社長、二十六日より九日間、中国へ視察旅行 健三社長、産業会館検討委員に就任 WESに社長、工場長合格 山崎先生、(株)アマダで講演 健三社長、東京商工会議所選挙立会人となる	フォークランド紛争起こる(四月) 五百円硬貨発行(四月) 東北新幹線(大宮―盛岡間)開通(六月) 上越新幹線(大宮―新潟間)開通(十一月) ブレジネフ、ソ連共産党書記長死去 (十一月)
昭和五十八年 (一九八三)	四月 六月 七月	社長、日本列島西南縦断し実情視察 幸田多美氏逝去 社団法人倫理研究所ビル鉄骨工事受注 東京商工会議所の商工連盟発足	秋田県沖でM七・七の地震(死者行方不明一〇二名)(五月) 第十三回参議院選挙、初の比例代表制(全国区)を導入(六月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和五十八年 (一九八三)	十月	堀口三備氏当社役員に就任 江東区工業連合会のマーク決定 東砂工業会第十回総会開催 布能義由氏逝去	大韓航空機、サハリン沖でソ連空軍機に 撃墜される(九月)
昭和五十九年 (一九八四)	二月	江東区工業連合会に「不況対策本部」を 設置	有明鉦火災で八十三人死亡(二月) 新紙幣三種発行(千円、五千円、一万円) (十一月)
	七月	八田礼氏、勲五等旭日章を受賞 ダイジェスター設計着手	東京世田谷で地下通信ケーブル火災 (十一月)
昭和六十年 (一九八五)	二月	マンション建設「ボーリング」で紛糾 皇居・宮内省参観者休憩所、鉄骨上棟式 打浪吉朝氏夫人逝去	青函トンネル本坑貫通、世界最良の海底 トンネルとなる(三月)
	三月	ヒサ、眼内レンズ手術成功	科学万博「つくば85」開催(三月)

年	月	会社関係	社会の動き
昭和六十年 (一九八五)	四月	筑波万博見学 東京都江東工場連盟の小沢会長逝去	日航ジャンボ機墜落、死者五二〇名の大 惨事となる(八月)
	五月	健三社長、フィリピン(マニラ)視察旅行 東京地裁民事第九部、共同提訴	三光汽船が倒産、負債総額約五千億円 (八月)
	九月	ビジネススクールに着手	
	十二月	マンション問題和解結審	
昭和六十一年 (一九八六)	五月	産業会館、開館 江東区工業連合会に婦人部結成 小型ダイジェスター完成	ソ連、チェルノブイリ原子力発電所爆発 (四月)
	六月	健三社長、ビジネススクール開校運営委 員長となる	英国チャールズ皇太子、ダイアナ妃来日 (五月)
	七月	健三社長 優良法人会会長、勇退 当社取締役正木正一長男健将、北海道よ り東京まで自転車走破	東京外国為替市場、一時一ドル一五九円 九九銭の円高(五月) 伊豆大島三原山噴火(十一月) 天皇在位六十年記念「金貨」発行(十二月)

工事経歴概要

工事年月	註文先	工事名称
大正 十年	株式会社 戸田組 殿	錦糸堀車庫新築工事
十二年	株式会社 戸田組 殿	松本機関庫新築工事
十五年	株式会社 戸田組 殿	早稲田大学記念大講堂鉄骨工事 学士会館鉄骨工事
昭和 三年	株式会社 戸田組 殿	東京大震災記念堂鉄骨工事
十年	小倉石油株式会社 殿	小倉石油(株)タンク四基
十二年	株式会社 池貝鉄工所 殿	池貝鉄工所川崎工場鉄骨工事
十二年十二月	日本製鉄株式会社 殿	釜石製鉄所鑄物および機械工場工事
十三年	大島製鋼所 殿	大島製鋼所鉄骨工事
十四年	日本製鉄株式会社 殿	釜石製鉄所電柱工事
十五年	日本化工株式会社 殿	工場鉄骨工事
十七年	大谷重工業株式会社 殿	二〇号起重機製作
十八年	日本製鉄株式会社 殿	輪西製鉄所線材工場鉄骨工事
十九年	日本製鉄株式会社 殿	兼二浦製鉄所病院新築工事
二十二年	藤倉工業株式会社 殿	工場鉄骨工事

年	月	会社関係	社会の動き
昭和六十二年 (一九八七)	一月	資本金を二、〇〇〇万円に増資	利根川進、ノーベル医学生理学賞受賞 (十月)
	四月	健三社長、東北縦断を行い、実情視察	ニューヨーク株式大暴落(十月)
	五月	江東区工業連合会青年部会発足	竹下内閣発足(十一月)

工 事 年 月	註 文 先	工 事 名 称
二十四年 三月	大谷重工業株式会社 殿	バック製作
二十五年 七月	地球鉛筆株式会社 殿	鉛筆製造機械製作
十二月	東京電力株式会社 殿	小松川支社ホイススト工事
二十六年 八月	藤倉電線株式会社 殿	巻棒用口金
二十七年 一月	東京都 殿	老松橋外一橋、橋桁製作
二十八年 五月	大谷重工業株式会社 殿	七〇取鍋製作
二十九年 一月	大谷重工業株式会社 殿	平炉作業台製作
三十年 二月	大谷重工業株式会社 殿	一〇〇起重機製作工事
三十一年 三月	日曹製鋼株式会社 殿	天井金物製作工事
六月	大谷興業株式会社 殿	鍛造工場ムトン支柱鉄骨工事
十一月	日東化学工業株式会社 殿	ミストキャッチャー製作
三十二年 五月	藤倉ゴム工業株式会社 殿	浦和工場門型柱製作
十二月	三昌工業株式会社 殿	釜石商業協同組合橋桁工事
三十三年 二月	株式会社 大和ゴム製作所 殿	ロートキューアー工場建築工事
六月	株式会社 青柳商店 殿	東北大学シンクロトロン防禦扉製作取付
三十四年 一月	川口ゴム工業株式会社 殿	五段プレス製作
三十五年 二月	大同製鋼株式会社 殿	M・A式スクラップバック六十四個
三十五年 二月	株式会社 吉野工業所 殿	工場新築工事(M・A式)
三十六年 一月	日伸工業株式会社 殿	機械工場増築工事(M・A式)、研究室新築工事(M・A式)

工 事 年 月	註 文 先	工 事 名 称
三十六年 四月	土屋金属工業株式会社 殿	工場改築工事(M・A式)
三十七年 二月	光金属工業株式会社 殿	蒲田工場新設工事(M・A式)
三十八年 八月	三和銅器株式会社 殿	屋外鉄塔製作加工
五月	株式会社 石塚硝子製作所 殿	高圧特殊エヤーレシバー製作
六月	株式会社 伊藤製鉄所 殿	炉用天蓋製作 二基
七月	東都製鋼株式会社 殿	M・A式装入バック三十個
十一月	三井建設株式会社 殿	丸登化成工場鉄骨工事(M・A式)
十二月	東芝製鋼株式会社 殿	煉瓦倉庫新築工事
三十九年 四月	大同製鋼株式会社 殿	M・A式鋼屑バック五十一個
八月	川口ゴム工業株式会社 殿	熱板製作
九月	東芝製鋼株式会社 殿	M・A式材料バック三十個
十一月	大和鉄骨建設株式会社 殿	石川商工建屋鉄骨工事
四十年 四月	三井建設株式会社 殿	三井金属鉱業(株)中央研究所鉄骨工事
四十二年 一月	帝国酸素株式会社 殿	東芝製鋼集塵装置
六月	昭和護謨株式会社 殿	柏工場クレーン製作
四月	株式会社 中野組 殿	荒井製作所筑波工場鉄骨工事
十二月	株式会社 羽生田鉄工所 殿	脱硫缶用台車 十台
四十二年 七月	株式会社 猪狩工業所 殿	日産化学OXO鉄骨製作工事
		五油圧バケット製作 四基

工事年月	註文先	工事名称
四十二年 九月	トピー工業株式会社 殿	平炉装入バック製作
四十三年 三月	株式会社 ホテルニューオータニ 殿	ガーデン外壁工事・屋根工事
五月	丸富建設株式会社 殿	東洋羽毛鉄骨建屋工事
六月	櫻田機械工業株式会社 殿	境橋製作工事
七月	三井建設株式会社 殿	ゼネラルエヤコン下屋工事
十一月	汽車製造株式会社 殿	日本相互銀行階段製作工事
四十四年 四月	櫻田機械工業株式会社 殿	西名古屋アンカーフレーム製作工事
七月	汽車製造株式会社 殿	青森合成桁製作工事
四十五年 二月	緑川化成工業株式会社 殿	竜ヶ崎工場新設工事
三月	株式会社 東京鉄骨橋梁製作所 殿	磯谷橋製作工事
四月	櫻田機械工業株式会社 殿	佐野大橋製作工事
十月	株式会社 羽生田鉄工所 殿	日本ドラム缶(燐)煙突製作工事
四十六年 八月	株式会社 東京鉄骨橋梁製作所 殿	首都高速四号線対傾構製作工事
四十七年 二月	汽車製造株式会社 殿	冷水橋製作工事
九月	川崎重工工業株式会社 殿	フイリッピン向けトラス橋製作工事
十二月	東芝フェンス工業株式会社 殿	勇知橋対傾構製作工事
四十八年 一月	櫻田機械工業株式会社 殿	都十五号地搬入路鉄骨製作工事
六月	株式会社 東京鉄骨橋梁製作所 殿	成田空港駐車場鉄骨製作工事
		新二子橋C橋製作工事

工事年月	註文先	工事名称
四十九年 四月	櫻田機械工業株式会社 殿	跨線橋主桁製作工事
六月	国立科学博物館 殿	恐竜骨組製作 三体(タルボサウルス)
五十年 六月	株式会社 鈴木鉄工所 殿	コークガイド車ジャムクリナー、他製作
十月	トヨーカネツ株式会社 殿	フローティング・タンクローリングラダー製作
五十一年 三月	櫻田機械工業株式会社 殿	十勝ダム主桁製作工事
九月	株式会社 丸二渡辺建設 殿	宇宙航空局研究所クレーン・ランウェイゲーター製作
五十二年 二月	東日本鉄工株式会社 殿	栄橋A橋主桁製作工事、その他
七月	株式会社 石井鉄工所 殿	筑波大学医学系棟ファン架台製作取付工事
五十二年 五月	トヨーカネツ株式会社 殿	回転内梯子製作 二十三基
十月	株式会社 新和製作所 殿	澁川橋外一橋製作工事
五十四年 四月	IHI 殿	秋ヶ瀬橋製作工事
五月	株式会社 中松鉄工 殿	キリンビール取手工場鉄骨工事
十一月	東急建設株式会社 殿	三和BK渋谷支店飯店舗鉄骨工事
五十五年 五月	株式会社 石井鉄工所 殿	屋根骨製作工事 一基
八月	株式会社 石井鉄工所 殿	屋根骨製作工事 二基
十月	IHI 殿	北辰ダム管理橋製作工事、環状八号線高架橋單純桁製作
五十六年 二月	株式会社 前川製作所 殿	和光調整所ファン架台製作工事
三月	トヨーカネツ株式会社 殿	二七、〇〇〇kDRT屋根骨製作工事 一基

工事年月	注文先	工事名称
五十七年 一月	株式会社 奥村組 殿	皇居警察本部庁舎、弓道場、射場鉄骨工事
二月	トヨーカネツ株式会社 殿	六〇、〇〇〇kldRT屋根骨製作工事 一基
三月	IHI 殿	住友市ヶ谷ビル鉄骨製作工事
五十八年 四月	IHI 殿	大正海上ビル第六、十節鉄壁製作工事
十月	東洋エンジニアリング株式会社 殿	タイ国ガスプラント架構 一式
十一月	株式会社 奥村組 殿	皇居警察本部庁舎渡り廊下鉄骨工事、ルーバー下地鉄骨工事
五十九年十二月	三和ビル建設株式会社 殿	山崎ビル鉄骨工事、橋本ビル鉄骨工事
六十一年 一月	東京工業大学 殿	梁試験体 四基
大成建設株式会社 殿	倫理文化センター鉄骨工事	
IHI 殿	KDD横浜局舎鉄骨工事 一節、二節、三節	
竹中研究所 殿	試験体 一式	
四月	IHI 殿	品川電々ビル鉄骨工事 五節
五月	IHI 殿	宮内庁参観休所鉄骨工事
十月	株式会社 奥村組 殿	品川電々ビル鉄骨工事 一式
六十二年 三月	IHI 殿	LM新中野第二鉄骨工事
八月	武蔵建築株式会社 殿	宮下湯ビル鉄骨工事 一式
戸田建設株式会社 殿	第七・第八なとりビル鉄骨工事	
日産建設株式会社 殿	黒田産業本社ビル鉄骨工事	
九月	IHI 殿	

工事年月	注文先	工事名称
六十一年 十月	宮本木材工業株式会社 殿	宮本邸新築工事
十一月	株式会社 今西組 殿	東矢口マンション鉄骨工事
六十二年 一月	白石建設株式会社 殿	YKビル鉄骨工事
IHI 殿	日産建設株式会社 殿	横田基地管理棟鉄骨工事
二月	IHI 殿	東京ベイヒルトン・インターナショナル(A工区)鉄骨工事
三月	三和ビル建設株式会社 殿	リクルート川崎コンピュータービル鉄骨工事
IHI 殿		三報ビル鉄骨工事
四月	IHI 殿	東京ベイヒルトン・インターナショナル(C工区)鉄骨工事
IHI 殿		京橋消防署鉄骨工事
IHI 殿		大川端リバーシティ21開発事業K棟鉄骨工事
五月	IHI 殿	中央区新富区民館鉄骨工事
六月	武蔵建築株式会社 殿	LM板橋第二鉄骨工事
IHI 殿		日航(株)成田Aハンガー鉄骨工事

鉄は熱きうちに打て

創業七十年史

非売品

昭和六十二年十一月十八日 初版一刷発行

©著者 正木 健三

発行 株式会社 正木鉄工所

東京都江東区東砂一丁目三番三五号 〒一三六

電話 〇三(六四六)五四〇一代表

FAX " 五四〇四

製作 株式会社 日刊工業新聞社

東京都千代田区九段北一―八―十